2+1one

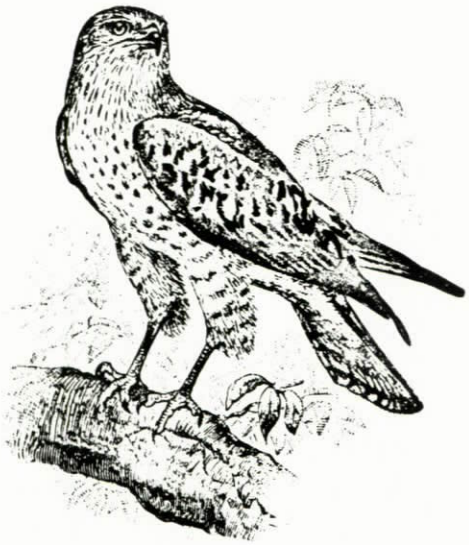
1978年6月

21世紀フォーラム会報

0

20+1one

21世紀フォーラム会報 no.0



2o1ne no. 0

21世紀フォーラム会報0号

表紙のことば――鳥と地球。いまや失速しつつあるかに見える"宇宙船地球号"
21世紀へと鳥のように飛翔する有効な方策は何か？

発起人から

日本人と価値観　松本重治……4
日本人と国際化　中山伊知郎……5
実事求是と専衆結合　茅　誠司……6
未知の時代に向かって　加藤芳郎……9
山村の21世紀　加藤秀俊……10

部会メンバーから

21世紀にそなえて　稲葉秀三……12
貿易と農業　大来佐武郎……14
エネルギーと選択　大島恵一……15
21世紀のイメージ　篠原三代平……16
イェニ・チェリ　松山幸雄……17
私の趣味　滝田　実……18
日本人に期待すること　田崎　潤……18
ユーモア、ノー、モア　加治　章……19
未来感覚　本間長世……20

21世紀フォーラム部会記録

世界の中の日本　〈中山伊知郎グループ〉……26
21世紀における日本人の生き方　〈松本重治グループ〉……36
明日のエネルギー　〈茅　誠司グループ〉……44
日本の危機―ここが知りたい　第1回・第2回　〈加藤芳郎グループ〉……52
村の将来を考える　加藤秀俊……62
日本の村の将来　〈加藤秀俊グループ〉……64
大正文化研究　〈小松左京グループ〉……66

事務局から

21世紀フォーラム事始め　生田豊朗……72
21世紀フォーラムの構想　笠井章弘……74
21世紀フォーラム運営の一年　山田　嗣……77

カラーページ

Energy…　Sun's vibration……21

21世紀フォーラム設立趣意書……80
21世紀フォーラム部会メンバー一覧……81

I.発起人から……

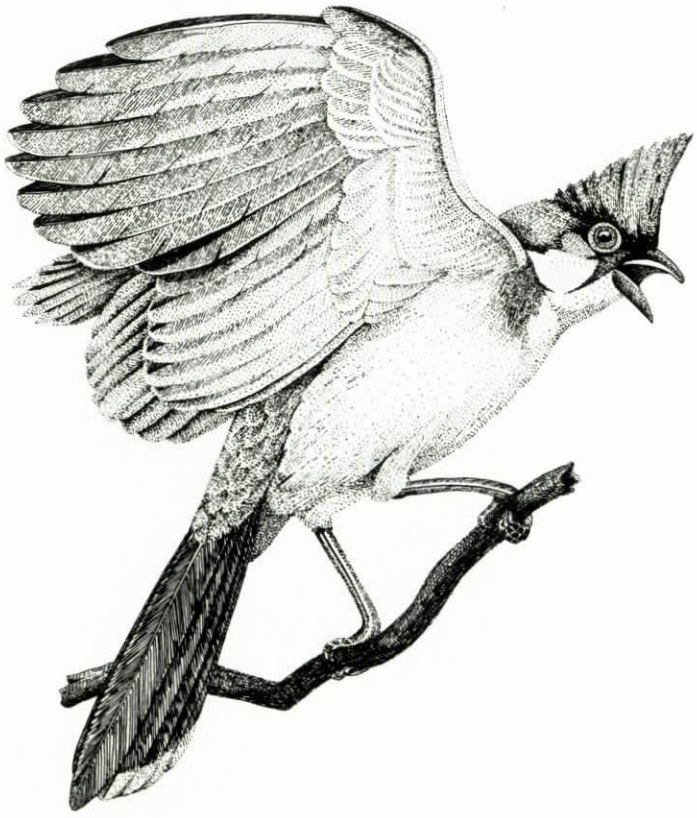
松本重治

中山伊知郎

茅誠司

加藤芳郎

加藤秀俊



日本人と価値観

松本重治
（国際文化会館理事長）

私がいま一番問題にしているのは、人間の価値観とか生き方という、いうならばものごとの〝根本〟にかかわる問題です。

南北問題ひとつをとっても、今や発展途上国のなかにはＧＮＰで先進国に追いつくということを国家目標にすることをやめてしまう国も出てきています。彼等は、物質的には単純な生活でありながら、精神的・文化的には豊かな生活をすればよいのではないか、と考えはじめています。つまり彼等は彼等自身のライフ・スタイルを自主的に自己規定してゆこうとしているわけです。

日本人は、高度成長期に物質的な豊かさにひたりきって、ややもすれば精神的・文化的な豊かさを忘れがちでした。しかし、最近では、こうした考え方もだんだんと変わりつつあり、精神的価値の再発見を望む傾向も見えはじめました。

数年前、東南アジアの知識人を15人ほど呼んでお話を聞いた時、「大東亜共栄圏」の案をわれわれが出すから、そこに日本も入ってくれと彼等が提案したことがありました。こういうふうにひと言でいうと誤解を受けるかもしれませんが、要するに、日本人の物質的な生活水準の向上を押えて、あるいはむしろ下げて、もっと精神的・文化的に豊かなものを求めるという価値観に転換すべきであるという提案だったわけです。つまり、「逆の大東亜共栄圏」という発想ですね。

そもそも、食糧とエネルギーが世界的な問題になると20年前に警告したのは、ハリソン・ブラウンという人なのですが、彼は自分のこの発言から実際に行動を起して、それまで住んでいた沢山部屋のあったアパートを引き払って小さなアパートに越してしまった。生活自身もひじょうにシンプルなものにして、スーツ一着に上着一着ぐらいしか持ってこないということをやったわけです。私はこのハリソン・ブラウンの生活態度を尊敬しているんですが、彼はさらに、牛肉なんかあまり食べるなといっています。つまり、いくら牛肉が高いといっても、エサはもっと高いというわけです。そういうことからいうと、ハマチなんかも、同じですね。

それから、昔エレノア・ルーズベルトが国際文化会館に来た時に二皿料理を出したら、「いらん」といわれたことがあるんです。それは、第二次大戦中の生活の実践から来ている考え方なんですが、戦争をしているのに二皿なんか食べていられない、それに体が悪くなるから一皿でいいじゃないか、というわけです。それ以来、国際文化会館では、どんな会合があっても、全部一品料理ですませています。もちろんスープをつけたり、サラダをつけたりということはするんですが、フルコース・ディナーはやらないことにしています。もっとも、絶対肉は食べるなというと、ちょっと私も困るんですがね。

問題は、自分の生活のスタイルを自分でどの様に選択してゆくかということだと思うんです。私の恩師の高木八尺先生という方は、アメリカ史の権威だけれども、アメリカにメイ・フラワー号でやって来た人々の精神を今でも受け継いでいらっしゃる。それで、88歳になられるのに自分だけの時にはセントラルヒーティングをつけない。ところが、私が行くと暖房をつけてくれるんです。国際文化会館をつくった時にも、先生が冬のヒーティングは必要だけれども、夏のクーリングは要らんだろうというので止めにしたんです。もっとも、そうしたら、夏に来る人がいなくなってしまい、増改築した時にクーリング設備を入れたんですがね。

つまり、どの様に考え、どの様に生きてゆくのかということをひとりひとりがしっかりと把握することが重要なわけで、そのなかで、できるだけシンプルな生活、知恵のあるシンプルライフというものを楽しむということが、いま求められていることだと思っております。

21世紀フォーラムでも、こうした観点から、物質面の向上にどうしても目が行きがちになってしまった日本人の生活を見なおして、21世紀に向う新しい価値観とはどんなものか、皆さんと共に考えてゆこうと思っています。（談）

日本人と国際化

中山伊知郎

（一橋大学名誉教授）

日本は、政治についても外交についても、また経済についても、国際化ということを身につけなければ、21世紀に向けてしっかりと足を踏み出してゆけないと思います。

西洋の側からみると、「自分だけは特殊なのだ」という日本の考え方、もののとらえ方を捨ててほしい。もう少し、自由な気持でものを見たり考えたりする習慣をつけてほしいということが日本に対する共通の希望であり、同時に批判なわけです。

ところが、逆にそうした批判を受け入れれば、日本のユニークさ、特殊性を捨てることになる。ユニークさを捨てて世界という一般的な舞台に出ようという意味での国際化にはやはり限界があるし、やってみてもそれほど有効ではないという考え方もあるわけです。極端に言えば、むしろ日本は、日本のユニークさというものを元にしてものを考えるというやり方を捨てるべきではない。その方がかえって日本の存在が世界に認められ、おそらく批判もあるだろうけれども、逆に理解も生まれるであろうというわけです。

現実の問題としては、おそらくこのふたつの考え方の真中を行くことになると思います。もちろん揺れながら、ある時には右に寄り、ある時には左に寄るという様なことにならざるをえないわけです。

しかし、「ザ・ジャパニーズ」という本のなかで、ライシャワーさんの様に日本に住み日本人を妻にし、日本文化に非常に深い理解を持っている人が、なじめない面があると言っています。日本をよく理解している人が、なおかつ日本をユニークであると考えているわけです。この点は、そうとう重さを置いて考えてもいいんではないでしょうか。

日本のユニークさというものが、理解しがたいユニークさになってしまっていることが問題なのであって、それを何とか解明することが、これから国際社会に入ってゆく日本人のさしあたっての課題ではないかと考えています。

それでは、その道をどんなふうに進んでいったらいいのか。

経済を例にあげますと、今の日本は原料輸入、加工輸出という長い伝統の上に依然として立っているわけです。そういう形から今後は、資源産出国と手をつないで、一諸に開発してゆくような形にもってゆかなければならない。

あるいは、同じ加工輸出をしているECの国々やアメリカとどんなふうに手をつないでいくのかということを考えましても、本当の国際化をすすめるためにはいろいろな障害があるんです。その障害に対処する道が同時に日本の国際化をすすめる道になるといえます。

これは、経済だけのことではなく、文化の面でも、政治の面でも同じ様な問題があるのではないでしょうか。さらにはたった一人の旅行者というような方にも、こうした問題はのしかかっているのです。

21世紀といっても、もう目前のことだからあまり時間もないかもしれないけれど、しかしこうした問題を考える、最もタイムリーな時期に来ているといえるのではないでしょうか。（談）

「実事求是」と「専衆結合」

茅誠司
（東京大学名誉教授）

昨年の十月、「中日友好協会」の招きを受けて、私は岡崎嘉平太さんと中国を訪問しました。わずか五日間の訪中で、「中日協会」の用事が中心だったので、あわただしい日程でしたが、大変得るところの大きい旅でした。

最も強い印象を受けたのは、会う人が皆、実にいきいきと自信に満ちた様子で仕事に励んでいる姿でした。数年前訪中した時の印象では、中国の人々には何か“まなじりを決して”という、張りつめた様子が感じられたのですが、今回は中国の人々のものいいにも表情や態度にも、以前にはなかったのびのびとしたものが感じられたのです。このことを中国側の人に話したところ、それは例の「四人組」の桎梏がなくなり、国民の間に本来の意味の「自力更生」の気運が盛り上ってきたからだ、という説明でした。

「自力更生」ということばは、言うまでもなく、革命後の中国における最も基本的なスローガンの一つであり、新しい中国という国を、より豊かで、より幸福な国につくり上げていく際、他国の援助や協力をあてにせず、中国人みずからが持てる力を最大限に発揮することによってそれを達成してゆこう、という意味合いで用いられているようです。近年中国であらゆる機会に叫ばれている「農業は大寨に学び、工業は大慶に学べ」という合い言葉も、この「自力更生」の具体的典型例である「大寨」と「大慶」を普遍化してゆこうとするものでしょう。

今回の中国訪問では、「実事求是」と「専衆結合」ということばの現実を目のあたりにすることが出来、科学者としてまた日本人の一人として、大いに感ずるところがありました。

最近世界の注目を浴びている中国の地震予知の方法について中国側の専門家に話を聞いたのですが、いま中国では、広汎な大衆が参加して地震予知活動が展開されているというのです。まず、一般の大衆が自発的に地震の基本的知識を学習する。これにはもちろん専門家が指導や協力をする。次に大衆のひとりひとりが自分の力で自分の身のまわりで出来る様様な地震予知のための具体的作業を実践する。その結果を逐次各地の担当機関に報告、連絡する。各地の情報をセンターに集めて専門家が分析して予知を行う。その結果を大衆に伝える……。これを永続的に続けてゆくというのです。

この様なやり方が「自力更生」であり、「専衆結合」ということなのだ、と中国側の人々は説明します。

「科学」というものは、すべて、まず現実に生起している具体的事実（facts）

の正確な観察から始まります。そして、この“ファクツ”を出来るだけ多く集め、それを様々な方法で分析し、その過程の中から一定の「法則性」を発見してゆくわけです。従って、「実事求是」とは、まさに「科学」のプリンシプルそのものであると言えます。

「専衆結合」とは、このような意味での「科学」を、大衆と専門家が有機的にしかも固く結合しつつ、“科学する”という社会的理念を意味するもののようです。地震予知についていえば、井戸水の水位を測ったり、ラドンの放射能を計測したり、動物の姿態を観察したり、植物の生育状況をつぶさに記録したり……という根気のいる作業を、広汎な大衆が自発的に営々と実践してゆく。そのような大衆の営為に立脚して専門家が真剣に分析研究する。これがあの世界の人々を驚かせた中国の正確な地震予知の輝かしい成果を生んでいる秘密だったわけです。

わが国日本は、たしかに科学技術と産業経済の発達の点では世界の最先端に到達している国の一つといえるでしょう。しかし、国民生活の維持、向上に不可欠なエネルギー資源の大部分を海外に依存し、その他の鉱物資源も乏しく、食糧でさえ自給できていない一億一千万人の日本です。しかも世界は今や厳しいバウンダリー・コンデションの時代に突入しているのです。地球は有限であり、かつてのような無制限の国際的自由競争はもはや許されなくなって来ています。お金さえ払えば、海外からいくらでも安いエネルギーや資源を買えるという時代は終ったのです。これからの世界は、インターディペンダンスの時代です。科学技術と産業経済の力でどんどんモノを作り海外に売り、そのお金で海外の資源を買いまくる、というこれまでの日本のやり方は次第に通用しなくなってきているのです。

それではどうしたらいいのか？　バウンダリー・コンディションという制約の下でインターディペンダンスを貫きながら、どのようにしたら日本は無事21世紀にたどり着くことができるのか？　いま私たちすべての日本人は、役人も知識人も企業の経営者もそして国民のひとりひとりがこの問題を自分の頭で真剣にしっかりと考えてゆかねばならないと思います。

この問題を考える際ひとつの重要なヒントとなるのが、「自力更生」であり、「実事求是」、「専衆結合」であると思います。

他人（ひと）の命令によるのではなく、国民のひとりひとりが自分というもの――その持てる力、可能性、そして知恵と努力――を十全に発揮してゆくこと。そして国のリーダー層や、知識人、専門家がそれをしっかり受け止め、それを活かし、それを実現していくことができるような社会。そのような社会をこの日本に現出させてゆくためにはどうしたらよいのか。わが〈21世紀フォーラム〉をひとつの“場”として、私はこれからもこの問題について真剣に考え続けてゆくつもりです。

（談）

未知の時代に向かって

加藤芳郎
（漫画家）

私たち日本人が、終戦直後のあの一面の焼野原の中に立って茫然自失していた頃から早くも33年の月日が流れました。

これまでの33年間を振り返ってみると、「ほんとに私たちは何やら無我夢中でやってきたんだなあ！」という思いがします。戦後数年間の焼け跡と飢えの中でのガムシャラな戦後復興の時代。その次“神風”のように現われた朝鮮戦争による“動乱景気”。これで日本の経済復興は一挙に軌道に乗ってしまった。アメリカさんが出ていって日本も一人立ちの経済建設が始まった。60年安保で国がひっくり返るような騒ぎになったけれども何とかそれも乗り越えて「もはや戦後ではない」ということになりました。そして“黄金の60年代”。毎年ＧＮＰの伸びが二ケタを越える途方もない高度成長の年々。あれよあれよという間に“ＧＮＰ世界第２位”の“経済大国”にのし上ってしまいました。

この“黄金の時代”があまり永く続くので、私たち日本人はこの平和で豊かな日々が永久に続くのでは？という甘い錯覚に陥っていたフシがあります。斯く言う私自身もその一人。

しかし、やっぱりいい事はそう長続きするわけはありません。案の定、70年代に入るととたんに、公害問題、環境破壊、消費者問題などがドッと噴出してきました。外からは国際通貨危機のあげくの”ニクソンショック”、続いて決定的なノック・アウト・パンチになったかの“石油ショック”。これでさしものわが高度成長もあえなくダウン。

気がついてみればどうでしょう。石油危機だけじゃなく、その他のエネルギーもお先真っ暗。そして、地下資源のほとんどを海外に頼り、食糧ですら自給率は先進国中最下位で“純日本食”と信じ込んでいたソバですらその過半は外国から輸入しているというじゃないですか。それではと、「陸がダメなら海があるさ」と思ったとたんの“200カイリ時代”。世界に冠たる日本遠洋漁業も今や瀕死の重傷のありさまです。かてて加えて地震の頻発など天変地変の兆しさえ……。

「これからどうなるんだろう？」誰もが定かならぬ薄暗い不安を抱き始めています。私もモヤモヤとしたイラダチに似た不安が胸の中でわだかまっています。「日本は今や危機のまっただ中にある」といわれます。しかし、その“危機”の中味がどうもはっきりしないのです。「こういう危機なんだ」とはっきり自分で理解できれば胆の据えようもあるというものです。はっきりしないからよけいイラダツのでしょうか。

私が自分なりにヒフで感じていて、はっきり言えることは……「いま、ひとつの時代が完全に終って、新しい未知の時代が始まろうとしている」ということと、「その未知の時代に対応するためには、この二十数年来の間に“平和ボケ”した頭ではダメだ。」そして「これからの時代が“危機の時代”だとすれば、その危機を脱出する方策を考えることを他人頼み——赤じゅうたんの上の政治家さんや国のお役人さんや偉い学者さんやら——にしていられない。あらゆる分野の人々が、それぞれの自分の頭で自分なりに考えてゆかなくてはいけない」———ということです。

「21世紀フォーラム」の呼びかけ人に加わって、仲間を集めて21世紀への問題を自由に話し合う集まりをつくらないか、と持ちかけられたとき、二つ返事で引き受けたのは、日頃こうした想いを持っていたからです。

私たちのグループは、芸能関係者や漫画家でメンバーを構成しています。皆さん、分秒刻みのスケジュールに追いまくられて“21世紀への問題”などということをじっくり考えてみる暇などありようがない人ばかりです。だからこそこういう“場”の意味があると思うんです。

これまでに３回集まりを持ちました。メンバーの年令構成は60代から10代まで。珍論・奇論百出です。しかし、芸能人や漫画家のひとつの特質であるカンによる鋭い意見も出て来ています。メンバーに共通しているのは、旺盛な“好奇心”と物にこだわらない“闊達さ”です。私達のグループはこの好奇心と闊達さを武器に、「21世紀フォーラム」の中の異色グループとして、今後も大いに議論を進めてゆくつもりです。

（談）

山村の21世紀

加藤秀俊

（学習院大学教授）

未来というのは、突然に目のまえにあらわれてくるものではない。それは、これまでの時間のつみかさねの延長線上にあり、したがって、過去のことを知らなければ、よりたしかな未来はつかみにくい。だから、できるだけむかしのことをしらべながら21世紀をながめることにしたい――このフォーラムに参加するにあたって、わたしは第一にそうかんがえた。

しかし、そうかといって、歴史の本を読んでいたのでは、これまた未来研究にはなるまい。わたしは、社会学を勉強するひとりの人間として、体験的・具体的な事実のなかにこそ、現実社会をうごかかす力がある、という信念をもっている。だから、これまでの何十年かを生きてきた人びとに直接に話をきいて、いったい、これからどんな見通しをもっているのか、を教えてもらうことにした。21世紀フォーラムのやり方としては異色だが、とにかく、フィールド研究によるチーム編成をすることになった。宮本常一、米山俊直のおふたりをさそい、ときには東京で、ときには日本のあちこちであつまって、いわば、日本の根っこの部分が21世紀にむかってどんな状態にあるのかをかんがえようというわけだ。

歴史をさかのぼる、フィールド研究をやる、というこの二点で、すでに相当に会のなかで異端的だが　それにくわえて、わたしは、日本のなかでもっともとりのこされた部分に着目し、そこをさしあたりのフィールドにしよう、と決意した。社会には、つねに先端の部分と、おくれた部分とがあり、そのふたつの部分には、大きな落差がある。われわれは、ややもすれば先端部分に照明をあてる傾向があるけれども、とりのこされた部分の人びとがしあわせになってこそはじめて国ぜんたいとしてのしあわせがある、とおもわれるからだ。そこで、山村をとらえてみることにした。

もっとも、これには、わたしのエゴもある。というのは、社会学の看板をかけながら、ここ5年ほど、いっこうにフィールド研究をしていないからだ。21世紀フォーラムにたいして、なんらかの貢献をするためには、わたしは、まず、じぶんのからだとこころの錆おとしをして、腕をみがかなければならぬ。21世紀フォーラムの活動開始を契機にして、みずからをほんらいの学問の正道にひき戻すことができれば、こんなにありがたいことはない。さいわい事務局は、こうしたわたしの風変りな研究計画をはげましてくれた。そんないきさつもあって、わたしは、日本のあちこちの山村の人たちから話をきかせてもらう、というチャンスにめぐまれた。まことに教えられることの多い日々である。

どうも、話が前後してしまったけれども、わたしは、日本の21世紀を、日本の根もとの部分でかんがえてみよう、というつもりでこの会に参加させていただいたのである。未来というのは、べつだん政策決定者の決めるものでもない、また、決められるものでもない。つぎつぎに、生きかわり、死にかわってゆく日本人――その名もなき日本人が、すこしずつ、みずからの明日を設計し、その集積がこの国ぜんたいをうごかしている。未来をつくってゆくこの巨大な力を微分してゆけば、結局は、民衆ひとりひとりの未来への見とおし、というところに落着くだろう。それをあらためて学んでみることに、わたしは意味を発見したい。

じっさいに、山奥の村にはいってみると、いろんなことがわかる。昭和26年ころまで電気のなかった村もある。テレビの見えない村もある。ついこのあいだまで、炭焼をやっていたのに、木炭というものの需要が激減して、転進を余儀なくされた村もある。木炭の歴史については、柳田国男先生のすぐれた考察があるけれども、ときには魔術的なものとして、ときには日常の必需品として、日本人の生活から切りはなすことのできなかった木炭というものの歴史のおわりの部分を、しっかりと見とどけておくことも、日本人としてひとつの義務であろうか、ともおもわれるのである。

社会は進歩する。古いものは、あたらしいものによって置きかえられていく。それを、ひとは技術革新と呼ぶ。それによってわれわれの暮らしがゆたかになるのは、ありがたいことだ。しかし、同時に、置きかえられ、忘れられてゆくものについて、社会がどのような配慮をほどこしているのか――ゆたかな未来設計には、そういう思いやりもぜひ必要であろう。過去と未来の両方をふたつの目でじっと眺め、同時に、歴史の主体としての「人間」を忘れないこと――むずかしいしごとだが、21世紀フォーラムの役割は、そこにあるのではなかろうか、とわたしはかんがえている。

II. 部会メンバーから……

稲葉秀三

大来佐武郎

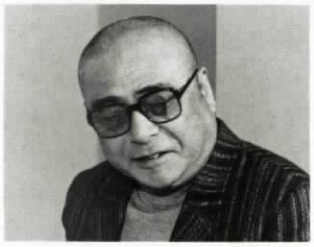
大島恵一

加治章

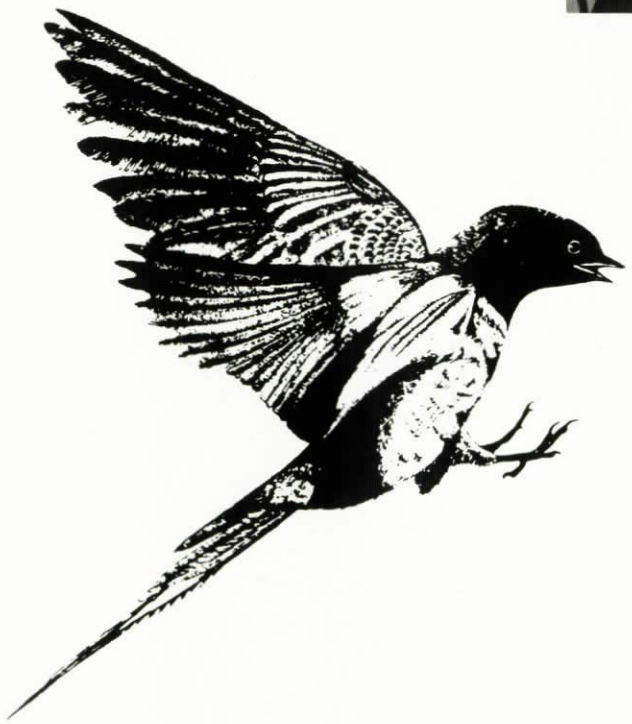
篠原三代平

滝田実

本間長世


田崎潤

松山幸雄



21世紀にそなえて

稲葉秀三
（産業研究所理事長）

私は1907年の生まれなので21世紀まで生きのこる自信は全くない。しかし、もう20年とちょっと先に21世紀になることを思うと、これに対処して、この日本で、また地球の上でどう対処してゆかねばならないかは〝切実〟な問題であると思っている。私がこのフォーラムに参加したいと思ったのもこのような心境からだ。

そこで私の考えている2・3の問題について私見を提示し、御批判をうけてみたい。

その1つ、偶然の機会だが、私は1947年に街の経済学者から政府のなかに入って第2次世界大戦による日本経済の破壊と混乱からどのように経済や国民生活を復興させていくかという調査や政策の立案推進に3年ばかり働いたことがあった。このようなことが縁になって、今日まで自分の時間の相当部分をガバメント・サービスに提供している。

ふりかえってみると、昭和20年（1945年）の日本の人口は7,200万人だった。それが22年には7,800万人に増大した。いうまでもなく敗戦にともなって外地、外国から多くの同胞をうけいれざるをえなかったからであった。しかし当時の国民生活はまことに苦しかった。都市における国民一人当りの消費水準は昭和10年（人口6,900万人）にたいし、平均55%、しかも失業者は街に溢れ、食糧不足のためにあわや大混乱が生じそうだったし、インフレはとめどなく進行していた。22年のGNPは昭和10年頃にたいし、実質65～70%、鉱工業生産は35%見当という低いものであった。これを正常な状態、つまり今後の人口増加を計算して、戦前並に国民生活が国際収支の自立均衡のもとでできる状態に、何時どのようにもっていくようにするか、これが私たちの課題であった。私たちは2回目の作業で昭和28年をその達成の年とし、22年にたいし鉱工業生産を4倍に、農業生産を30%アップに、また輸出貿易を8倍にしていこうという計画をつくった。そしてこれが経済復興計画の目標となった。

幸か不幸か大局的にはそのような水準は達成された。昭和30年代に入って日本はさらに近代産業を確立して、国民に雇用と生活水準の上昇をもたらすことができるようになった。

これらの過程を通じて昭和22年にたいし、石油危機のおこった昭和48年、つまり1947年から1973年までの間に私の個人的な計算では、人口は7,800万人から10,900万人と3,100万人増大し、国民一人当りの生活水準は5.5倍見当上昇し、実質GNPはこの間11～12倍大きくなっている。これを可能ならしめたのは鉱工業生産が42倍、輸入のもとになる輸出が2億ドルから400億ドルと名目200倍の増大をしたことによる。

日本以外の諸国もこのように経済や国民生活が上昇しておればよかったのだが、やや誇大に申せば「世界に多くの国があるけれども日本だけがこういう発展をとげた唯一の国だった」といってもよいのではなかろうか。

ただ日本ではこういう高度成長が30年弱もつづいたので、「経済や国民生活はもともとこういうふうに向上していくものだ。これが普通のあり方だ」、こういう意識がビルト・インされるようになってしまったと私は思っている。これをどう考えるのか。

その2つ。私見によると、石油危機を契機にして、もはや日本経済はこういう状況のもとに発展していくことが困難となった、こう考えている。「高度成長が安定成長になった。10～11%の実質成長が6%ぐらいになるだろう」こう思っている人がはなはだ多い。けれども、私個人はことはもっと重大な変化だと考えている。というのは石油の価格上昇、将来における石油の入手困難が生じるかもしれないこと、将来の資源問題のより重大性、また輸入価格が輸出価格に比べて高くなり、「より沢山の商品を輸出しないと輸入が増加できない」という交易条件のマイナス、これらだけがエネルギー、資源、また食糧などを外国

からより多量に輸入しないと経済や国民生活が上昇しえられない日本経済の制約条件として登場しているばかりでなく、もっと経済の発展と国民生活の向上というものがわが日本人の意識構造の変化をもたらし、多元的社会に象徴せられているように、国民意識、また社会意識というものが分裂してしまって経済や国民生活の将来の上昇のための公共投資や民間投資をうけいれない、うけいれないまでも著しく困難ならしめる事態を招来してしまっていると考えるからである。つまり日本はもっと本質的な転換に直面していると思っている。

このような意味から昭和50年代以降とそれ以前の高度成長期には非常に社会的、経済的パターンが変ってしまっている。私たちはこういうことを前提にして今後の日本がどうなるか、どうしていくかを検討していかねばならないようになっていると思うのである。

同時にこの地球の上でも日本ほどではないけれども、大きな生存のための条件変化が生じていると考えるのである。

その3つ。さて今から22年後に私たちは21世紀に入る。過去のことを考えても判かるように22年という期間はそんなに長い先ではない。いま1億1,500万人の人口の日本でもそのうち7,000～8,000万人ぐらいの人は21世紀にはそのまま存在していると私は思っている。それこそちょっと先のことなのである。

西歴2,000年の日本にはよく判らないけれども1億4,000万人から4,500万人ぐらいの人口が存在しているだろう。この地球全体では定説によるとそのころには65～70億の人口だといわれている。私は若干控え目にして60～65億の人間がすんでいるのだろうと思う。そして国と国、国民と国民の間のへだたりは依然として存在するだろうが、今よりは交通通信の発展によって世界はもっとせまくなっているのではあるまいか。

私の提示したいのは21世紀のはじめになって、1億4,000～4,500万の日本人、60～65億の地球の上の人類がどのように生存しているだろうかということである。今ひとつはのぞましい形で、この地球の人類と国とが生存しうるためには、今から一体どのようなことをこの地球の上で、とくにわが日本でやっていかねばならないだろうかということである。

私は2種類のシナリオをつくるのがよいと思っている。現在の状況があまり大きく変らないとした場合、世界と日本はどうなっているのか。これが1つ。のぞましい姿の場合、世界と日本はどのようになっているのか。これが2つである。

そしてこの1と2をつないでどのようにその間に橋がかけられるか。こういうことをいろいろの角度からみんなが検討してみてはと考えている。

このさいとくに2つの問題に注意を換起しておきたい。これはローマ・クラブの示唆によるものだが、ひとつは食糧、もうひとつはエネルギーについてである。併せていわせていただくと、地球に住んでいる人類というものは2つの矛盾した側面をもっている。端的にいわせていただくとインターナショナリズムとナショナリズムである。私の立場はインターナショナリズムだが、ことはそう簡単なものではない。「地球はひとつ、人類もひとつ」といいたいが、現実にはいろいろ制約がある。これらの要素についても、よく考えてみる必要がある。

21世紀フォーラムの発足に当り、素朴な形で問題と私の希望を提示させていただいた次第である。

貿易と農業

大来佐武郎

（日本経済研究センター会長）

この度の日米貿易交渉では農産物輸入が一つの焦点になった。特に牛肉とオレンジの輸入が花形役者として登場し、あらためて貿易と日本農業の問題を考えさせられることになった。もともと日本は農産物の大輸入国で、米は自給しているけれども小麦は96パーセント、大豆は97パーセントまで輸入にたよっている。そのほか鶏や豚など家畜の飼糧穀物のとうもろこしやコーリャンもほぼ百パーセント輸入である。3年程前に世界的な食料の不作があって、アメリカの大豆輸出禁止で台所もショックをうけたが、この2～3年世界的に豊作がつづき、目下のところ穀物がだぶついている情勢だ。日本も今年の秋には5百万屯に達する余剰米をかかえて政府もその対策に四苦八苦している。

一方日本人の食生活を栄養の面からみると、これは筆者が議長をやった食糧栄養会議の調査結果からみると、昭和48年の日本人の食生活は大体満足すべきものだったという結論である。一人当たり一日の蛋白質摂取量80グラムでその半分40グラムが植物性、残りの40グラムが動物性蛋白だが、そのまた半分の20グラムが魚、残りの20グラムが家畜類という内訳になっている。日本人の平均寿命は男72才女76才で北欧なみの長寿国になっているし、乳児死亡率も出生千人当たり10でこれも世界最低の水準にある。今の日本人の食生活は欧米にくらべて米麦など澱粉質に対する依存度がまだ高く、肉類に対する依存度はまだ低い。しかし栄養的にはほぼ必要な食物がとられているし、また欧米ほど動物性蛋白と脂肪を多く食べないために、栄養のとりすぎから来る障害が少ない。心臓病をとってみても日本は欧米の四分の一程度となっている。したがって日本人の食生活が更に西欧型に変わって、肉類の消費がふえれば健康上かえってマイナスの結果になるだろうといわれる。従ってこれまで農産物の輸入が急速にふえたことは日本人の健康向上に大きく役立って来たが、現在以上の食生活の向上は栄養の改善というよりも食生活の趣味の問題につながっている。

農業関係者の間では食糧自給度向上の声が高い。しかしどのような目的で自給度を高めるかということにはいろいろ問題がある。一つは平時に日本人の栄養を維持する為の食糧を不足なく供給するためということであり、一つは有事の場合に国民の生命を守る必要最少限度の食糧を確保しなければならないということである。平時の食糧自給度向上のために折角望ましい栄養状態に達した日本人の食生活をあともどりさせるようなことがあってはならない。また日本人の消費する食糧の値段が諸外国にくらべて桁はずれに高いということでは国民の実質的な生活水準をひくめ、また割高な生活費が工業製品のコストにひびくということにもなる。平時に海外から大量の食糧を輸入することは何か事があった場合にも家畜用の飼料穀物を人間が消費することによって生命をつなぐ余地が大きい。その意味でも平時からあまりぎりぎりな自給政策をとることは賢明ではないだろう。

有事の場合についてはどのような事態を想定するかによって対策も変わってくる。世界的な農産物の不作が2～3年続く場合とか、世界のどこかに起こった戦争が日本への食糧供給に障害を与えるとか、食糧価格の異常な高騰とかが考えられる。対策の一つは食糧備蓄を平時から持つことだが、いま一つはいざという時に国内の食糧生産をふやす潜在能力を維持しておくことだろう。たとえば水田が一度荒廃すると使えなくなる。その適当な維持補修を考えるべきだろう。また水田裏作についても必要が生じた場合にそれが可能なようにしておくべきだろう。農産物が値上りすれば日本はその買入れのためにより多くの外貨が必要となるが、工業製品の輸出競争力があれば、とにかく金を出せば買えるという状態である限り、なんとか必要な食糧の調達は出来るであろう。また日本の食糧問題を考える場合に国内の食糧生産だけでなく日本に近いアジア諸国やオーストラリア、ニュージーランドなどの食糧生産の可能性と合わせて考える必要がある。私どもが以前から提唱しているアジアの米倍増計画も間接的に日本の食糧安全保障に役立つことになる。

農産物の輸入をきびしくおさえると、今回の日米交渉のように国際的な摩擦の原因になるし、また輸入がふえなければ円高が更に促進され、ただでさえ困難な輸出産業が更にむずかしい立場に追いこまれ倒産や失業がおこってくる。その意味では農業だけは別だという考え方に安易に頼るのも問題である。勿論、農業は食糧生産ということだけでなく、国土の保全、緑化、国民の肉体的精神的健康、あるいは雇用の維持というようにいろいろな面での役割を担っているので単純に価格の面だけで割切るわけにはいかない。これからの農政は一方で消費者に出来るだけ質のよい食糧を安価に供給すること、他方でどうしても守らなければならない一線を決めてこれを国民の税金による負担も含めて維持してゆくという立場で考えるべきであろう。

エネルギーと選択

大島恵一
（東京大学教授）

日本のエネルギー問題を考えるうえで大切なことは、まず、技術的な発言と政治的な発言・社会的選択というものを明解に区別して考えることであります。

たとえば経済成長とエネルギー消費との関係とか、新しいエネルギー技術とか、エネルギー供給が減った場合、社会生活にどんな影響が出るかといった点の解析は専門家がすべきことであるわけですけれども、では具体的にどういう選択をするのかということは、国民なり一般大衆なり、あるいは将来の21世紀の中心になる人達が選択すべきことであると思います。

原子力発電をすれば、他のあらゆる人間活動と同じようにそれに伴う影響があるわけですし、廃棄物処理のための土地が必要になってきます。しかし、停電になれば、ニューヨーク大停電の時のような混乱が起きる。

小さな地域単位にエネルギーをまかなうようなシステムをつくれば大きな発電所はいらないということになるかもしれませんが、経済的には非常にコスト高につくし、社会的活動も減ってくるだろう。

専門家は、このような選択をせまられている問題に関するさまざまな関係、オプションの可能性を示すべきであると思うわけです。

今までの社会は皆同じ方向に向いていました。エネルギーは豊富で低廉であり、生活も豊かになっていった。皆が同じ方向を向いているかぎり、選択は問題ではなく、どう実現するかが問題であったわけです。ところが今はそうではない。

たとえば、私も出席したマイアミの会議に最初に原子力を作り出した人達も出席していてこんなことをいっていました。21世紀に化石燃料が足りなくなる時に、それに替わりうるエネルギーを我々は作りだした。原子力の技術的な危険性は、化石燃料を燃やすよりも少ないわけで、あとは社会的な安全性がない、受け入れる組織がないといった、哲学的価値観、社会科学的な問題であるというわけです。

一番問題なのは、我々の居るのが豊かな社会である限りにおいていろいろな議論がなされているけれども、その豊かな社会が本当に続くのかどうかということです。それから豊かな社会の人達が、物質的に豊かでない社会というものに向けて自分の選択をそのまま強要するわけにはいかない、ということです。物質的にも豊かになりたい人もいれば、高度産業文明ではなくもっとシンプルな文明に移った方がいいという人もいると思いますが、物質的なものの選択と精神的なものの選択がトレードオフの形になっているのに、トレードオフであることを知らないで選択したとすれば、これは専門家というか技術屋の責任だと思うのです。しかし具体的な選択の方に技術者も皆入ってしまうと、トレードオフになるかならないかということすらはっきりしなくなるのではないか。

我々が一市民なり一社会人としての自分の選択を技術的発言に含めて提示すると、一般の人達は専門家の言っていることを信用するしかない。そうすると、実は専門家が専門的知識に乗って一般の人達に影響を与え、選択してしまうわけです。

また、日本では国際的枠組みの中でエネルギー問題を考えるということが非常に少ないという問題を検討しておかねばなりません。

日本のエネルギー政策は国際的にも大きな影響を与えます。ひとつには、中東の石油生産と需給に対する影響。もうひとつは、たとえば原子力問題などにみられる安全保障問題です。

たとえば、中東から油を輸入するために他の国に輸出しなければならない。そのことが、他の国の収支のバランスを悪くしているという話があるわけです。さらにそれがもう一歩すすむと、単にそれが経済的なバランス悪化だけじゃなくて、政治的に各国の失業問題を通じて政治的インパクトを与えます。ヨーロッパに関して言えば、やはりユーロコミュニズムにもつながるし、ヨーロッパが南と北に政治的に分かれてくるということにもつながってくるわけです。ですから、日本のエネルギー問題というものが、実は国際的な影響を持っていて自由世界の安全保障問題にまでつながってくるわけです。

日本が原子力の技術を開発するかどうかという問題も、アメリカ側から見れば安全保障につながっています。日本にとっての解決しか考えていないということになると、いわゆるナショナリズムを促進することになるかもしれない。そのことで一番大きな影響を受けるのは日本自身なわけです。エネルギー問題に関して言えば、大事なことは、国内的には政治的発言と技術的発言、社会の選択を明確に分けること、国際的には日本がエネルギー問題を国際的なコンテクストで考える方向に行かざるをえないということです。そうした国際的な場で考えるということは、日本人は一番不得意な所なので、実際には一朝一夕にできることじゃないと思いますが、もしそれをやらないと、結局は自分の首を締めることになると思うわけです。　（談）

二十一世紀のイメージ

篠原三代平
（成蹊大学教授）

ある先輩のエコノミストが、将来とは「将に来たらんとする」時期のことだし、未来とは「未だ来たらざる」時期のことだと言ったことがある。「将来」、「未来」という用語を無差別に使っていた私は、そのとき「なるほど」と思った次第である。

しかし、将来でなく、この未来について一時「未来学」が流行し、「未来学会」ができたのも、ついこの間のことのように思われる。何事にもアレルギー症の私は直ちに未来学なるものにアレルギーを感じた。なぜなら、当時若ものたちの気持ちをアンケート調査して、彼らが社会をリードする時期には、価値観がこう変わるから、これからの未来社会にはかようしかじか……といった類いの論説に出会ったからである。

もちろん、いいことを言った人が何人もいることを否定しようとするのではない。しかし、「未だ来たらざる」遠い社会の考察に当って、現状からのリニア・エクストラポレイションの議論には、私自身は堪えられない気持ちになったことを隠す必要はない。私自身戦時中抱いていた気持や考え方と、現在抱いている考え方との間には、恐ろしいくらい大きな断層があることを告白せざるをえない。何といっても、戦争といったものに対する考え方が激変しているし、世界も変ったし、日本も大きく変った。環境の巨大な変化が人間の思考に大きな影響を与えなかったというならば、それは嘘である。なるほど、人間の思想は社会環境に大きな変化を与えるだろうが、社会環境もまた人間の思想に大きな変化を与えるはずだ。このフィードバックをわれわれは見逃がしてはならない。

未来学流行期に私が感じた心理的な反発の一つはこのことであった。さらに、未来に到達するには、その中間にある「将来」すなわち「将に来たらんとする」時期の洞察を排除して、一足跳びの結論に飛びつくことはとんでもないことのように思える。ところが、この「将に来たらんとする」時期の省察がきわめて困難だとすると「未来」世界のプレディクションがうまくいくはずがなかろう。産油国、第三世界があのような動きに出たことは多くの人々の予想だにしなかったことと思われるが、そのような中間ステップを飛び超えて、いったい未来世界の構想が可能であろうか。

私自身、経済学をやっていた関係で、とかく欧米傾斜の物の考え方に支配されてきたと思う。しかし、ある偶然の出来事で、アジア・クラブなるものの理事長を引受け、東南アジアのビジネスマン、学者、ジャーナリスト、官僚、政治家などと対話の機会をひんぱんに持つようになってから、一種の文化ショックをうけ、予想もしなかった物の考え方の変貌に直面するに至った。その波及効果の射程は広汎であって、自分の勉強している普遍科学としての経済学とは、いったい何か、といったことまで気になり出した。

こう考えてくると、異質の文化・文明に直面することは、文化ショックを通じて、人間の思想にまで影響してくるという事実を私自身が経験したことになる。ところで、日本は経済力の飛躍を通じて、いま赤松・バーノンの仮説の第4段階、つまり、「輸出→国内生産→輸出→企業進出」の最後の局面にまで到達しているのである。ところが、企業が海外進出するということは、異質の文化に直面し、それを経由するということである。その際にそのような接触を通じて、いまの若ものの考え方が大学というぬるま湯時代の考え方から、180度の大転換を余儀なくされることは必須であろう。だから、アンケート調査の対象となった彼らの昔の価値観と縁もゆかりもない、壮大ともいうべき価値観が遠い「未来」に出現する可能性はむしろ強いとみるべきではなかろうか。

21世紀のビジョンは一種の流行になっている。戦後30年はあっという間に過ぎ去ったから、これから20年、30年先きも、未来というほどは遠くないかもしれない。しかし、どうやら過去の高度成長時代とは違う成長局面が展開しそうだし、第三世界の世界における発言力は過去30年とは桁はずれに違うものになるだろう。先進国社会の問題を考察するに当って、第三世界から隔離された形でそれを論ずることはあまりに空転的、非現実的だといわざるをえない。

こうみてくると、21世紀のイメージをあまりに単線的に感じとってはならないといいたくなる。私もよくわからないが、経済と政治と文化の相互的影響、次第に小さくなる地球上の諸文明の急速な相互接触と摩擦、社会的環境や構造の巨大な変化に伴う価値観の変化、こういった諸要素を生々しくつかんだのちに、未来世界のダイナミックな動向を見通すということにならねばならない。しかし、そのような見通しが簡単に可能だとは思わない。どうなるかわからない不確定要因があまりに多いからである。けれども、これらの諸要素を生々しくつかむ努力を行わないで、それぞれの局所的視野から、ああだ、こうだといっても空転論理に終り、かつての未来学のような運命を辿ることになりはしないだろうか。

イェニ・チェリ

松山幸雄
（朝日新聞論説委員兼編集委員）

昨年秋、ユーゴスラビアの首都ベオグラードに寄ったさい、市内にある有名な戦争博物館を見学するという機会を得た。

博物館というと、どの国でも、いかにしてわが民族が発展してきたのか、勝利、栄光の歴史（たいていは粉飾、水増し的なもの）の誇らしげな陳列であるのがふつうである。だが、この博物館だけは全くその逆で、いかにセルビア民族が千数百年の間、ローマ、トルコ、プロシア、ナチスなどに侵略、迫害されたか、という生々しい屈辱の遺物が展示されていた。

案内役の大羽書記官が、セルビア語、セルビア文化の専門家だったおかげで、バルカン諸国の痛ましい歴史についていろいろのことを学ぶことが出来た。彼の説明の中でとくに忘れがたいのは、イェニ・チェリ（英語でJanizary、フランス語でJanissaireという）の話だった。

十五・六世紀ごろこの地方を制圧したトルコ軍は、七、八歳ぐらいの血統、頭脳、身体の優秀な美少年を徴発し、トルコに連れて帰って、トルコ王の親衛隊として徹底的に訓練した。この子供たちは、故国を忘れ、親兄弟を忘れ、やがて精強をもってなるトルコ軍の中核となった。トルコの他国侵略の成功は、イェニ・チェリとよばれる彼ら親衛隊に負うところ大、という。

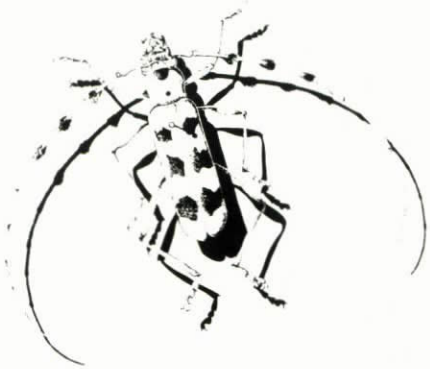
今日の世界ではおよそ考えられない非人道的な話だが、博物館の中を歩きながら私はふと、日本もいまイェニ・チェリが必要なのではないか、という気がした。当時の軍国主義国家トルコと、今の平和国家日本とは事情が全く異なるが、日本の海外進出のためには、対外活動の出来る有能な“戦士”がもっといなければならないのではないか。核兵器もなく、資源も食糧も乏しい日本では、国家的大方針として、国際社会に通用する人的戦力を充実させることが急務なのではないか——十年余海外生活をしている間、日本人の対外戦闘能力のなさをさんざ目撃してきた私は、トルコの“やる気”と日本の無方針とのコントラストをしきりに考えた。

幸い、今の日本では、外国からイェニ・チェリをつれてくる必要はない。海外で修業した若い日本人を日本社会の本流に受け入れ、日本文化を十分身につけさせた上で、国際化時代の先兵に仕立てればよいのである。今の日本の大会社、大学などでは、日本の一流大学を出てから海外留学した人はよいけれど、外国の大学だけしか出ていない人に対しては“語学屋さん”の扱いきりしないことが多い。このため、外国の大学で苦労して修士号や博士号をとった人たちの方も、いや気がさし、日本の勉強をせず、いつのまにか“脱日本”になってゆく。

両親と一緒に海外生活をしている二万人近い小中学生も、今に国際化時代の有力なイェニ・チェリになりうるのに、帰国子女を受け入れる学校は日本に現在、わずか24校あるにすぎない。語学の自由な、国際感覚豊かな子供たちを優遇するどころか、「君たちは変則的な教育を受けたのだから、日本で一流のコースを歩むことはあきらめてもらいたい」と冷たくあしらうのである。

外国コムプレックスのない彼らに、日本の本流に入る特訓をほどこし、21世紀の日本の花形戦士に育て上げることは、決してトルコのイェニ・チェリのような残酷な物語ではない。むしろ本人のため、日本のため、世界のためになることなのだ。

しかし、今の日本の指導層は、恐らくいつになっても、こうした問題——長期的視野に立った「強兵」策——に本腰を入れることをしないだろう。何故ならば彼らは、日本の社会でエリートといわれている人たちが、個人として国際社会でいかに通用しないか、の認識さえ十分でないのだから。



私の趣味

滝田　実
（アジア社会問題研究所理事長）

私が旅のつれづれにスケッチをはじめてかれこれ二十年近い。

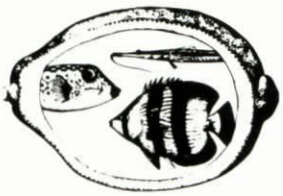
労働組合の役員をしていた関係で国内の旅行も多かったが外国へ出かける機会も多かった。旅行にはカメラをぶらさげる人がずいぶんあるが、ふとしたとき、雨で外出もできずホテルの窓から外の風景を万年筆で描いてみたのがそもそものはじまりであった。そのホテルはウィーンだった。さてカメラをスケッチに代えて第一に感じた事は、カメラはレンズが対象を捉えるが、スケッチは自分の眼が直接対象を捉える、その差が風景などを描くとき、色や形にひどく敏感になることであった。そして描いてみると空や雲ひとつ眺めるにしても今まで気づかなかったいろいろな美しさを発見し、ものを見る眼がたしかになっていくように思えた。

殺風景な議論の多い労働組合の会合の合間に、このスケッチは随分心のなぐさめになった事はいうまでもない。大体、一枚描く時間は2、3分から30分以内のものであるがもう15～6冊たまった。しかし番号順にスケッチ・ブックを繰りひろげて見て、さてどれだけ上達したろうかと比較してみると、十数年間さしたる上達のあとはみられない。それでもスケッチは楽しい。

数年まえ、パリから帰国の機中で今東光さんとご一緒した。話に花が咲き十時間余よもやま話をした。そのときスケッチの話が出た。今東光さんはもっぱら裸婦のデッサンだという。私は風景しか描けない。だが今さんは銀座で個展をひらいたら全部売切れだったという。それもその筈、若いとき画家を志したというだけあって相当の腕前であることは私も知っていた。「いつか裸を二人で描こうや」「いや描かなくてもいいよ、見にくればいいんだよ、モデルの志願者は美人が百人以上いるよ」と、例の通り呵々大笑された。

その東光さんから昨年の新春、私に便りがとどいた。「二人展をやりませんか」というのである。「私はハダカ、あなたは風景、ちょうどよい」というわけだった。うれしい話ではあるが、今東光さんの絵と私のそれとでは格がちがうと思って逡巡していたが、この話を美術評論家の嘉門安雄さんに話したところ「それは面白い、ぜひやりなさいよ、私が責任もってお手伝いしますよ」ということになった。

さて、そうなると、こちらも二人展を意識して、なんとか作品をそろえなくてはと準備にかかったところで今東光さんは昨秋九月に他界された。私は上野の寛永寺のお通夜に足をはこんだ。そこで思った。もし二人展をひらいていたとしたら作品の格差は歴然としているので、どうせ私の方はコテン、コテンにやられていたであろうということだった。でも残念な気がしてならなかった。



日本人に期待すること

田崎　潤
（俳優）

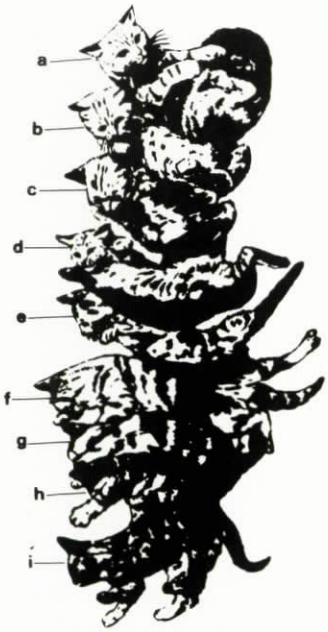
幕末から明治にかけて西欧文化が急激に日本に入って来た時から、日本人の西欧に対するコンプレックスが始った。そしてそれが未だに続いている。今の日本は猿真似の時代は過ぎて、医学、産業、経済、その他いろんな部門で世界のトップクラスであるから、未だに続いている西欧に対するコンプレックスは先ず無くすべきです。

これからの公害、経済、食糧、産業、文化の面では日本だけで無く国際的な考え方で進めるべきなので、もっと日本人は外国を知り、日本の事も大いに外国に知らせるべきだと思います。日本人はつまらぬ謙遜をする癖があるが、これからは日本と日本人の良いところを、誇りを持って外国に発表すべきです。

すべてが国際的となれば先ず必要なのは語学ですが、国際的に一番通じているのが英語とするなら、今の日本の英語教育は間違っていると思う。英語を教えるには（英語に限らず外国語すべて）先ず第一に会話から教えてそして、読み方、書き方、文法と教育すべきだと思います。

日本人の勤勉さと頭脳は世界のトップクラスと言われる程優れているが、心がもっと豊かになって欲しい。今や何処かのすみに置かれている言葉だが、道徳、博愛、宗教、この三つはどうしても子供の時から教育して心を豊かにして欲しい。

日本人はリーダーによく従う国民だと思うから、立派なリーダーが欲しい。学者、知識人はもっと大衆の中に入って大衆をリードして行くべきです。学者と大衆とはなれすぎていると思います。国民のリーダーで大切なのは政治だが、今の日本には政治家が居なさすぎる。政治屋は沢山いるが、政治家がいない。国民はもっと政治に関心を持って政治家を育てるべきです。それには知識人が大衆の中にもっと入ってリードすべきなのです。21世紀には、心を豊かにして、真面目に勤勉努力すれば人間並の幸せになれるようになってほしい。



ユーモア、ノー、モア

加治　章
（NHK アナウンサー）

相撲の〝初切り〟を見て、もっと真面目にやれ！　と野次った人が居ます。

ストリップ劇場で、なかなか脱がない踊り子に、もっと真面目にやれ！　と野次った人が居ます。同じ裸の商売に対して、同じ言葉の野次なのですが、周りの人の反応には大きな違いが出ました。前者の場合は「苦笑と軽蔑」。後者の場合は「爆笑と大拍手」でした。

前者の野次は全く見当違い。後者の野次はその場に合ったユーモア（品は別として）なのです。でも〝初切り〟を野次った人にとってこの結果は心外でした。相撲は真剣勝負と思っていたのに花相撲で初めて見た初切りは、ふざけてばかりいて一生懸命相撲を取らない。そこで生真面目なこの人は腹を立ててどなったのです。冗談が〝喝采〟を浴び、真面目が〝ひんしゅく〟を買う、日頃よくある事で一見理不尽な様ですが、ここに言葉の使い分け、ユーモアのセンスの有無が現われるのです。「初切りを野次った人だって初切りのことを知っていればこんなはじはかかなかった」と言う人は多いと思います。確かにその通りです。しかしそれだけで済ませてよいものでしょうか、どうも我々日本人は「もし……していれば」という弁解、言い訳が多すぎるのではないでしょうか。

私の担当している連想ゲームの場合でも、沢山の電話や投書が来ます。内容は様々で、「キャプテンが不真面目なヒントを出すから答えが出ない。ゲームとは言え男女対抗の真剣勝負なのだからもっと真面目にやれ」「違反ヒントで減点というのはおかしい零点にすべきだ、違反をしても得点になるのは、悪い事を認めることで、子供に聞かれても返答の仕様がなく教育上よろしくない」「男が女に負けるとは何事か」「田崎さんの声が大きすぎて子供が寝ない」「チャイムの音がうちの玄関のと同じで間違えるから取り替えてほしい」「司会者は裁判官と同じである、公平に判定せよ」「辞書を見たけどあんな言葉はない」など番組が始まって十分過ぎから終了後一時間ぐらいベルは鳴り続くのです。

物事を判断する際、自分の範囲内だけでせっかちに結論を出してしまい、広い視野で判断をする余裕がもう一つ足りない様です。この辺に日本人はユーモアに欠けると云われる一因があるのではないでしょうか。

では、本当に日本人はユーモアを解さない民族なのでしょうか、〝否〟なのです。

事実〝古くは鳥獣戯画〟そして狂言、狂歌、川柳、落語など洒落や風刺に満ちた大衆文化、ユーモアの歴史があるのです。しかも身分制度のはっきりした封建社会の中で生まれ、庶民の力に支えられ育って来たのです。それが、不幸にも太平洋戦争を頂点とする軍国主義の下に風刺や洒落は〝非国民〟というレッテルを貼られ封印されてしまったのです。

そしてその封印をやぶりきれないまま、急激な時代の流れに乗って今日に至ってしまったのです。そしてこの封印が完全に破られなかった為に、洒落や風刺とは別の〝笑い〟が生まれました。それは、戦後異常に発達したマスメディアを土台にした〝笑い〟です。最近、寄席が若い人に人気があります。特にテレビの公開番組のある時は超満員です。でも楽しみ方は昔の寄席ファンとは少々異っています。若者の大半はテレビでおなじみの〝顔〟が目的で、テレビのイメージを求めて来るのです。したがって目指す人が想像外の芸（本来の芸）をやった場合、彼等の失望はこれまた想像以上に大きく、〝笑い〟につながらないものです。

彼等の求めているものはマスメディアによって知らされている面白さであって、落語や漫才本来の洒落や風刺の〝笑い〟とは無関係なのです。この現象を見て登場したのが、落語の入門書や解説書、××入門、○○の聞き方、△△の楽しみ、といった類の本。「この落語の聞き処はここ、この洒落はこう言う意味で面白く、おちはこうなってこう言う訳」と実に懇切丁寧に教えてくれます。〝冗談や洒落の解説は愚〟の全く逆を行って見事に成功したのです。しかしこういった本を片手に同じ処で同じ様に笑う人間に会うかも知れないと思うと薄気味悪くなりますが、可能性は

充分にあります。マスメディアの発達によりマスメディアを通じての人間性、特に感情の画一化が知らず知らずのうちに進んで居ることは恐るべきことだと思うのです。洒落とか風刺とかは理屈で教わったり集団で教わったりするものではなく、それぞれの個性、感情資質などからおのずから出て来るものであり言うなれば本能の部分なのです。そしてその本能に長い間の歴史や経験が加わった豊かな人間性の現われなのです。この豊かな人間性がユーモアを解する余裕となり、逆に余裕を持つことから豊かな人間性が生まれるとも言えるのです。余裕を持っていればこそ、一方的な画一化を見抜き、それを否定する事が出来るのです。また否定することによって人間性を取り戻すことも出来るのです。20世紀は軍国主義の強制的な画一化の中を生きて来た者と現代のマスメディアによって画一化された者とが渾然一体となっているのです。とすればこのままでは本来の、ユーモアを期待することは不可能でしょう。だからこそ人間性の回復が必要なのです。

来たるべき21世紀を生きて行く人が豊かな感情を持った人間である為には、科学文明、物質文明とは全く切りはなして精神文明という観点から、本当の豊かな人間性とは何かを考え直し、失われつつある人間性の回復に努める事が、この20世紀に残されている重要な課題の一つではないでしょうか。

未来感覚

本間長世
（東京大学教授）

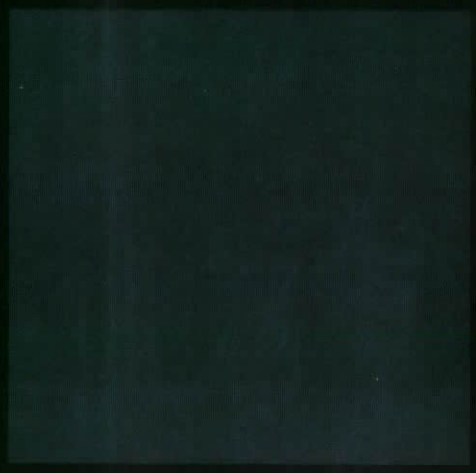
今日のアメリカにおける有数の歴史家の一人であり、かつてケネディ政権の下でホワイトハウスの一員として活躍したアーサー・シュレージンガーが、最近未来予測の難しさを論じた文章を書いている。それによると、エジプトのサダト大統領がイスラエルを訪問したことは、たちまちにして当然のことと見なされるようになってしまったが、事前にこの可能性を予測して公けにそのことを述べた者は、数ある中東専門家の中で一人もいなかった。しかし、考えてみると、ニクソン大統領の中国訪問にしても、中ソの対立も、フルシチョフ演説によるスターリン批判も、朝鮮戦争勃発も、真珠湾攻撃も、独ソ不可侵条約も、現代史の大事件がすべて予想外の出来事として起こっている。人口学者たちの世界の人口の変化についての予測も当らなかったし、エネルギー資源の将来についても専門家たちの予測が正しいという保証はないというのである。

今日のように情報の量が増え、情報伝達の速度も高まり、未来予測のための方法も精緻になってきている時代でも、未来が依然として驚きに満ちているということは、不思議な気がすることでもあるが、情報が少なかった時代の方が、人間はかえって未来に対して確信を持ち得たのかもしれない。今日のアメリカの大統領といえば、その一挙手一投足が世界で最も注目されている人々の一人であるが、カーター大統領についてはっきりしている唯一のことは、ジミー・カーターという人物がアメリカの政治評論家たちにとっても依然として謎であり、二年目に入ったカーター政権の政策がいまだに予測し難いということなのである。これはもちろん、カーター大統領の個人的性格や、政治のスタイルや、登場の背景など、さまざまな事情によるものであろうが、それらを考慮に入れた上でも、カーター政権の方向が定め難いことにとまどうアメリカ国民の姿は、未来が予測し難いことに悩む今日の世界的状況を象徴していると言えるのではないか。

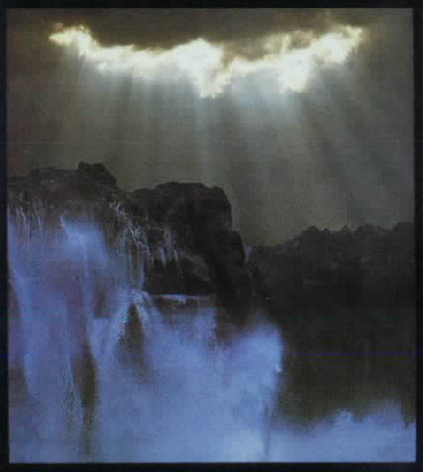
英語の「プロブレム（問題）」と「ソリュージョン（解決）」という単語が頻繁に用いられるようになったのは、十八世紀以来のことだという。それは同時に「ハピネス（幸福）」という単語が広く使われるようになったのと平行したそうである。問題をとらえてそれを解決すれば幸福になるという考え方が近代的なものであるとすれば、今日はそうした考え方も行き詰まりを示していると言えよう。専門家たちは問題の所在を指摘し続け、新聞の社説は「早急な解決が望まれる」と論じ続け、政治家は解決を約束し続けるであろうが、われわれはすでに、根本的解決によって新しい社会が到来するという幻想は抱いていない。

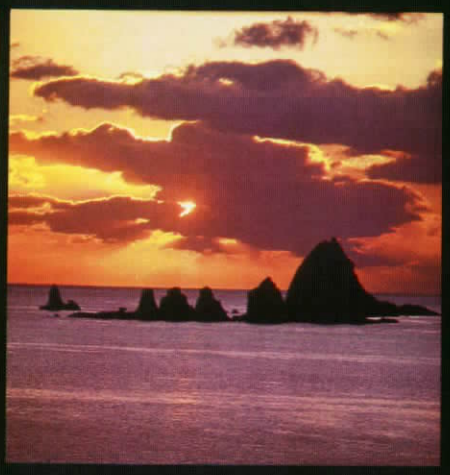
けれども、未来が予測できなくても、人間は未来感覚を持たずに生きてゆくことはできないし、根本的解決を信じなくても、自分の置かれた状況の下でこつこつと努力するほかはない。毎日毎日を大切にしながら、過去をふり返り、未来についてほそぼそとではあっても語り続けることが、やはり必要なのだと思う。

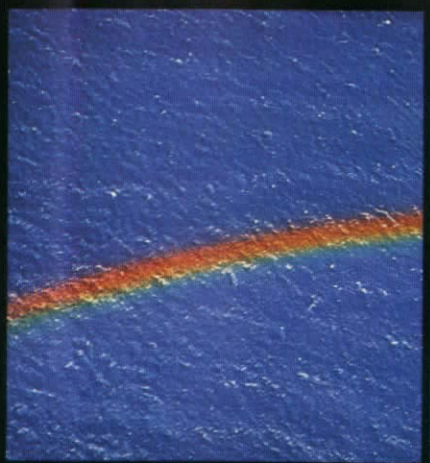
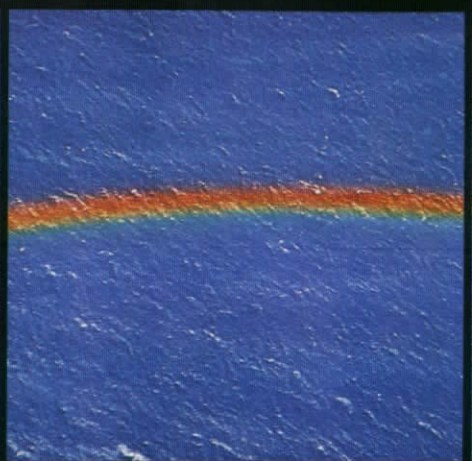
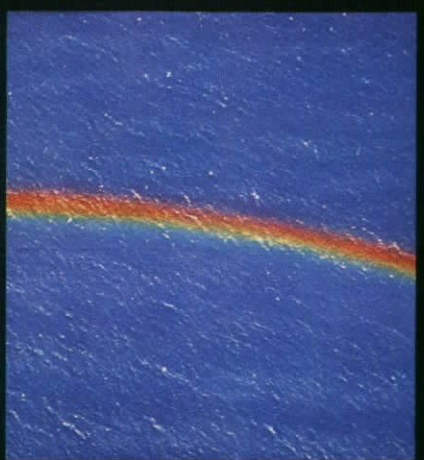
Energy···Sun's Vibration



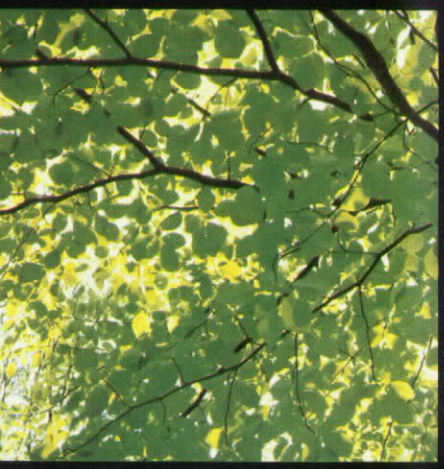
Energy···Sun's Vibration





Energy···Sun's Vibration



III.「21世紀フォーラム」部会記録

中山伊知郎グループ

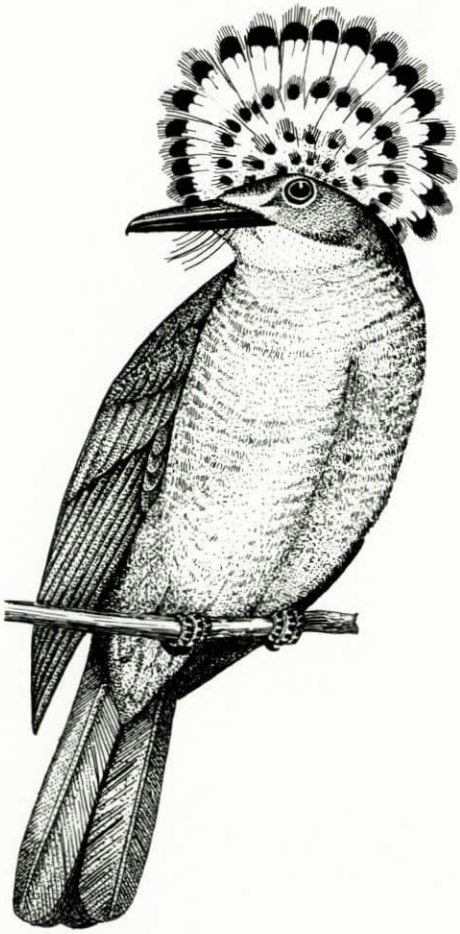
松本重治グループ

茅誠司グループ

加藤芳郎グループ

加藤秀俊グループ

小松左京グループ



世界の中の日本

中山伊知郎グループ部会速記録

昭和52年11月26日

出席者

中山伊知郎（一橋大学名誉教授）
江藤　　淳（東京工業大学教授）
大来佐武郎（日本経済研究センター会長）
滝田　　実（アジア社会問題研究所理事長）
中根　千枝（東京大学教授）
林　雄二郎（未来工学研究所副理事長）
松山　幸雄（朝日新聞論説委員）
R・バロン（上智大学教授）

ライシャワーの THE JAPANESE

中山　各グループ部会というのがありますが、私のところへ話が来たのは、だいぶ遅い段階だったので、なかなかメンバーの選択というのが難しいことになりました。結局私の存じあげている範囲で、こういう問題にご発言を願う方にお集まり願うというようなことになったわけです。そしていちおう主題を「世界のなかの日本」といたしました。ちょうどライシャワーの THE JAPANESE を読んでおったもんですから、雑談にこういう書物もあるので、そういうところをとっかかりに、話をはじめたらどうかといいました。それがさっそくテキストのような形になってあるいは皆さん驚かれたと思います。しかし趣旨は、これを読んで批評の会を開くというような堅苦しいものではないので、これはひとつのきっかけにすぎません。

だたしこの書物は、ライシャワーさんの日本に関する書物の中でもよくまとまったものだと思います。 皆さんに差し上げたのは、 最後の "Japan and world" という章の抜き刷りですので、私から簡単にその構造だけを申しあげます。

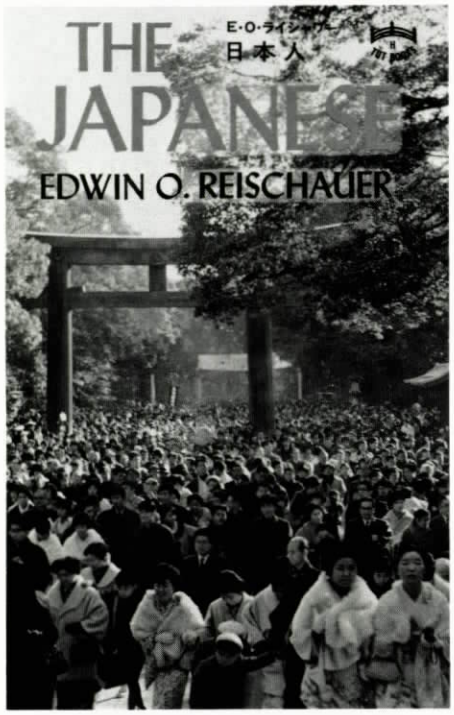
これは全体で7節になっていまして、第1節が "The Prewar Record"、第2節が "Neutrality or Alignment" これはだいたい1960年の安保問題を中心に日本の外交、世界的な地位というようなものを取り扱っております。その次が "International Trade" それから第4節が "Interdependence" 世界経済の側からの問題。それから第5節が "Language" 日本語の問題。それから "Separateness and Internationalism" という題で、そこで日本のいちばん中核的な問題を論じています。それから第7節 "The Future" で終っております。

どうも私の見たところでは、日本の建国からはじまって、現在にいたるまでの重点は Isolation〔孤立〕ということにあります。結論的に言いますと、日本はいままでのアイソレーションの立場からいかにして脱却するか、を問題にしています。リソーセス〔資源〕は少ない。生活程度は高い。だから平和で外国といっしょにやっていくんでなければ、経済も生活も成りたたない。その点をしっかりふまえたら、本来もっとインターナショナリズムに徹するべきはずなんだけれども、どうもいままでそれを邪魔していたいろいろな政治的・社会的・地理的事情があったのではないか。

たしかに貿易という点からみると、外国との交渉がうんと深まったように見えるけれども、目に見えない通商の障壁というのは依然として多い。これはなかなか外国人には分からないような、ちょっとした行政的な瑣末な事務段階とか、その他にほんとうに細かい障害があって、それが日本を外国に理解してもらうことの邪魔をしている。

その邪魔をしているなかのいちばん大きな問題というのは、やっぱりランゲージの問題ではないか。言葉の問題というのは一挙には理解できないけれども、もっと外国人の教師を日本によんだらどうか。逆に日本の先生というのは喋れないんだから、喋れるように思いきって外国にたくさんの人を派遣したらどうか。

しかしその語学の問題のむずかしさというのは、実はやっぱり元に戻ってアイソレーションそれからセパレートネスに根があるのではないか。なにか日本および日本人というのは世界の他の国々とはどこか違うんだという意識が底にあって、それが語学の問題にも日本の国際化の問題にも非常に強く影響していると考えざるをえない。ライシャワーさんの言葉で言いますと "Japanese sense of being separate" なんか別のものだという考え方、これは一見非常に傲慢な態度といいますか、よその国より高い文化だということとも解されますが、そして事実そのように理解されたこともあるのですが必ずしもそうばかりではない。とにかくどこか違っていてなかなかお互いに理解できないものが日本人の側にはあるんだという意識。その例としてあげていることのなかに "Who are you?" という質問を日本人にするとすぐ返ってくる答えというのは "A Japanese" ということだとも言っている。これはどうも少し疑問だと思いますが、まず日本人という意識が先に出てくるという例をあげて、そういうことがソ連に対する態度、それから中国に対する態度のなかに非常に強くあらわれていると言っています。これは恐らく著者自身の経験をふまえた預言でしょう。しかしこの預言に反省もしています。自分の描く日本の将来に対するイメージは少し暗いとお考えになるかもしれない。けれども自分はそうは思わない。だんだん縦のそういう構造から横に広がった日本人および日本になりつつあるので、ことに若い人は語学の問題についても、それからアイソレーションの問題についても、自分の心配しているようなことを飛び越えてもう先に行っているんではないか。そうすると日本の将来はそういう若い人によってもっと明るく開かれるかもしれない。Future というところではまずいろいろ難しい問題があることを指摘しています。エネルギーの問題、資源の問題、通商の問題がある。けれども、日本人はうまくやるだろう。過去にもやってきたし将来についても日本人の能力には信頼をおいてよい。しかしなにか日本特有の世界的使命があるとかいうようなことは、あまり言わないほうがいいんじゃないだろうか。たとえばよくユネスコなんかでいうような東西文化の融合の役割を日本が果たすのだというようなそういう大目標というのは掲げないほうがいい。それよりむしろ、こ



の言葉を私は非常に気に入っているんですけれども、"developing global fellowfeelings" そういうfellow feelings を拡大するというような方向で日本ができるだけ努力するということが、自らそういう大きな目標を解決することになるんではなかろうか。そう言ってこの本を終っております。いずれにしても、この本は大きく日本と世界との関係を考え、その上で日本の将来についての非常に温かい示唆を含んでいるのではないかと思うのです。これだけをご紹介申しあげてご意見を自由にお聞かせ願いたいと思います。

ライシャワーに対する意見

大来　どこかに日本がやっぱり軍事大国ではない経済発展のもとで、新しい先進国のパターンを作る役割をもつかもしれないというようなことも書いてありましたね。

日本的先進国社会という考えが、よく日本の未来問題研究者の間で出ているわけなんですが、そういう特殊なものは考えるなというか、むしろ世界的な連帯感というものを中心に考えたらいいというふうにとったらいいのか、なにか両方の面があったように思いますがいかがなものでしょうね。

中山　いまの大来さんの言われた、日本の平和主義というものはちょっと考えると、ある意味では終戦直後に外から押しつけられたようなもので非常に層の浅いもののように考えられるかもしれないけれども、本来は非常に本質的なものだということを強調しているのです。ことに現在の状態から考えると、そういう平和主義というのが、経済的に日本の生きる道とぴったり一致している。これを徹底したらなにかできるだろうということを言っていますね。

松山　私はこのプリントから、なるたけアラをさがそうと一生懸命クリティカルな目で読んだんですが、とにかくだいたい頷いてばかりいて実によく書けている。あまり優等生というか円熟して書けているんで、むしろ私なんかには抵抗がなさすぎます。あまりどうも賛成ばかりしていてアメリカ人に読ますには非常にいい本だと思うけど、私にはあまり参考にならない。むしろあまりよくできすぎているという気がするんです。

江藤　私は日本人は21世紀に向かって大げさに使命感をもたないほうがいいという忠告は、たいへんけっこうな忠告だと思いますけど、ライシャワーさんのお書きになるものというのは、私は基本的に主観的だと思うんです。やはり使命感に貫かれているところがあって、それが実は目からうろこを落としてくれないところなんだと思いますね。私はむしろ戦前1910年に日本でお生まれになって、それからいままで日米関係に非常に尽力してこられたライシャワーさんの円熟した境地における記述であり、かつそこにある祈りがこめられていて、そういう出来上がった方の一種の後世にくださった賜物としていただくぶんには結構だと思うんですけれども、私は今後の問題はむしろライシャワーさんがあまり触れておられないようなところにあるんじゃないかと思います。

それから日本のパシフィズム〔平和主義〕というのは非常に根底のあるものだということを、なぜこんなに力説しなければならないか。

日米関係というのはつねに円滑に機能しなければならないという前提が満たされていれば、ライシャワーさんのおっしゃっていることは、これはウィッシュフル・シンキングではなくて、実際に考え得ることになるかもしれないけど、しかし現実にはそうではないわけですね。

たとえば今度の円高問題をみても、日米の間にあれだけコンフリクトが出来てくる。そのコンフリクトが出来てくると、これはもう非常にエモーショナルに両方ともなってきましてね。

中山伊知郎

この関係というのはライシャワーさんが望ましいと思っていらしゃる方向を根底から揺るがしかねないわけですよ。

ライシャワーさんのこの主観には、やはり非常にアメリカ人的なユニバーサリズムがあって、このユニバーサリズムの特徴は、基本的にコンフリクトというものがつねに存在するという考え方を認めない考え方だと思うんです。しかし私はそうじゃなくて、だんだん日本人も少しずつ「にもかかわらずコンフリクトは存在する」という意識に近づいてきている。その存在するコンフリクトを、じゃあどういう新しい方法で解決できるかということが提示されなければいけないんです。私はいままで日本人は少し、それこそ世界と別のところにいたのは、言語の問題もあろうしいろんな問題はあろうと思うんですけど、しかし戦後的状況の問題もあると思う。戦後的状況というのは、日米関係は非常に巨視的にいって安定していたから、日本はあまりコンフリクトを考えないですんだわけなんですが、その根本がグラグラしてきている。

私はその意味では、コンフリクトの認識が非常に浅いというか、欠けているところが、日本人のいちばん危険なところで、だからすぐ対応が遅れるし、インセンシティブなところがたくさん出てくるんだと思います。そこはバロンさんに教えていただきたいけど、ヨーロッパ人なんていうのはコンフリクトのなかに住んでいるということを、子供のときから知っているわけですね。知っているからそれをどう解決するかということにいろんな対応があるわけです。

明治の日本人といまの日本人と比べて、どっちがそういうセンスがあるかというと、日本人

as a whole〔全体〕をとってみれば、いまのほうがあるでしょうけど、しかし指導層といいますか、リーダーを考えたら明治のほうがはるかにあったと思います。

日本人の「孤立」と国際化

バロン　江藤先生に根本的に賛成します。ライシャワーは非常にアメリカ人的に考える。まあ当たりまえでしょう。けれどもこういうふうなアメリカの学者は普通、非常にユニバーサリズムの範囲で想像するんです。これはもうすこしプラクティカルに考えたほうがいいんじゃないかと思います。

もうひとつの面白い問題は、どうしてこういうふうな本を日本人が書かないのでしょうか？これはある程度までライシャワーのセパレートネスの例でしょうね。けれどもたぶんわれわれの座のトピックとしては、日本人が日本についてこういうふうな本を書いたら、どういうふうに書くんでしょうかというふうなトピックは、いいんじゃないでしょうかね。

中山　それは非常にいいサゼッションだと思いますね。それは実際ないんですよ。非常に単純な形で"The History of Japan"というのは書けないんですね。過去のことは書けるんですよ。たとえば徳川時代の末期くらいまでは書けるんですけどね。

ただそれはセパレートネスのためでしょうか。

バロン　私の考えではセパレートネスはひとつのエレメントでしょう。根本の返事になりませんね。非常に大ざっぱに言えば、日本人はコンセプチュアルじゃないんです。日本人は頭を使いたくないらしいのです。まあ、失礼かもしれませんね。全部腹でよくわかるんだから。国内では、全部腹でやったらなんとかなりますね。

問題は現在の世界では西欧の影響の結果として、国際関係は非常にコンセプチュアルです。頭で言っております。その事実を日本人は、たいてい解かることが出来ないんですね。

ライシャワーの言うことは、現在の若い日本人はわれらの時代の人より少し範囲が広いということらしいんです。はっきり言わないんですね。私はこういうふうに言いたいんですが、現在の若い日本人はもちろんある程度まで違うんですけれども、前の時代よりレスジャパニーズになりますか。そうでもない？

中山　横にインターナショナルになると同時に、それを恐れる人はそこで日本人の特性がなくなるということを議論しているわけです。しかしそれをカバーしながらなおかつ横に伸びていく可能性というのは、若い人にはあるだろうというのがライシャワーさんの意見ですね。いま言われたように断定　していないです。

江藤　私はその点ではライシャワーさんの意見にまったく反対なんです。若い日本人のほうがレスコンセプチュアル。というのは、つまり明治憲法世代は私なんかが、一番最後で、松山さんは私よりちょっと先輩ですけど、まだコンセプチュアルな把握の仕方を少ししたことがある。しかし戦後の日本はもうバイ・ネーチュア・ユニバーサルであるというふうに教えられたんです。

バロン　ですからライシャワーはインターナショナリズムという言葉を使って言うんですね。日本語で国際主義というんでしょう。

けれども日本では現在、国際化というんですね。その「主義」と「化」の違いは根本的な違いじゃないんですかね。

江藤先生が言ったとおり、アメリカ・ユニバーサリズムのスターティング・ポイントはもちろんインターナショナリズムで、これは当たりまえでしょう。けれども日本のセパレートネスからスタートすれば、インターナショナリズムは意味がないでしょう。ですからある程度までもっとダイメンションのある言葉を使って国際化というんですね。

中山　ただ私が読んで、いまのユニバーサリズムとナショナリズムとの関係ですね。非常にいままで日本の文献、あるいは理解で単純に考えられておったアイソレーション。日本は島国であると、自己の文化をもたしても辺境文化であると、自己の文化をもたないでただ辺境の文化として特殊なものをもったんだと、しかも幸か不幸かそれは干渉されることも少なかったし邪魔されることも少なかったし、同時にほかに拡大していくこともなかったというような意味でずっとアイソレートして育ってきたものだという、それは非常に単純な理解なんですね。

その理解をいまバロンさんや江藤さんの言われたようなユニバーサリズムの問題と結びつけて、そうして日本をもうちょっと理解するために一歩前進したという意味では僕は評価すべきものがあると、こう思っているんです。

大来佐武郎

江藤淳

江藤　さっきバロンさんのおっしゃった、なぜ日本人がこういう本を書かないかということについて私はこう思うんです。日本人というのはとにかく他人に出会うのが嫌なんです。身内にしか出会いたくないわけです。身内について自分を説明する必要はないわけですよ。ところがそういうふうな身内と考えられない他人が出てきたら、自分をコンセプチュアライズして把握して自分はこういう人間で、こうこうかような者でございますと言ってやらなくちゃいけないわけですね。そう言わなければならない状況というものはそもそも好きじゃない。だから自分を説明しようとしないわけです。そうしてそのかわり、それはみんな外国人に任せるわけです。バロンさんお願いします、ライシャワーさんお願いしますというわけです。

それから、文学全集というものが出ますとき

松山幸雄

R．バロン

に必ず日本文学全集と世界文学全集と出るんです。日本文学は世界文学のなかに入っていないわけですよ。日本というのは、とにかくその様にセパレートなんです。ところがこれがフランス語に訳されるとするでしょう。そうすると世界のなかの日本文学というんです、それを。

日本人が日本語で書いた日本文学というのは、バロンさんみたいに日本語の達者な方が読んで、われわれより非常に鋭い批評をしておられるかもしれない。そういうことはしょっちゅう世界中で行なわれているんです、現にね。そのことは絶対、日本人の意識にのぼらない。たまたまパリでガリマールなんかが本を出して、それがちょっとこういうところへ紹介されますね。そうすると世界のなかの日本文学というんです。

バロン　そうそう。

大来　これは明治以後のことかもしれないですが、日本は外から知識を吸収するというオリエンテーションが非常に強くなっていて、日本のことを外に説明する機会もないし努力もしない。つまり外から学んで自分のために役立てようということで、ずっと明治以来意識がきていて、僕は技術援助だとか開発問題でいろいろ開発途上国に行ってそういうことを感ずるんです。なぜもっと日本のことを向うの人にもわかりやすく日本人が、書くことができないのかと思います。インドの大学に行きましてね、日本人の書いた日本人経済の教科書がないじゃないか。ロックウッドの本だとかG・C・アレンの本はあって、それをわれわれは仕方がないから教科書に使っているんだけれど、どうして日本人は日本経済発展論というのを書いてくれないのかと聞かれるんですが、どうも学者も役人も実業家もみんな含めて、外からの知識を吸収して自分の栄養にしようということばかり考えて、こっちの経験を外に出すという気持ちにあまりなっていなかったということがひとつあるんじゃないでしょうか。これは一時的なのか、日本人の本質なのかよく知りませんけど。

滝田　私の分野に入ると、労働運動を説明する本が一冊もないんです。日本の労働運動。困ったなと思っているんです。

江藤　それは外国人がお書きになる。

滝田　外国語で書いた日本の労働運動の説明書がどこにもない。しかし現に日本の企業別労働組合というものがどんな役割を果たすかということについて、次第に世界の関心が高まっているんだけれども、説明するなんの材料もないんですね。

松山　僕は4年前にニューヨークにいましてね、ある証券会社がニューヨークの大きなホテルで日本についてのセミナーをやった時の講師が、バロンさんとライシャワーさんなんです。日本人とビジネスをもつにはどうしたらいいかという説明を、日本人の講師ではなくて、ライシャワーさんとバロンさんがやったんです。これは非常に典型的です。

そういう意味で日本というのは、外国の文化を受け入れることには非常に熱心だったけど、エキスプレス・ワンセルフの訓練をしなかった。大学の入学試験も英文解釈はあっても、英作文をしないで入っちゃうというようなそういう感じでしてね。このごろわりと国際会議で日本人が出て行って日本のことを説明する。そういう人達というのは結局、大来さんみたいにもうごく限られているわけです。私は今年、大来さんと3回や4回会いましたね、国際会議で。

大来　松山さんも限られたひとりだからね。（笑）

松山　だから日本はもっとそういう意味じゃあ外国の文化を吸収するほう、これもやらなきゃいかんけれど、それよりも自分のことを他人に説明する。江藤先生に言われた身内意識じゃなくて、そとに向かって客観的に物事を説明する訓練というのが大事なんで、私はこの21世紀の討議というのはだんだんこれから進んでいって、最後はやっぱり教育の問題というのが非常に大きいと思うんですよ。

バロン　毎年25回くらい外のビジネスマン、欧米の重役のためにセミナーをやるんです。すると日本についてなにも読ませるものがありません。簡単に根本的に普通のビジネスマンにやさしくわかるように……。まあこちら側のレコメンデーションは2冊ですよ。ひとつは中根先生の「ジャパニーズ・ソサエティ」、ちょっと失礼かもしれませんが短い本です。非常にシンプルです。堅い言葉をあまり使わないで、ちゃんと普通のビジネスマンにもわかるように。けれどもこれだけだったら、ちょっと足りないと感じますね。

ですから最近では土居健郎先生の "The Autonomy of Dependence" 実際は翻訳でしょうけど。その「甘えの構造」は、サァー真面目な外人が読んだら理解するんじゃないかと感じますね。

その2冊は非常に便利だったですよ。けれど2冊だったら寂しいですよ。中根先生お願いしますよ。

松山　もっと大きい本をね。

バロン　いやいや大きいんじゃないけど何冊も。（笑）

日本人の国際感覚

江藤　日露戦争のあと第2次大戦の前ごろの日本の総理大臣が施政方針演説をするとき、必ず決まり文句があったんですよ。要するに締約国、条約を締結している国との友好はますます深まり、日英同盟はますます強固に、それから日仏、日露の両協約も、ますます実効を発揮していると言うんです。私はこれは非常にいいと思うんです。インターナショナライズする感じで全部カウンター・パートがあるでしょう。

いま日本の総理大臣がもし同じようなことを

滝田実

言うとしたら、決まり文句はなにかといったら平和大国日本というんです。現実にあるコンフリクトを全部捨象しちゃって、平和大国日本でありますから、国連中心でなんとかやってまいりますとこういうと、また議員さんもそれで納得しちゃうわけですね。われわれも納得しちゃうんです。カウンター・パートとのぶつかり合いがあり、それを調整するという感覚は、当時の日本のリーダーのほうがもっていたんですよ。

松山　まず財界などにしても、石田礼助とか佐藤喜一郎、石坂泰三、ああいう人達はコンフリクトをやってこられる人なんだけれども、戦後の経営者というのは、非常にただ高度成長に乗って、それぞれの組織で忠誠心や年功序列で上がって、それで大経営者になっちゃった感じで、私はニューヨークでどれだけその場を見たかわからんけども、日本とアメリカとのトップ同志が会ったあと、たいへんけっこうな会談でしたと、アメリカはお世辞がいいから言いますね。するとみんなほんとうたいへんけっこうな会談だと思って日本へ帰ってきて、固有名詞はあげないけれど某頭取が某社長が、私はアリメカでうんともててきたと、私は国際派だと言っているんです。ところが私がアメリカの人にあとで聞くと、いやミスター松山、おれは今度生まれるときには日本に生まれたいって。どうしてだというと、あの程度でトップになれるんなら日本に……。

（笑）

滝田　いい例があるんですけれども、これは書いたり喋ったりいままでしなかったことですけれどもね。1960年に安保の大騒動がありましたね。そうしてケネディ大統領が出現したとき私は国務省から招待されて二人だけの話に入りました。そのときなぜ安保条約に反対なのか、それを聞かせてほしいというわけです。というのはあなたの国のプライム・ミニスターの岸さんに条約の期限を10年間にしてくれと言われたから10年間にしたのであって、アメリカから決めた10年間ではないというわけです。それを日本人がなぜ反対するのですかと、こういう話になった。

私はあれだけの重要な政治課題を決定するまでに、自分はこう思うんですがあなたはどうですか、という話がぜんぜんされていなくって、非常に残念に思ったんです。しかも決めたことが国民に全部反対されるプロセスが分からないというわけです。

松山　いまの円高や日米経済緊張だって、結局、日本のほんとうの気持というのは、あまり外国に伝わっていない。急に特使派遣で、大来さんや牛場さんは候補のひとりかもしれないけれど、そういう特使を派遣しなければならないわけです。

大使やなにかが行っても、そういうことはぜんぜんやっていないんですよね。

円高問題の事例をめぐって

中山　今度の円高問題というのは、もう皆さんご承知のように、ああいう黒字が黙って続いている限りは、マーケット・メカニズムとして当然なんですね。これをおさえるために、なんとかいろんな形でやろうとしてもそう簡単にはいかないと思うんです。ですからそういう円高問題を機会に、アメリカがもっている問題というのはいったいなんだということを、もっと日本人が考えなければいかん。日本のほうで考えるべき問題がうんとあるわけなんです。

第一、かりに今年や来年黒字が続いて輸出が伸びて、それでどうにかこうにか景気と、それから、雇用がかつかつ維持されていっても、これが3年、5年と続くはずは絶対ないんですよね。だからそこのところはなんとかある段階で、たとえば輸出に対しては自粛するための税金を課するとか、そういう措置は早くやったほうがいいと思うんです。これはあるいはすぐにはきかないかもしれない。だけれども1～2年の間にはおそらくきいてくるでしょう。

それから国内体制の転換というものに早く手をつけなければいけない。そのためには一時的だったら、そうとうの金を出してもいいのではないか。たとえばスクラップ・アンド・ビルドに対するお金とか、あるいは業種転換のための再教育の費用とか、そういうことはいままでも少しはやっているんだけれども規模が小さい。今度は思いきってそういうことをやって、日本の経済の再転換をはかるような時期になっていると思う。

それからもうひとつは、先ほどライシャワーさんの書物にもあったように目に見えない貿易の障害、しかも保護的な束縛というのは非常に多いんですね。たとえば牛肉の例で見ても、それからその他の例で見ても、話はもう分かっているんですよ。分かっているというと悪いかもしれませんが、筋道としては分かっているんだけれども、実際には動かないというやっぱり日本的な感覚の問題というのが多過ぎると思う。

たとえば新しいケネディラウンドとかなんとか言っていますけれども、そんな新しい方法をとらなくてもいまの関税の中にも改良の余地があるんです。たとえば金の輸出に対して税がかかる。金の移動というのは事実上は自由なんです、実際は輸入も。輸出もそれなら制限を外したほうがさっぱりするんじゃないかというんですけれども、いざというときに困るというので外していない。

だから形はそのまま置いといて、そうして実際は自由にする。こういう考え方というのは日本人的で外国人にはわからない。金はひとつの例ですけれども何十品目といわれている関税の中にはそういうものがたくさんあるんです。そういうのはこの際思いきって撤廃して、そうしてもし必要があれば、今度必要になったときにもういっぺん考えるということにしたらどうか。そうすれば品目でもって何十品目フリーにしたといっても実質はなんにもかわらない。そういう形でやるべきことがたくさん残っている。その問題を日本のほうでもっと考えれば、アメリカとの摩擦も少くなるのではないかと思うのです。

それに対する不満というのが赤字になる時期を示せとかいうことであって、本気で赤字になる時期を示せといっているのではない。そういうことくらいは、日本人のほうでも分かっていいんじゃないかと思うんです。

中根　それはやらないんじゃなくて、分からないんですかね。

中山　いや分かっていてやらない…。僕はそう思うんですがね。少し日本のほうを弁護しているかもしれないけれども、僕は分かっていると思うんですよ。僕くらいが分かることが、日本の偉い人が分からないはずはないんだからね。

大来　コンフリクトの問題は、いま中山先生の言われた日米のコンフリクトが、経済面に出ているわけですね。そうとうなコンフリクトだと思うけれども、まあ両国関係を破壊するまではなかなかいかないと思うんですが、しかしそれにしても、コンフリクトの中味を分析してみると、21世紀の問題に多少つながるかもしれない。

たとえば日本人自身が分かっていてやらないのか、分からないでやらないのかということでいえば、日本の経済政策のファイナル・ボイスはやっぱり大蔵省が握っている。必ずしも政治家ではない。その大蔵省のなかでも主計局が握っている。大蔵省のなかの国際派というのは従来比較的発言権が弱い。だから有効需要を拡大しなければいかんといっても主計局が財政赤字は3割越しちゃいかんといったら、それがファイナル・ボイスになる。

われわれはアメリカのクーパーとかバーグステンとかよく話す機会があって、やっぱり分からないのは役所的思考方式なんですね。形式を整えて7億ドル赤字になる。これは各省協議した結果そうなったんだと。エコノミスト的発想じゃないですよ。実際どうなるだろうということよりも、各省で相談してこういう数字になったから、これが日本政府の正式見解であるということで、それはアメリカ人から見ると、どうしてああいうことになるのかなという、まあ前には為替レートをどうして切り上げないかというんで、われわれも、ずい分言われたことがあるんですが、なんかデシジョンメーキングのプロセスが彼らとかなり違って、分かっていない面と分かる面とがある。

それから日本はまだ欧米に比べてかなり中進国的な要素、ダイナミックな面があって競争力も強い。それだからそれがやっぱりコンフリクトになっている場合もあるわけですね。日本人の発展段階、日本人自体の国民性というよりも、発展段階の違いがそういうふうになっている面もあるし、それから日本人が単一民族だからツーと言えばカーと、社長さんがよろしくおまえやっておけというと社員が分かるというような、あまり説明を要しない、説明することの習慣がない。それを外国に適用するから向こうが分からない。僕は黒字問題というのは、ある意味じゃ一時的な問題だと思うんですが、どうしてそういうコンクリフトが出て来たか、原因分析をやると非常に面白いことになるかもしれんという気がしますね。

中山　問題は、いまやっている円に対する日銀のインターフェアですね、介入というのをどう理解しているかということなんですね。あれは240円ではっきり決まるという見通しが立っておれば堂々たる介入でいいんですよ。名目は投機防止ということですけどね。投機と商売とを区別することはできませんよ。それはある程度までできますよ。しかしちょっと立入ると、これが投機かこれがビジネスかということを決めることはできないはずなんでね、理由がたつのは一年に20%あがるということだけでしょう。

それで僕は為替相場を決めるものは、フローティング・システムをとっている以上、結局マーケットプライスである、と考えなければならない。そうするとあのインターフェアというものは、日本のいままでのマイナスを守るためのインターフェアと理解されるというと非常にまずいことになるんだ。

滝田　私は現場に接触している人間ですが、私は昨日、一昨日、関西に行っていたんです。大阪へ行って、業種によりますけれども100社なら100社、300社なら300社にアンケートを取ると、このレートなら自分のところの企業は成り立ち、これ以下では3月期にだめになっちまうと、そういうデータはある程度出てますよ。

ですから大混乱が起こる可能性があれば国内の混乱を避ける意味において、ある政治的な意味をもつ線を引かざるを得ないのも現状のように思います。

江藤　いまの問題には、ロジカルな問題とサイコロジカルな問題があって、日本のことを理解するうえで非常に大事なのは、サイコロジカルな問題をどのくらい評価するかということですね。

それからもうひとつコンフリクトの構造の中で、小さい問題かもしれないけれど案外大事なのは、アメリカのポリティカル・システムですね。つまり繊維のときにだいぶお互いぶつかり合って、気持ちというものまでわかってきたわけですよ。ところが日本の役人は、その繊維をやった人はいまでも役人ですね 大部分は、まあ、勇退した方も、おられるでしょうけれども。アメリカのお役人はまったく違っちゃったわけです。共和党が民主党になって。これはいま非常に大蔵でも通産でも困っているようですよ。

バロン　ですからアメリカはロジカルじゃないんですよ。

江藤　エモーショナルですね。

バロン　そうですよ。だから、お互いエモーショナルだから、まあなんとか我慢がありますから、たぶんこれはスタートできるんじゃないでしょうか。けれども、日本で言えば、西洋だからロジカルのはずとするでしょう。向こうから見たら日本ももちろんエモーショナルです。ぜんぜん分からないんです。現在の世界ではコミュニケーションはゼロに近いでしょう。

そこで日本に対してひとつの文句を言いたいんです。現在の日本人は非常に簡単に向こうの言葉を使って言うんです、たとえばガバメントと。日本人だから自分の意味で向こうの言葉を使うんですね。これはたびたび大学院の学生とチェックしていることですが…。日本のガバメントとビジネスの関係について説明して、いつもいつも英語の言葉を使って言うんです、ガバメントとビジネスとね。長い説明のあとで、サァ日本語で「ガバメント」どういうふうにどんな言葉を使って言いますか。サァね、政府じゃないですよ。国家でしょう。つまり向こうの言葉は国家、完全に違うんです。どうして日本ではガバメントという言葉を使うんですか。

これはたぶん学者の影響で、どこでもいつも同じ言葉を違う意味で使っているんですね。たとえば日本の労働組合はレーバー・ユニオンじゃないでしょう。けどどんな国際会議でも、いつもいつも労働組合はレーバー・ユニオンと。もちろん向こうでは分からないんです。おもにアメリカ人の場合では、その国語は世界語になったから、そのときもちろん完全にめちゃくちゃになるはずと思いますよ。

松山　その労働組合の話では、朝日新聞の広岡社長が、ニューヨーク・タイムスへ行って通訳するときに、この広岡社長は昔終戦直後、朝日新聞の労働組合の委員長をやっていたといったら、みんなびっくりするわけですね。考えられないわけです。

その次に今度は奏専務が来て、奏専務も終戦直後の朝日新聞の労働組合で書記長をやっていたといったら、おまえのところはいったいどうなっているんだというわけですよ。なんでそれがレーバー・ユニオンなのかというんですね。だからほんとうに、同じ言葉でもぜんぜん違うんですね。

江藤　ついこのあいだまで向こうの椅子に坐っていたのが、今度はこっち側へ坐るんですからね。

松山　現に朝日新聞のいま労務担当は、10年前に組合の委員長ですからね。日本では、あたりまえでしょうが。

江藤　あたりまえですよ、優秀な人がそうなるんだから。

松山　まあ、外国じゃ通じないです。それはね。

バヨン　たとえばブローカーね。日本のブローカーと向こうのブローカーとは、違う人間でしょう。

日本人的「時間」

江藤　国連大学のヘスターが、日本の財政制度というのは、全く分からないらしいですね。私もわからないんですけどね。まあ、国立大学に勤めていると、少しは末端で影響を受けますから、予算要求を出したりなにかするのに多少は感触として日本人ですから、ある程度は腹で分かるところもあるけど、ほんとうにヘスター氏は、彼はちょっと気の毒なぐらい分からないらしいですね。

中山　日本のそういう大学関係の財政状態はバロンさんがいちばんよく知っている。

（笑）

大来　バロンさんが数年前に僕に話をされて、自分達外国の人間、とくにヨーロッパの人間が日本を見て、不安を感じることは、日本という国は、なんか非常にダイナミックだけれども、そのダイナミズムがどっちに向かって動いているのかよく分からない。ヨーロッパでは、たとえばフランス革命だと、そっちへの方向に、目標をもって社会が動いていくんだけど、日本はなんとなく動いて大変なエネルギーで変わっていく、それがよく分からないと言われたことを思い出すんですけど、やはりいまでもそうですか。

バロン　そうですよ。これは日本の特徴じゃないでしょうか。

中根　日本人だって分からない。

江藤　そうなんです。

バロン　日本人のタイム・ダイメンションは、根本的に違うんです。

江藤　そうです。それは違いますよ。

バロン　ある程度までヨーロッパとアメリカでも違いがあります。けれども日本のタイムは根本的に違うと思いますよ。

いま、社長さんについて悪口が出たんですね。その悪口の理由は、社長の行ないのもつ、タイム・ダイメンションですよ。いつも、いつもナウだから日本人のタイムワイズは、ありません。過去があります、もちろん。けれど将来は、ぜんぜんありませんね。

中根　ポジティブにはない……。

バロン　ですからこれは、非常に強い点と弱い点みたいですね。これは実際に生活は、将来と関係ないんです。頭ではなんとか将来について心配しますけれど、腹で将来は分からないから、その心配は意味がないでしょう。

中根　私そういう違いね、前から考えて、ちょうど比較すると、日本は軟体動物みたい。クラゲみたいで、西欧のほうは馬だとか羊だとかちゃんと立っているだけで方向がわかる…。だけど日本の場合は、どうもヒトデとかクラゲとか、そういう体質というのかな、構造をもっているわね。だから存在するだけでは、みんなが見て、いったいどっちへ行くのか分からない。

バロン　そうそう。

松山　クラゲと言いましたけれども、大平幹事長は、筏というんですよね。日本は筏だと。

中根　筏ならまだ……。

松山　だいたい流れに乗っていくだけで、自分のエンジンや舵はないわけですよ。要するに、下流のほうには行くけれども、自分で岸に着けるとか、そういうことはできないんですね。

江藤　大平さんが筏じゃないんですか。

松山　彼はいい意味で言ったみたいなんだな。

江藤　ますます自分のことを言っているんですね。（笑）

大来　「くらげなしに漂える」と古事記にも書いてある。

中山　自分の専門に関することで言うのはむつかしいけれども、経済学というのは実際困る。経済学というのは、現在の問題はないんですよ。食糧が現在少なければ少なく食うより仕方がない。なんのために貯蓄をするか、なんのために設備投資をするか、みんなの将来の問題なんです。だから経済問題を考えるときにそれでは困るんですよ、実際ね。

江藤　プログレス〔進歩〕という概念は明治10年まで日本にないですね。これは、ソーシャル・ダーウィニズムが入ってきて、できたものです。人類の社会というのは、非常にケーオステック状態からシビライズな状態に、ずっと動いていくという考え方ですね。

R．バロン

明治9年にエドワード・モースが来て、これがほんとうにバイオロジカルなダーウィニズムを東大へもってきた人です。それから明治10年には、フェノロサが来るわけです。フェノロサは、日本美術を世界に紹介した人として知られいますけれども、しかし彼は哲学の教師として来るわけですね。哲学とポリティカル・エコノミーと、両方一人で教える。350円かなにか月給をもらってね。非常な高給ですけどね。このフェノロサがハーバード・スペンサーを紹介するわけです。スペンサーが明治のエリートにあたえた影響はすごかった。

明治のエリートは、なぜエリートだったかというと、いまのお話で考えてみると、タイム・ホライズンがあったということを、要するに摂取した人びと。だから明治の日本というのは、とにかくよくわからないが、いまよりはもう少し馬に似ていたんじゃないですか。

松山　僕もそう思うな。

江藤　折口信夫のなかにおもしろいことがあるんです。昔は天皇というのは、代が替わっても同じ人間だと考えたんですね。つまり、春が来て、夏になって、秋になって、冬になって、また春になっても、天皇というのは一人しかいない。エターナルに天皇だと。ところがそこに奴隷ができたときからこの何々天皇の民これは、汚れを得ますから脇へ隔離されるわけですね。それでやっと、歴史のヒストリカルな把握というものができるようになった。

しかし、そのヒストリカルなものも、結局螺旋形にぐるぐる回っているわけであって、同じ平面で回っていない。常に螺旋で回っている。

江藤淳

中根千枝

林雄二郎

それは、日本の古代を研究した非常にユニークな学者が言っていることですけれども、元来日本人のパーセクションというのはそうだと思うんですよ、タイム・パーセクションというのはね。そこで何が大事かといったら、ほんとに今が大事なんです。ヒアー・アンド・ナウ。

バロン　これはコンフリクトのコンセプションの場合には、根本の違いです。

松山　違いです。明日あいつとどうぶつかり合うかと。げんこつで殴り合うか、それともひっぱたき合うか、それとも足をかっさらうかということを考えたことはない。いまにこにこしてこうやってハアッとやって、ニューヨークへ来た財界人と向こうの財界人とこうやって、日本素晴らしい、アメリカ素晴らしいと。いま、このあったかい手の感触も、すぐに、もう時差もあるし、先へ進んでいるし、もうコンフリクトはあるけれども、それはぜんぜん考えない。

中山　どっちがしかし幸せだろう。

中根　それは分からない。

江藤　それは分からないですよ。

バロン　それは島国根性だな。（笑）

中根　日本人はみなオプチミストですね。

世界のなかの日本人

江藤　オーティス・ケリーという人がいますね。あの人が、フランスと日本を比べて、フランス人というのは実に頭がいい、金を賭けるときでも、どんなときでも、フランス革命をやっているときだって、決して49%しか賭けなかった。51%はちゃんととっておいたから、フレンチ・アイデンティティーというものは、ちゃんとつながっていく。

ところが日本人もそうだと。安保騒動のあとなんです。安保騒動であれだけガアガアやっていたって、49%も賭けていない。せいぜい30%しか賭けていない。それであとは知らん顔してたくさんこっちのほうに貯金を置いといて、そのことを少しも知らないのが日本人。そこが日本人のかわいいところだと。もしフランス人と同じになっちゃったら、こんなに扱いにくいものはない。彼はやっぱりよく日本人を知っているなと思いましたね、その時。

バロン　そうそう。

江藤　それは、コンセンプチュアライズできるかどうかの違いですね。ビヘービアとして同じことをやっていて、それからそれがどっちへ進んでいるかという意識がないというのを、もう一つ付け加えなければいけないでしょうけれどね。

しかし、とにかくオーティス・ケリーによれば、日本人というのはアメリカ人にぜんぜん似てなくて、そういう意味ではフランス人にいちばんよく似ているけれど、フランス人はよく知っていて、日本人はなにも知らないところが、まあ救いがあるというか、かわいげがある。

林　日本人が案外日本人を知らないんじゃないんですかね。

中根　外国人が、日本人はちっとも説明してくれないというけれども、こっちも分からないところがある。

松山　むしろ世代の差で、今の若い学生やなんかを日本人だと思われて、アメリカ人に言われると、ほんとうに困っちゃうんですね、弁護する気にならないし。同じ日本人でずいぶん変わってきちゃったでしょう、いろんな点でね。

中山　僕はその経験があるんですよ。シカゴの美術館を昔訪ねたときに、昔といっても十数年前ですけれども、あそこに人類博物館があるでしょ…あそこの日本人のサンプルというのは、男は、丁髷はさすがにつけていないですけど、袴はいてちゃんとしているんですね、女の人はひっ結め髪なんですよ。どちらもちゃんと和服で並んでいるんです。ちょうどそこに、館長の代理と名のる人が来ていたので、これがどうして日本人の代表だ、こんなのは日本人じゃない。みんな洋服を着ているといったんです。すると服はとにかくいいけれども、じゃあ一体、いまの日本人というのはどういうのが代表的なのだと逆にいわれて、まいったことがある。返事ができないんだ。ほんとにまいったことがある。（笑）

林　このごろ日本人論で、いろんなものがあるんですよね。

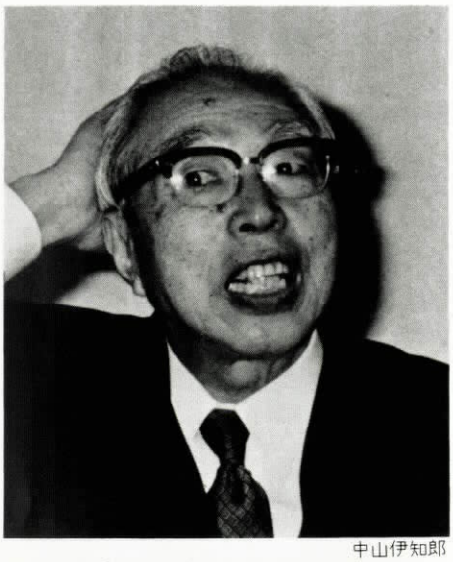
江藤　日本人が書くと、あまり権威がないんですよ。ライシャワー教授がお書きになると権威があるんです。

林　結局日本人は、日本をよく知っていないんじゃないかという気がしますね。

江藤　知りたくないんでしょう、おそらく。日本人を他人扱いにして分析するということは許せないんですよ。

中根　ほんとう……？

江藤　だと思いますよ、日本人はそういうところがあると思いますよ。私がというより、私は


中山伊知郎

松山幸雄

滝田実

日本人というのは他人だと思っているから、私は、日本人をよく知りたいしね、ただ力が足りなくてよく分からないだけなんだけれども、それは自分の父親、母親というのを1個の生物として分析するということはようしないでしょ、それと同じですよ。それから自分の子供だって、多くのアベレージの親を見ても、うちの子は塾にさえ通わせればいい学校へ入ると思っている。そんなことはあり得ないですよね。バカやチョンがいくら塾へ通ったって、金ばかり取られてどこにも入れやしない。そんなことぜんぜん信じないと同じですよ。

中山　なるほどね。そうすると、日本人が日本人を知る唯一の道は、文学ということになるかな。ある意味ではね。

江藤　文学を冷たく分析するんですね。しかしそこでもはっきりしたことは、他人が出てこないような小説をつくるんですよ。私小説というのは、これは西洋にある自伝的小説とちょっと違うところがありますね。これはそれなりに非常にいいものです。それはやはり日本語の国語の芸術としては、大変高いところに達しているのが多いですけどね。これは、コンフリクトレスなんです。コンフリクトは、自分のなかにしかない。

だから、たとえばバロンさんとだれか綺麗な女の人がいて、私が恋敵になってというときに、その3者の関係を書くんじゃないんですよ。そのときバロンさんがあの女とこう一緒に行ったのをうしろから見てて、自分はどう思ったかということを書くわけです。それを綿々と書いていくわけですね。そうして、おれはだめなやつだというと、みんながそうだ、そうだと思って。

中根　主観的なのね。

江藤　主観的なんです。非常に主観的で、これは私小説の最高の達成は、暗夜行路だと言われているでしょう。暗夜行路というのは綿密に分析したら、自分と等価におかれた他者というのはないんです。

中根　そうね。

江藤　それは、志賀直哉が特殊なケースではなくて、志賀直哉のエピゴーネンはみんなそうですよ。いまだにそうです。そうして、文壇でいちばん評判を得るのは、自分が一人でなんか交通事故に遭ったあとで、庭を見ていて、どんな虫の音が聞こえたかというのを静かに書いているとか。あるいは中根さんが好きでしょうがないのに、中根さんに振られたという悩みをえんえんとひとりで独白するとか、どっちか書けばこれはもう傑作になるわけです。もし文章がうまければ。ところが、中根さんを一生懸命愛しているのに、バロンさんが出てきてというようなことをやると、これは通俗小説になっちゃう、日本人のなかでは。

中山　そうだね。

江藤　これはほんとにそうなんですよ。それで、谷崎潤一郎というのはどっちかというと、わりあいにコンフリクトのある世界を書きます。これは、志賀直哉より一歩劣ると、こう思われているんです。ところが、谷崎潤一郎がもし生きていれば、最初のノーベル・プライズ・ウィナーになったことは確実な人なんですね。西洋人にはよくわかるわけです。

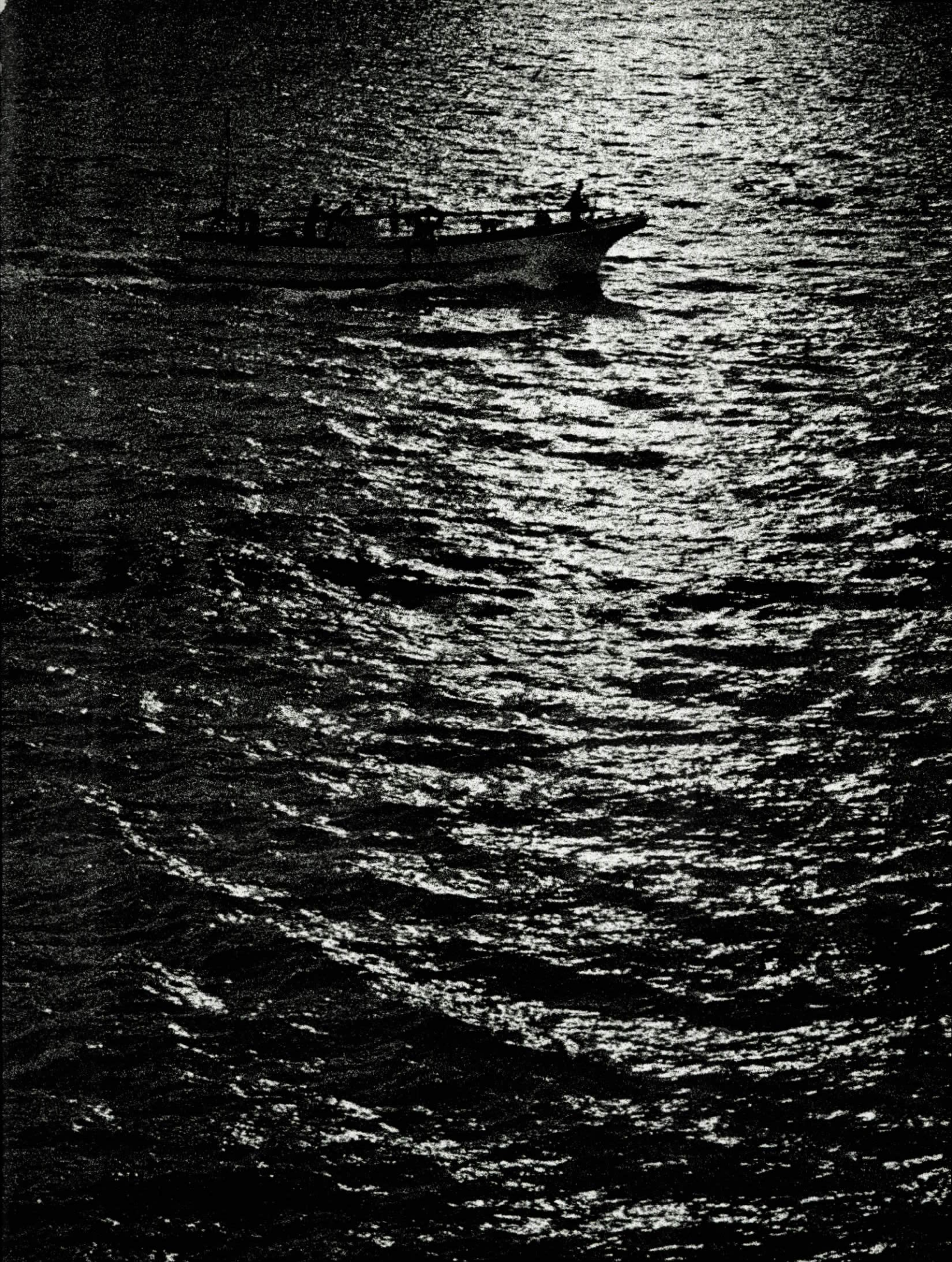
松山　翻訳は、谷崎のほうが多いわけですね。

江藤　多いわけです。志賀直哉は、暗夜行路がやっと翻訳されて、これはエドウィン・マックレランという非常によくできるハーフ・ジャパニーズ・ブリティッシュのエール大教授が訳したんですけれどもね、実に見事な翻訳だと思うけれどもね、全く冷たい批評しかアメリカではないんです。

松山　谷崎は高いですか。

江藤　谷崎はかなり高いですよね。そうしてこれの例外はもっといるかもしれないけれども、分かりやすい例で言うと、漱石ですね。それから有島武郎です。有島武郎は、彼は、五つの時から英語を習わされた人ですからね。そうして、ハーバードに行って、アメリカで学位をとった人ですから、これは非常に恵まれた、国際的な環境で、お父さんは横浜税関ですからね。関税局長で。そういうふうにやった人は、これは違うんです。有島武郎は、日本語の文章よりも、むしろある段階では英語のほうがじょうずですね。ノートを見ますと、ダイヤリーなんか実にうまいです。明治、大正、昭和を通じて、あれは漱石よりもうまいんじゃないでしょうか。英語はうまいですよ。それから彼は、意外なことに戯曲が実に好きでね、ドラマが好きで、そういうドラマティックな関係という問題を書くわけです。これはしかし、彼の「或る女」なんて見ますと、情景描写でも、絶対に日本画じゃないんですね。油絵なんですよ。

中山　どうも今日はぐるぐる回ってきましたけれども、結局もういっぺん日本人を見直さなければいかんという話になりそうですから、このへんで第一回を終りましょう。



21世紀における日本人の生き方――松本重治グループ第1回会合速記録

昭和52年10月24日

出席者

松本　重治（国際文化会館理事長）
本間　長世（東京大学教授）
前田　陽一（国際文化会館専務理事）
槇　　文彦（槇総合計画事務所代表取締役）
村上　兵衛（日本文化研究所専務理事）
柳瀬　睦男（学校法人上智学院理事長）

国際的な相互理解の必要性

松本　私はいろんな新聞を見てもテレビを見ても、一種のコメントが出てたり、価値判断が発表されている場合に、ほんとうに突き詰めた、考えぬかれたものが欠けているんじゃないかということをしょっちゅう考えていました。

それでこういう機会に、みなさんご自身の人生観なり世界観なりの問題について、みなさんとお話しているうちに勉強させていただきたいというのが、私がこのグループを作った、非常に欲張りな理由です。

戦後、ことにアメリカの社会科学、とくに社会学者がいろいろ価値観の変動とか、年老いた人々と若い世代との非常な価値観の相違とか、そういうことをどんどん出しているわけですね。ところが私にはどうしてもああいう表現がわからないんです。

それはなぜかというと、ある人の欲望は変化するかもしれない。自動車が便利になれば、それを買いたいとか動かしたいとかいうことはあり得るかもしれんけど、それがほんとうに、日本人の人生の幸福につながっているのかどうかという点になると、必ずしもそれは明瞭じゃないんじゃないか。それで私はいろいろ複雑で重大な問題を議論している場合に、必ずなんらかの原点に立ち返って考え直すというふうな必要があるんじゃないかということを考えておるんです。

それで、もちろん今日はみなさんにお集まり願って、「21世紀における日本人の生き方について」というテーマで、議論を進めていいでしょうかどうかという点を、まずみなさんから伺いたいと思うんです。

この21世紀におけるというのは、多少長期的な展望をふまえて、そうして日本人の生き方について考える。つまりそれは端的にいえば、いまから20年か30年後におけるエネルギーの問題はどうなるだろうかといったことを仮定しながら、21世紀における日本人の生き方という、時間的な、あるいは歴史的な、あるいは未来学的な一つの要素を入れて考えて行く。

それから日本人の生き方については、ほんとうは僕は人間の生き方だけでもいいと思いますが、幸か不幸かわれわれは日本人であるので、最近は、国籍のない日本人、トランス・ナショナルなんていう国籍もあるようですけれども、とにかく日本人であるということをここはやはり考えなければならんので、日本人の生き方ということにしたわけです。

それからもちろん、生き方については広い意味で環境の問題というのがあるんで、公害も私は戦争だと思っています。戦争を防止するためには、しょっちゅう平和の構築というものを考えなければならん。そのためには、日常、お互いの国際的な相互理解の増進をはかるということも意味のある仕事であるかもしれんけれども、単なる相互理解しただけでいいのか、相互の差違を理解しただけでいいのか、あるいはとことんまで行って、国が違っても、文化が違っても、ほんとうの相互理解というのは、同じ価値観の感応といいますか、共鳴というか、そこまで達するのがほんとうの相互理解のいちばん深い層になるのではないかとまで私は考えています。

その他に人類学的に、エコロジー的に、スピーシーズ、種としての人類というものの立場というものを考えておく必要があるのかないのか。

とくに日本においては、1950年代の末期から60年代を通じての高度経済成長、それから、大量消費、そのために少し贅沢にすぎるようになってしまった。それでもう靴下に穴があいたらつづらないで、捨てた方がいいという考えも、成立した。なんだかやっぱり靴下の穴の一つぐらいはつづったほうがいいというのが私の考え方なんですが、なかなか若い人はそういうふうには考えられない。少し節約を宗とした生活がかえって精神的な生活の面においてのバラエティと深さをもたらす一つの起因になるのではないか。そういうふうに私は考えています。

いわゆる南北問題についても、発展途上国の人々、リーダー達と話合いするときに、先進国である日本、そうとうな経済大国の一つとしての日本の国民の一人として考えれば、やはり途上国の人々に対しては、多少自ら反省すべきところもあるんじゃないかというふうなことも考えています。

日本人は自分自身のコンフェッションを言わないことが非常に多いです。このグループの方方にもコンフェッションしてくださいと私はけっして申しあげませんけれど、なにかみなさんが考えておられることを、まずこのテーマに即したコメントととして、お話しいただければ非常にありがたいと思います。

村上さんは、日本文化を、外国の人に理解してもらうための苦心を、もう10年近くやっておられるんですが、ドナルド・キーンなんていうのは、日本文化にもっと自信をもたなきゃいかんという考え方ですね。言葉まで日本語で押し通すということまで考えている。しかし、日本人の特長もいろいろあるだろうし、強さもあるでしょうが、弱いところもたくさんあるでしょうね。

村上　私、いま関心をもっておりますのは、いまおっしゃったように、なんとか日本の文化を向うに理解してもらうような、そのきっかけになるような仕事が出来ないか、ということです。海外における日本研究は、もちろん文学の方面でもずいぶんいまふえておりますし、あるいは政治経済の方も私はあまり知りませんけれど、かなりいろんな研究もされているようです。私どもの研究所では、いま歴史の本を作っている

松本重治

んですが、歴史の分野でも、関心はおそらく明治維新から、つまり近代化の問題からはじまったんだと思いますけれども、だんだんその前提になる徳川時代に行き、徳川時代の前提になる室町まで、学者の層が広がって、古代はちょっと少ないようですが、これは、むしろ鎌倉の仏教とか文学の方から入った人が、かなりおられて、それより古い平安時代以前の古代がやや手薄であるのを除けば、かなりカバーされているようです。

ただ、いきなり細かい話に入りますけど、本を作りながら面白いなと思っていることがございます。歴史の本といっても、歴史上の人物を海外の30人に書いていただいているものですから、ある意味で外国人による日本人論にもなるわけです。そこでたとえば私、足利尊氏はたいへん好きな人物でして、とくに武将でありながら“迷い”の多いのがとくに面白いと思っています。1度、九州のほうに追いやられて、湊川で楠正成を破り、京都へ入って、清水寺に願文をかけますけれども、そのときに後生のことをしきりに願っていますね。今生の栄華は弟の直義に、自分には後生のことを、と願っている。あのへんのところが、たいへん面白いんですけど……。

ところがこの尊氏の執筆者は、若い、ハーバードの学者なんですけれども、それをまったく無視したものですから、ここは非常に面白いポイントだからと、ちょっとやり合ったんです。いや、尊氏はそう言っているけど、事実そのようには行動していないじゃないかと、スパッと切り捨ててしまう。事実はそうなんですが、私にとって興味深いのは、神仏の前に立ったときの彼の悩みなのです。

それから大久保利通ならば非常にスパッと分かるようなんですけど、西郷隆盛は分りにくい。たとえば明治10年の反乱でも、要するにヨーロッパ型のクーデターといいますか、政府を転覆して自分が支配権を狙っていた、と欧米の人たちは考えやすい。たしかに、まったく狙っていなかったとしたら、反乱を起すこともなかったでしょうが、日本人の心理としては、そう簡単に割り切れない。いわば自己を犠牲にすることによって革新を望むといった日本人の複雑なところまで――私は、西郷をそのように解釈したいのですが――うまく説明することが出来るのかどうか。そのへんを私は非常に興味を持っているんです。いずれもっと付き合っているうちに、そういう理解も出てくるんじゃないか。接触が深まるにつれて、そういうところまで入って、そこに注目する人も出てくるんじゃないかという気はしていますが、いまのところは、なかなかそこまで説得できないでいます。

日本文化の紹介

村上　日本の文化を海外に伝えるいろんな方法があると思いますけれど、私、この前アメリカの西海岸へ行きまして、主として日系人の調査をしました。日本のいろんな生活のなかの文化といいますか、短歌、俳句から生花、お茶、踊り、詩吟にいたるまで、そういうサークルが非常にさかんなのです。これらはアメリカ人の社会にもかなり浸透しておりまして、特に盆栽なんかは、いまたいへんなブームです。日本文化の紹介としては、そういうアプローチの仕方もあるんじゃないかということで、私どもも注目しています。とくにそういう生活のなかの芸術には日本人は強いんで、これは日本の国内あちこち調査して歩いても感ずることです。

たとえば盆栽についていえば、やっと最近、英文のしっかりした盆栽の作り方の本がロスアンゼルスからも出るようになりました。日系の一世の人ですけど、その人が全米あちこち飛んで歩いて指導したりしております。また、たとえば日本舞踊のほうでも、いまちょうど踊りのお師匠さんがテキストを作っている最中でした。

私が興味を持ったのは、盆栽の場合なら、木の高さのいったい何分の1ぐらいから最初の枝を出せばいいのか、次の枝はどのぐらいからかと、そういう数字で質問が出るわけです。また踊りのときも、顔をちょっと曲げて、というとその“ちょっと”というのは何度だと、必ず質問が返ってくる。そこでテキストを作るために、お師匠さんは鏡を見ながら写真を写して、角度を計って、テキスト作りをやっている最中だと、そんな話も聞きました。そういうようなことで、私たちに手伝えることがあるか、いま考えたりしているんですけれど……。

それともう一つ、とくに初等教育なんかの教材で、なんか私たちに出来ることがあるんじゃないか。たとえばカリフォルニアの小学4年生で、ジャパンというカリキュラムをやっているそうですけど、実際はほとんどなにも行われていない。日本人をちょっと呼んで話してもらうというようなことでお茶を濁すことも多い

ようです。とにかくてんでんばらばらになっている。ある時は踊りのお師匠さんが行ってさくらさくらを教えるとか、そういうような事情ですから、日本文化の伝え方は、そこにもあるんじゃないかと思ったりしています。

それでは、なぜ日本文化を伝えなくちゃいかんのかという、根本の問題になってくるわけですけれども、私は、日本的なもの、あるいは広くいえば東洋的なものかもしれませんけれども、それをもう少し西欧世界へ知らせ、押し出したほうが、世界のバランスはとれるんじゃないかと考えております。私の、たぶん21世紀に対する関心は、そういうものがどれだけこちらから向うへ行き、あるいは行かせることができるだろうか、ということです。

松本　村上さんの関心とご苦心というものは大したものだと思うんですよ。僕等も10年ほど前から日本を紹介するシリーズというものをやりかけたときに、いろんな問題を日本人自身が理解していないんですよね。だから逆に、日本自身をスタディしなければ、自分が分かっていなければ人にも伝えることは出来ないわけです。

西欧的思考と非西欧的思考

松本　柳瀬さんはこのグループに入ってもいいけど、時間をあまり取られちゃ、自分は本職が忙しくてしょうがないし、と言っておられましたが、1回でも2回でも顔を出してくださいって頼んだら、今日来てくださったんです。いい機会ですから、先生のいろんなご苦心のことを少し話していただけませんか。

柳瀬　私、専門は物理ですけれども同時に科学基礎論という哲学との間の問題をまあ、身分としてはカトリックの修道司祭なものですから、当然そういうディメンションでものを考えるようになります。

いろいろな個々の問題ですね、食糧問題、環境、福祉、教育、私は教育はもちろんある程度専門でなければいけないわけですが、南北問題、国際経済、戦争と平和と、こういう問題のグループに関しては、少なくとも現在私のいまの俗事は別としまして、根本的な考え方としては、もう少し根源的なことをだいぶ前から考え続けております。それは方法論の問題で、自然科学の方法論の問題と、それから哲学自身の問題、神学の方法論も入っております。

たとえばいまのエネルギー問題に対しても、だいたいエネルギーという概念がはっきり掴めたのは、やっぱり物理学のおかげであるということは確かです。

単振子を振らせているときに、このなかで一定で変化しないものはなにか、時間によって変わらないものはなにかと聞かれたときに、小学生だったらおそらくエネルギーだという答はぜんぜん出てこなかった。それから普通の物理をやらなかったら、そこからエネルギーが一定なんだということは出てこないと思います。しかし、物理のおかげで、そこからエネルギーという概念をまず掴み出して、それがいまのいわゆるエネルギー問題の出発点となって、人類がこのエネルギーをどうすればいいかということになったわけです。

それから、この間実はある有名な経済学者に話を伺って愕然としたんですけれども、熱力学では第1法則、第2法則とありまして、エネルギーの総量が問題ではなくて、形態が問題だというわけです。それを考えに入れないでやってきたと経済学者は言われるわけです。これはたいへんなことだと思ったんです。

実は方法論の問題があるからそういうことを申しあげたわけで、自然科学の方法論が少なくとも自然界からいろんな知識を汲み出して、それを人類の福祉に応用出来たということ、これは否定出来ないわけです。

しかし、それだけでいいかというと、どうもそうではなくて、まず物理学、自然科学自身のなかでも、そういう自然科学的な方法論は非常な限界を示しているし、とくに生物系に対してはほとんど無力です。

それから哲学の方法論は、パスカル、それからもっと前のデカルトの哲学的な方法論はやっぱり西欧的な、先ほど村上さんが言われましたように、踊りのときに頭を曲げれば15度でなければいかんというような考え方だと思うんです。その基礎にはやはり西欧的な思考形式があって、それは東洋人、日本人にとってどうもなじめない。しかも実際にそういう方法論を使わないで立派な文化を作ってきたじゃないかということがあるので、現在こういう問題を考えるときにその点をもう一回考える必要があります。

それからやはり人間の人生の意味とか幸福とか、いったいそれじゃなんのために生きのびるのかとか、そういう問題になると、やはりもうこれは哲学でもなくて、宗教的な信念、信仰とかそういうディメンションになるので、その点

村上兵衛

柳瀬睦男

に関してもやはり西欧的な、神学的な思考、方法論と、それからそうでない非西欧的な方法論の間には、かなり大きな対立というか、対照がある。それをもう少し根本的に考え直さないといけないのではないか。地球的な問題を扱うときに、どうも西欧的な方法論だけでは、不十分ではないかというのが私の考え方のもとにあります。

そのなかで二つだけ、ちょっと問題点といいますか、その方法論を考えるうえのきっかけ、というよりはむしろなにか考えの足場みたいなものを考えております。一つは論理の問題で、つまり標語的にいえば明晰判明な概念から形式論理を構成してやっていくという、普通の意味の西欧的な論理で、それが自然科学の下敷になっていることは確かで、それが有効だということも確かですが、しかしそれが限界を持っていることも確かです。

そうすると、その論理、いまの明晰判明な概念規定を少しゆるめた論理、いまのシステムエンジニアリングのほうで、ファジー・ロジックという一つの方法論が開発されております。あいまい論理というわけです。あいまい論理というのは言葉の矛盾みたいなもので、論理というのは明晰でなければいけないというのが元来の考え方ですけれども、しかし、あいまい論理という、モデルとしての理論が現在あるわけです。西欧的な問題点はどうも不十分であるとか、東洋的な思考形式を入れなければいかんとか、こう言っている間は、両方でいっこう話合いの糸口が出来ないんですけれども、それを一つ一つつなげる足場にそういう考え方があるのではないか。もう一つの足場は、時間と空間の問題です。時間と永遠というダイコトミーがいままでずっと西欧にも東洋のなかにもあったと思うんです。

しかし、よく調べてみますと、必ずしも実はそうでなくて、時間と永遠の間の概念もあったわけですね。それはキリスト教的神学論争のなかにあったんだけど、神学論争自身の意味がなくなったと同時に、そのなかにあったそういう考え方も全部忘れられてしまった。

非西欧的な考え方のなかには、いまの時間、つまり西欧的な考え方のなかにある、特に自然科学によって規定されたようなリニアな時間とか、あるいは螺旋形の考え方とか、そういうものではない、もうちょっとディメンションの大きい、時間を拡張したような概念があります。それは空間自身にも言えるので、それを考察の方法論のもう一つの足場にしたら どうかというふうに考えております。

はなはだ漠然としたことで、ちょっと恐縮なんですけれども、私としてはそういうことをやはり本当にアカデミックな立場で真面目に、だれかが馬鹿らしくてもやらなければならないと思います。

同時に、西欧の人にもなにかそこへ入る糸口を与えるような可能性がないと、お互いにぜんぜん話が通じないというふうなことにならないか。

また、実はそのいちばん底には、やはり宗教的な信念、神に対する信仰とか、そういうものが、あらゆる宗派を越えてあるのではないか。そうして無神論者とか、あるいは無関心派とか、そういうものであっても、人間が生きている以上は、どこかにほんとうの、まあキリスト教的な概念では神と言いますけれども、そうしたものとのつながりがないと、どうしても人間の存在というものは規定出来ないんじゃないか。それがないと、いろいろな問題を個々に考えても、結局は救いはないんじゃないかと、まあ非常に大きな言葉になってしまいますけれど、私はそういうふうに思っております。

都市社会における空間

松本　槇さん、柳瀬さんが時間のことを言われましたが、あなたは専門が専門だから、人間と空間の問題になりますか。

槇　そうでございますね。まあ、私自身建築家で、都市計画もやっているわけですけれど、興味をもっている空間という問題には、二つの側面があります。一つは使われる空間、直接効用的な空間の問題で、もう一つはアプリシェートする、鑑賞する、あるいは精神的、心理的な面に立ち入った空間の問題です。

これはどなたもご承知のように、私どもは高密度社会に住んでいるわけです。そこからくる特殊な空間の問題が、われわれの生活のなかに毎日かかわり合ってきているんじゃないかと思うのです。

たとえば、第1に狭さ。狭いなかで非常に活動力のある人間の集団が、どうやって空間を分かち合い、かつ利用し合ってゆくか。つまり絶対容量が決まっているなかで、人口はある程度横ばいになるかもしれないけれど、少なくとも活動力が衰えなければ、まだまだ多くの問題が起

槇文彦

本間長世

きてくるんじゃないか。

都市計画の分野でいえば、海岸線の利用というのが、二つの矛盾した側面を持っています。どうしても海岸線に沿っていままで都市社会が発展してきていますし、もっともっとレクリエーションとか、いろんなことに利用したいんですが、一方において環境保全という立場からそれを許されないというようなこともあると思います。

それから円高の時代になって、ますます諸外国に比べコスト高の社会というのが浮き彫りにされてきたと思うんですが、コストのなかに空間コストがどのくらい入っているかというと、これは想像以上に入っているんじゃないか。

ただ21世紀の日本が、ユニークな存在であり続けるかというと、実はそうもいえないんです。世界中の人口がふえてくると、われわれの直面する問題も、けっしてわれわれだけの問題じゃないということも言えると思うのです。

と同時に、そうした空間のなかにいると、必然的に起こってくる問題が、毎日の生活感情とか、それから考え方のなかに浮き彫りされてくる。それが昔に比べて現在および将来どうだったかということを考えてみますと、やはり日本人特有の、先ほど村上さんのお話にもあったと思いますが、文化形態と表裏一体になっているのです。

先ほど盆栽の話が出て非常に面白く感じたんですが、昔はいまほど人口はなかったんですが、小さな空間のなかでどういうふうに分かち合うかということが歴史的に長く存在していて、そのなかから生まれたミニチュアとしての芸術とか、そういう生活の表情みたいなものを、割合とうまく作り上げてきたということがあると思うのです。

それと関連しているんですが、情緒、あるいは精神的な面における空間の問題については、いろんなとらえ方があると思うんですが、一つのとらえ方として、風景としてとらえようという考え方が多く出てきています。

いままで空間をいろんな要素に分析してしまって、多いとか少ないという量的な問題、そういう形でとらえていた。これは建築、これは都市、これはコミュニティというような考え方に対して、風景として、つまり一番いろんな要素をインテグレートした形で見ていこうという考え方は、実際に絵画とかそういう分野ではあったかもしれないんですが、われわれ計画、建築するほうからはわりと少なかった。

この風景観には外国と日本と比べてみますと、さまざまな差があります。たとえば都市風景の絵を日本の浮世絵と外国の都市の絵と、あるいはランドスケープみたいなものを並べてみますと、その国によって、いったいなにが興味の対象になっていたかということの差が非常にはっきり出てきます。

浮世絵で申しますと、江戸時代の、たとえば、広重の浮世絵で、両側に町並といいますか、住宅とか店舗がある。またその背景はなにかと注目しますと、富士山だったり、雲だったり、わりと自然なんですね。

それに対して外国の絵画で都市風景を描いたのを見ますと、背景にもう一つ物体がある場合が多い。塔であるとか。キリコという人の絵なんか、イタリアの広場というのを見ますと、機関車だったり、現代と19世紀、18世紀の差はあるかもしれませんけど、少なくとも絵画の持っている都市社会における空間の考え方というものは、われわれと本質的に差がある。

松本　僕は、槇さんにいつも、建築家はやっぱり人間の研究をしなければならないのじゃないか、という話をしています。ところが、都市論の論文を読むと、都市化が人口をふやすというわけです。人間が都市化をつくるんではなくね。これは将来にわたる重要な問題です。

文化を考える視点

松本　本間さんひとつ、若い人に接しておられるから。若い人に分かるかね、こういうことは。

本間　若い人は21世紀まで確実に生き残るわけだから、深刻な関心はもちろんあるんだろうと思うんです。私はちょうど9月20日から10月20日までひと月、秋休みを使って、シカゴ大学におりまして、ロサンゼルスとか、サンフランシスコとか、デービスとかいうところを回って帰ってきたんですが、その主たる用向きはシカゴ大学でいまやっております、文化に関するプロジェクトに参加することでした。外交史の非常に立派な学者である入江昭さんが中心になって文化関係について少し勉強してみようということで、日本の学者、中国の学者も招くんですけれども、アメリカのなかのアジア研究家の他にアメリカのなかのいわばアメリカ史といいますか、アメリカ文化の専門家も招いて、それでグループを作って、いろんな問題を議論するとい

槇文彦

本間長世

前田陽一

村上兵衛

うことだったんです。

すでに1回、5月に最初の会議をやって、私が参加したのは第2回目の会議なんですが、それで面白かったのは、第1日目は中国の問題について人類学の先生が話をされまして、文化というのは根本的な点では中国文化にせよ、日本文化にせよ変わらないんだというんですよ。その会議でも、変わるというのはどういうことか、文化というのはどういうことかということで議論がだいぶ分かれまして、そのあと食事しながら、その反論というか、賛成しない空気のほうが一般的には強かったと思うんですが、そういう説が一つ出ました。

それから2日目に、シカゴ大学の日本史の研究の先生ですが、その方がセオリー・オブ・チョイス——選択の理論——について発表しました。これはいまの流行かもしれませんけれども、話を文化に絞って、文化の新しい接触があった場合、外国文化の流入もそうですが、何をとり入れ何を入れないかというその選択がどういうふうな基準で実際なされるのかということを理論化しようというものです。これは大変な努力で、長い論文を1時間半もかかって読んだのをみんなで聞いたわけですが、たいへん抽象的で、ねらいは選択の基準というものを一般的に突きとめたいということのようで、これがもし出来ればほんとうに、国際的な文化の交流の問題を解明するのに役に立つはずなんですけれども、なかなかうまくいかないんですね。具体的な例を持ち出すと、とたんに理論はうまく使えなくなる。

だれかが、コカコーラが世界中で飲まれるという例を持ち出しました。コカコラニゼーションという悪名高い現象ですが、アメリカ文化の悪影響のシンボルになっているわけです。コカコーラというのは別にアメリカが強制して飲ませたわけじゃないにもかかわらず世界で飲まれる。これは一つの文化的選択じゃないかと。これはいまの論拠でどう説明されるかということになって、ちょっと混乱しました。コカコーラという問題を理論適用の例として考えるのは末梢的であるという議論が出ましたが、それはちょっとおかしいので、もしそうした問題が取るに足りないことであるような理論であるとすると、その理論は理論としては美しいかもしれないけれども、役に立たないことになりかねない。

そうした理論化の試みは、懸命になって文化交流といいますか、接触といいますか、価値の相互作用を考え直そうということであるわけですね。そういう傾向がアメリカの学界でも強まってきているように思うんです。

ロサンゼルスへまいりますと、ロサンゼルスでもやはり同じようなことをやっているんです。これは日本とアメリカに限定して、しかも取り上げる時代を限定しまして、1940年代でしょうか、パール・ハーバーからサンフランシスコ条約までを対象とし、ここにおける日本とアメリカの文化的な関連、たとえばポピュラー・カルチュアとかライフスタイルとか生活様式の問題も出ましたが、そういうことについて研究しようというわけです。条約とか貿易の輸入輸出ということだけではなくて、文化というレベルでの問題が関心を持たれている。それはやはり生き方の問題ということに関連しているんだと思うんです。日本の明治時代というのは、いわば19世紀にいて20世紀における日本人の生き方の選択ということを考えた時代であったわけで、それと同じように、われわれがいま20世紀の末近くなってきて、21世紀における人間の生き方を考えるというわけですが、やはり人間は過去を振り返らないと前が見えないですから、今の段階で歴史を振り返ることの意味というのはあるんじゃないかと思います。

ただ、私は、松本先生のご指導でアメリカ史の勉強をしてきたわけですが、よかれ悪しかれ、アメリカが動いていく方向に世界が引っ張られていくんだという、そういう一つの前提みたいなものがあった。それはアメリカ人も持ったし、日本人も持っていた。あるいはヨーロッパ人も持っていた。つまりフランスのトックビルが19世紀前半に古典的なアメリカ論を書いた時も、ヨーロッパもアメリカのような平等社会になっていくんだというような問題意識があったわけです。

けれど最近のアメリカには、アメリカ人の経験というのは実はそんなに普遍的なものじゃないという考えが出てきている。これは松本先生が日本に招いたジョージ・ケナンがさかんにそういうことを最近言っていますし、ケナンばかりではなくて、デービッド・ドナルドという歴史家が、『ニューヨーク・タイムス』に文章を寄せまして、彼はハーバード大学で毎年、アンダーグラデュエートの学生を数百人も教えるという、たいへん人気のある先生ですが、自分は非常にいま困っているというわけです。それは、いままでだったらば、アメリカの発展の歴史と

いうものを教え、これはいわば、豊かさの獲得の歴史であったと言えばよかった。ところが豊かさといいますか、その豊かさの獲得の歴史というものを新しい世代の学生に教えるときに、彼等の生き方にそれはもはや関連性がない。自分がアメリカの過去を説くことは、新しい学生にとってどういう意味があるかと言われると、関連性があると言えないと言うんですね。

それでは、歴史家としてなにを説くかというと、これまでの歴史は役に立たないということ、これからの歴史というか、これからの体験にとって役に立たないよということを学生に教えるのであるというのです。

これにはすぐまた反論が出まして、ドナルドの議論にはそもそも論理的な矛盾があるというのです。しかし、ドナルド教授が書いたような文章が生まれる空気というものはあると思うのです。それはやはり人類の未来を考えていく点でかなり重要ではないかと思います。アメリカの歴史的体験というものが人類の将来にとってどういう意味を持つかということを、もうちょっと考えてもいいのじゃないか。私はアメリカ文化というものには、豊かさの発展ということが一つありましたし、政治の仕組みといいますか、人間が生きていくためのルール、組織、運営というようなものについてのアメリカ流のモデルというのがあったと思うわけです。そのモデルの普遍性というのはほんとうになくなったのか、それともまだ未来への適用性があるのかということを、つまりアメリカン・デモクラシーと言うんですか、その関連性ということも一つ考える必要があるだろうし、凡人の生きがいというものをアメリカは追求してきたはずなので、普通のなんでもない人がとにかく一生を生きてよかったと、生きた甲斐があったと思えるような生活様式、生活のスタイルということ、それを考えていくことも今後の非常に大事な問題なのではないでしょうか。

精神的価値の再発見

松本　前田さん、ひとつなにか……

前田　これはあまり大きな問題で、なにから話していいかわかんないんですが、はじめですから、大ざっぱな話をしますと、遠い先のことを考えるときに、いちばん私自身が影響を受けているのは、私が20代のはじめに、1930年代に出たばかりで読んだベルグソンの「道徳と宗教の二源泉」という本の最後の章なんです。そこでベルグソンは人類の将来の運命について論じています。

大ざっぱに申しますと、中世まではヨーロッパ社会は主として精神的な幸せを求めてきた。そのために物質を豊かにすることは比較的考えなかった。それで物質的にあまり貧しさがひどかったので、ルネッサンスと産業革命等を経て、今度は物質界が次第に豊富になったと。それで今度は行きすぎて、少なくとも西欧社会では贅沢になってきて、これではもう人類はいくら物があっても足りない。ここいらでまた長い周期が転じて精神中心の時代、物質中心、それからまた再び精神価値を第一に追求する時代にならなければ、人類は生きのびられないというのが、大きな議論の立て方です。そうしてそのためには、根本的には宗教的天才が出現し再び宗教的革命が起って、人間の価値というものは、この地上でだいい生活を終ってそれで死ねばいいんだという物質中心、あるいは現世中心の考えを転換して、来世あるいは、そういう現世以上の霊的価値というものを追求するようにならなければ、どんなことをやってもだめだというわけです。しかしそうかといってそうした天才の出現を待ってただ安閑としていられないから、それまでには、国際連盟等による国際的協調を盛り上げ、細かくいろんなことを話合いによって規制し、戦争回避の努力を少しずつ積み上げていくより手はない。少なくともわれわれ凡人にはそういうことをやるより仕方がないという二段構えの考え方なんです。いまみなさんがお話しになったことから例を引いてお話しますと、なにも物質的エネルギーを使わなくたって、人生に生きがいを感じ楽しむ方法はいくらでもあるんではないか。日本人は、先ほど村上さんもおしゃったように、普通の人、庶民が喜んで和歌をつくってみたり花を活けてみたり稽古事をしたりする、これは徳川時代に平和が長く続いた遺産かもしれませんが、非常に普及しているわけです。さっき本間さんが庶民の生きがい、普通平凡人の生きがいということを言われましたが、日本人は少なくともかつてはそれをもっていた。

ちょうど10年前にユネスコが文化政策を考えようというんで、はじめお役人でなくて、一般の文化に関心のある人を世界中から20人くらい集めて、モナコで会議を開きました。その後それが発展して文化担当大臣会議というのが世界中で行なわれるようになりましたが、どういうわけかしらないけれど、私が日本から招かれて副議長を勤めさせられました。そのときそういう国際会議で日本のメンバーとして何が言えるかと、あわてて考えたときに到達したのが、村上さんのおっしゃったことです。大芸術は日本にも絵画その他にあるけれども、なんといってもいままでのところでは、音楽でも西欧の音楽よりも勝っているとは言えないし、それから文学なんか美しいものはあるけれども、西洋のような壮大なものはない。そういういわゆる高級な文化、大文化のほうでは日本として力んで言ってみても、他にもたくさんある。

それで考えて到達したのは、庶民、一般の人間が、高級な創造的活動ではないけれども、文化活動を自分でして、そうして喜ぶということは、日本にかなり広まっているのではないかということです。それで俳句の資料をあつめたりしました。

松本重治

前田陽一

こうした、にわか仕込みで向うへ行って、たとえば大新聞でも毎週、新聞の半面を使って和歌や俳句のコンテストをやって、たいへんな数の人が応募しているとか、お正月には宮中でも陛下をはじめ皇族の方々もみなお歌合わせのために和歌をつくらなければいけない。そこへ民衆から選ばれてきた人もやってくる。それは昔からの伝統だ。そういう例を話すと、これにはみな、なるほどと言って感心してくれたんです。

そういう面で日本ではエネルギーをむやみに使わないで、いくらでも生きがいを感じて楽しむ方法が広まっていますから、その点を大いに伸ばすということは考えられます。

それからもうひとつは、今度は逆にエネルギーを作るほうでも、なんといっても日本の場合には新しい発明で工夫して作るよりしょうがないのではないか。資源がないんですから。ですからもっと創意を持たなければならないんで、その点についても考えるべきです。

日本人の創造性

前田　これは柳瀬さんなんかもおそらくそうお考えだと思いますが、科学その他一般の学問について、日本人のいいところは非常に早くいろんなものを学んで、それを応用して、それを部分的に改良して新しいものを作っていくということですが、ほんとうに革命的で画期的な発明というものは、いままでだいたい西洋人に独占されているような気がするんです。いままで日本は100年の間、西洋のものを入れるのに忙しかったから、いままでは仕方がないけれど、ここいらから、やはりそういう面でももっと創造的になってもらいたいですね。またいろんな思想界の流行を見ましても、日本の若い人は次々に現在いちばん世界で問題になっている先端の哲学や問題に飛びついて、それでワアワアとやってくるんですね。それが過ぎて、他のが出ると、もうそれはすんだと思って新しいものをやる。

自然科学では新しいものが出来れば前のはだめになりますが、思想や宗教なんかの面ではそうではないんで、例えば先ほどのベルグソンについて言えば、私はベルグソンのああいう本にかなうものは、その後まだ出ていないと思う。この間私が行ってきたアスペンというところの、人文科学のセミナーの中心になっていた、モーティマー・アドラーというアメリカでは有名な哲学者が20世紀で最大の本というのをいくつかあげていましたが、彼も第1位にベルグソンの「道徳と宗教の二源泉」をあげているんで、やっぱり僕のように考える人もいるなと思って嬉しかったんです。

日本のように次から次と新しいものを追っていくんでは、秀才ではあっても新しいものを造り出すということは出てこない。こういう点は日本人にむしろ欠けているところとして、そういうことをこれからなんとかして学ぶ。それにはやはり教育制度も考え直さなければなりません。永井道雄さんがわれわれのメンバーですから、永井さんなんかに考えてもらってですね。

私はかつて旧制一高の教師をして、それが新制になったときに、今度の改革は下手をするといままでよりもっと創造的精神をなくすおそれがあると心配して同志と共に教養学科づくりに励んだりしました。創造的なものをつくれるような教育をするというのは、いまエリート教育と称して悪いことのように言われ、すぐれたものを更に伸ばすということがおろそかにされているようです。そういう面を今度はなんとか変えなければいけないと思うんです。

それから宗教の問題については、私は若いときに内村鑑三先生の教えるキリスト教をそのまま文字どおり信じて、聖書なんかずいぶん勉強しました。その後西洋へ行って西洋人のキリスト教の扱い方を見ていると、あまりになんというか、いわゆる論理が勝っていますね。宗教なんてもともとわれわれを超越するものであるのに、人間の論理で全部推し進めて、それでたいへんな恐しい結論になっても平気でその論理を推し進めていくというようなことですね。それでいくと、われわれの祖先はみな地獄にいなければならないということにもなるんです。とても西洋の神学を、ああいう西洋人のものの考え方のキリスト教をそのまま信ずることはできなくなりました。しかし若いとき信じたような最上の価値、われわれを超越する価値があることは、いまでも信じております。将来、柳瀬さんのおっしゃったように、東洋的な宗教のアプローチにも、われわれを超越するものをとらえるには、そのほうがいいことはたくさんあると思うのですね。

将来そういうアプローチがキリスト教に加わり、仏教とキリスト教の両方の目指すところが近付いてきて、それでみんなが納得できるようなことが起こればいいと、願っております。トインビーなんかだいたいそんなような考えらしいですね。

私のような俗人には、自分でそういう宗教運動などはとてもできませんが、この方面のことに対する、ささやかな下積みだと思ってやっている仕事として、10何年前からパスカルの『パンセ』の極度にこまかい註解を書いています。この中心は厳密な文献批判です。厳密な実証的なテキストを再現すること、そのテキストのつくられて行った過程を再現するというようなことをやっています。それをしかもフランス語では部分的にしか発表しませんで全部日本語で書いております。

なぜそんなことをやってるかというと、そういう西洋での長年の伝統をふまえた厳密な文献批判や方法を日本語で書くことによって、日本の過去あるいは東洋の過去、ことに宗教その他の方面での過去を研究する人が、そういう方法で、われわれの過去の宗教とか精神的所産を再検討して下さる参考になればと思っているからです。東洋には伝説だかなんだかわからないもの、それからいろんな偉い宗教家のものでも、ほんとうにそんなことを言ったのか言わないのかわからない漠然としているものが、西洋の宗教史に比べて多いんですね。そういうことを精選して、そういうことについて調べられる限りの真理をできるだけはっきりさせて、玉石混淆の中の夾雑物を取っていけば、かえってほんとうの日本あるいは東洋の宗教的深みに到達することができるんじゃないかというひそかな願いがあるのです。この間ある雑誌に近代文学の校訂をやっている未知の方が、私の註解を読んで、方法論的に参考になったと書いておられるのを知ってとても嬉しく思いました……。

松本　だいたいもう1回ぐらいこの「21世紀における日本人の生き方について」というテーマで続けてよろしゅうございますか。なんでも話してもいいということなんで、いつやめてもいいし、いつ入ってきてもいいということは、この21世紀フォーラムの特長らしいんですが、今日おかげさまでみなさんのいろんな貴重な体験を話していただいて、これでもう1冊の本になるくらいじゃないかと思うぐらいですね。どうもありがとうございました。

明日のエネルギー

茅誠司グループ部会記録

昭和52年11月28日

省エネルギーを考える

出席者

茅　　誠司（東京大学名誉教授）
村田　　浩（日本原子力研究所理事長）
生田　豊朗（日本エネルギー経済研究所所長）
笠井　章弘（政策科学研究所常務理事）

省エネルギーの問題点

茅　この部会はエネルギーの問題を取り上げることになったんですが、エネルギーというのはたいへんむずかしい問題で、現在いたるところでエネルギーと言って騒いでいるわけですが、新しいエネルギーをどうするかという問題は専門家に任せることにして、今日は主として、いちばん手近にある省エネルギーの問題について、みなさんのご意見を伺ってみたらどうかということになったわけです。

生田　省エネルギーというものにつきまして、まず最初に雑談のようなことになりますけれども、つね日ごろ考えていますことをご披露したいと思っております。一つは省エネルギーというものが非常に重要であるということと、それが簡単に出来るということとは、ぜんぜん別のものではないかというように考えるわけです。

たとえば、総合エネルギー調査会の昭和60年のエネルギーの需給暫定見通しにしても、対策促進ケースというのは、10.8%の省エネルギー率を前提にして組み立てられております。

実はこれも非常に達成が困難だろうと思いますが、もっと大きいのは、52年7月ごろに各政党が参議院選挙を前にしまして、エネルギー対策というのを発表しておりますけれども、ほとんど全部の政党が15%あるいは16.5%というような、非常に大きな省エネルギー率を前提にしているわけです。これは、出来ればよろしいわけですけれども、私はなかなか難しいと思っております。そういう大きな省エネルギー率を前提にしてエネルギーの需給の計算をしましたり、計画を立てるということは、非常に危険なことじゃないかというふうに考えているわけです。

なぜかと申しますと、省エネルギー率というのはエネルギーの需要量全体にかかる係数でございますから、そのほんのちょっとでも鉛筆をなめますと、母数が大きいですから、ものすごく効くわけです。

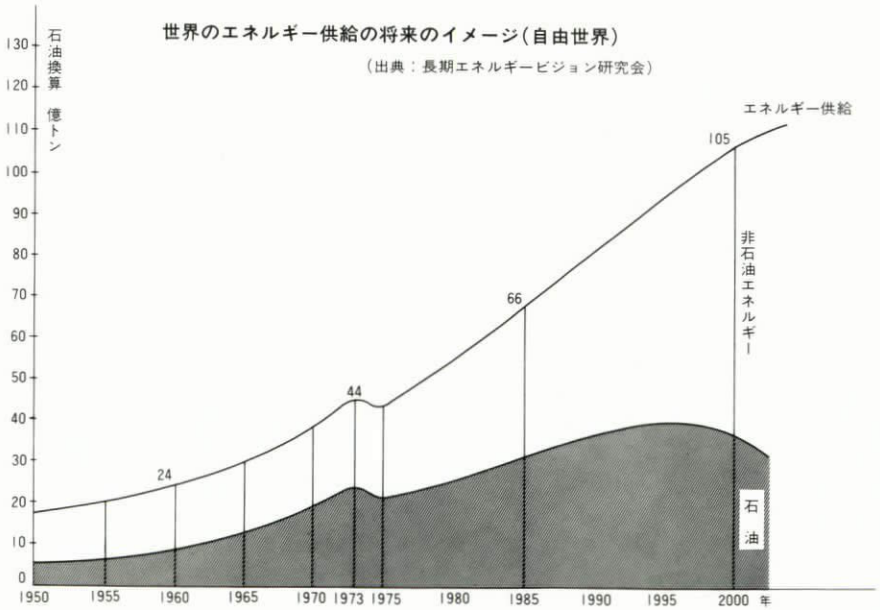
昭和60年でだいたい日本のエネルギー需要が、これから6%の成長をしていくと仮定しますと、石油換算7億kℓぐらいになってしまうわけなんですが、そこで省エネルギー率を5%ふやしますと、7億kℓの5%ですから、石油換算で3,500万kℓということになります。

この3,500万kℓの石油がその時点でプラスアルファとして確保出来るかどうかというのが、実はいまの国際エネルギー問題の焦点でございます。代替エネルギーとの比較になりますと、もっと大きくなりまして、3,500万kℓの石油の輸入に相当するものを原子力発電で置き換えようといたしますと、2,500万KWぐらいの原子力発電に相当いたしますし、LNGの輸入にいたしましても、だいたい2,600万tのLNGに相当するとか、石炭だともっと大きいとか、代替エネルギーの基本的な必要量だとか、そのへんが全部ひっくり返っちゃうような話になるわけです。

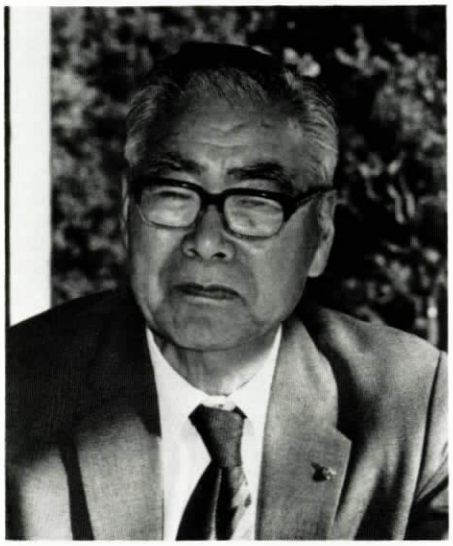
省エネルギー率をあまり実行性の裏付けなしに大きくとってしまって、そのかわりにエネルギーの需給、とくに供給面を楽にしてしまうと、石油の供給の問題にしても、深刻さがそれだけ薄くなり、省エネルギーをやれば原子力は要らないというようなことになってしまうわけです。

ほんとうに出来るのであれば、それは1つの考え方かもしれませんけれども、絵に描いた餅になってしまうのに、その絵を前提にして実態的な計画を積み上げていくと、その絵のとおりにならなかったら、そのしわ寄せはどこかへ来る。おそらく経済成長率とか経済の規模とか国民の生活水準とか、そういうところに跳ね返ってくる。

茅　直接の省エネルギーじゃなくて、たとえば自動車は、日本では6年半も経てば買い換える。外国、たとえばドイツあたりは11年ぐらいです



世界のエネルギー供給の将来のイメージ（自由世界）
（出典：長期エネルギービジョン研究会）



茅誠司

ね。自動車をそういうふうに長保ちさせて使うということは、間接には省エネルギーになりますね。

生田　そうなります。

茅　それはしかし、同時に自動車の需要をずっと遅らせるんですから、影響するところは非常に大きいですね。

生田　ちょっと文学的な話になりますけれどもエナージー・コンサーベーションというのを省エネルギーと訳し、俗語でエネルギーの節約と言うんですけれども、私はどうしても概念が少し違うんじゃないかという感じを持っているんです。戦前派の長老クラスの方にはエネルギーの節約という考え方がかなりおありのように思うのですね。とくに茅先生のような学者でなくて、一般市民のそうとう年をとったような人ですね。そうすると、「エネルギーの節約」だと、いわゆる二宮尊徳的な、あるいは螢の光窓の雪というような、勤倹節約というような感じになる。たとえば省エネルギーといいますと、それじゃ、ちょっと電燈を消せということで、暗くする。精神論としてはたいへんけっこうだと思うんですけれどもね。あまり効かないわけですね、省エネルギーとしては。

茅　僕は電燈を消すのは精神的な問題だと思うんです。

生田　その通りだと思います。資源エネルギー庁に頼まれまして、私のほうで、そういうものを全部やったらどのくらい省エネルギーになるかというのを計算してみたことがあります。アメリカがやっているように、1時間繰り上げのサマータイムを6月から9月ぐらいまでやる。それから暖房と冷房を、暖房の温度は2度下げ、冷房の温度は2度上げる。これを具体的にどうするかというのはきわめて困難なんですけれども、かりにそうなってみたらどうかということを考える。それからネオンサインはだいたい宵の口、8時ごろで消してしまう。それからテレビは深夜放送は全部やめて、NHKは11時で終っていますから、民放もだいたい12時ころまでやめてしまうというようなことを全部やってみる。つまり、いまエネルギーの節約という感じのことはひととおりやってみるとしまして、エネルギーのトータルの需要に対して、それがどのくらい効くかといいますと、0.7%ぐらいしか効かないわけです。

ですから、精神的な効果はたしかにありますけれども、それをやれば省エネルギーの効果が出るから、それをやることによってすべて省エネルギーは終りだということにはとうていならないのです。

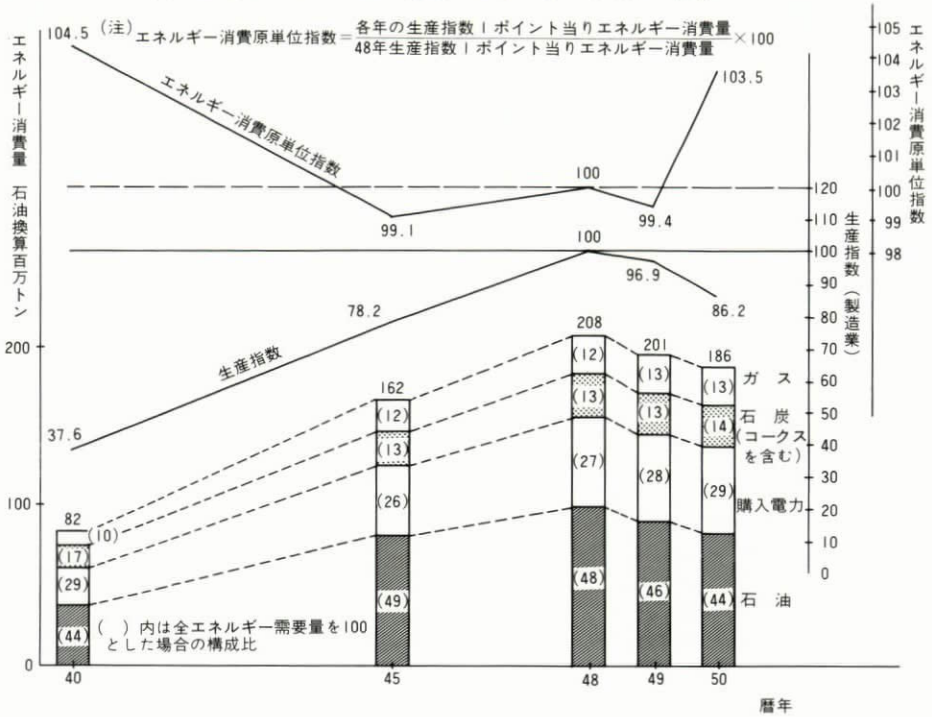
産業部門における省エネルギー

茅　それから1つの問題は、産業構造を変えて、たとえば鉄鋼とか窯業とか化学工業のように、うんとエネルギーを食うのを改めて、エネルギーを食わない産業にするといっても、私はそれは、日本一国についてはいいんですが、世界全体については、鉄鋼の生産とかなんとかというのは全体として必要なんですね。だから世界全体では、エナージー・コンサーベーションにはならない。だからそういう立場からいうと、あまり日本だけの立場に立って議論するというのも、どうかという感じを持つんですよ。

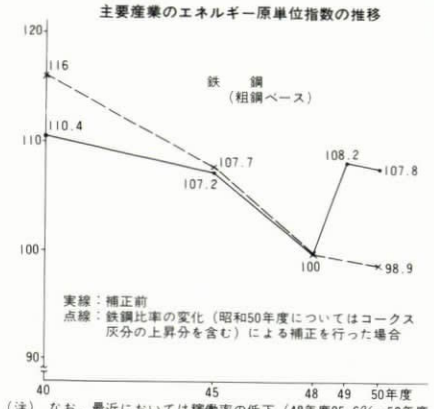
生田　日本だけとりましても、エネルギー多消費型の産業の生産を抑える。つまり産業構造を省エネルギー型にすればいいじゃないかと言いますけれども、エネルギーの観点だけからだとそういうことになりますけれど、産業構造とか経済構造というのはそれだけじゃありません。むしろエネルギーというのは一種の手段として存在するものですから、やはりたとえば雇用問題だとか、それから経済成長だとか、貿易のバランスだとかいうようなことを考えていきますと、鉄鋼業はエネルギーを食うから全部やめてしまえというような極端な議論は出来ない。

そうすると、なにが出来るかといいますと、産業部門ですと、そういう他の部面での矛盾があまり出ないような範囲内での産業構造のグラデュアルな転換ということを一つ考える。それから構造問題以外には原単位の切下げ、いわゆる狭い意味での省エネルギーですね。これを、やらなくちゃいけない、ということになりますが、これはご承知のようにかなり進んでおります。とくに石油ショックのあとで、エネルギー価格が上昇しましたんで、それまでともすればペイしなかった省エネルギー投資が、ペイするようになってきたので、省エネルギー投資というのは、かなり行われております。しかし、これも、たとえば鉄鋼業の製造の工程をとりましても、炉頂発電をやるとどのくらい有効利用が出来るとか、あるいは連続鋳造方式を導入すればどうだとか、部分的には15%とか30%とかいう省エネルギー率が出ますが全体をならしてみますと、そんなに大きく出ないわけでして、こ

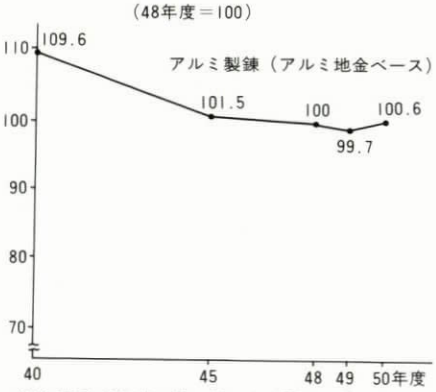
我が国の製造業のエネルギー消費とエネルギー原単位の推移



主要産業のエネルギー原単位指数の推移



（注）なお、最近においては稼働率の低下（48年度95.6%→50年度69.1%）、公害対策等の原単位悪化要因があるものと思われる。
（鉄鋼統計年報より鉄鋼連盟作成）



（注）昭和40年度以降、新型生産設備の導入等により原単位は低下したが、昭和50年度は稼働率の低下等により再び上昇したものと思われる。
（軽金属製錬会調べ）

このところに問題があります。

茅　鉄鋼とかそういうものの生産はすぐに熱にするわけですから、効率は100%と言っちゃおかしいけれど、つまり機械的なエネルギーに変えないから、そういう意味においてはエナージー・コンサーベーションの立場からいうと、非常に有効に使っているわけなんですね。いっとういけないのは自動車ですよ。あれは20数%ぐらいというのかな。

笠井　20数%、30%を切っていますね。発電もあまりよくないです。

茅　そういう人間の経済を無視して、エネルギーという立場からいうと、鉄鋼の生産というのは非常にけ っこうなことだと、僕は思うんですよ。

生田　資料をごらんいただきますと、この図は製造業全体をとりまして、エネルギー消費とエネルギー原単位の推移というのを、グラフにしたものです。原単位指数をとりますと、45年までずっと下がってきたのが、また上がって下がって、また上がっています。生産指数がその下のカーブで、つまり生産が上がると原単位が下がって、生産が下がると原単位が上がる。これはまあ当たりまえのことなんですけれども、そういう形が出ておりまして、石油ショック以後も、あまりめぼしい原単位の切下げというのは出てこないわけなんです。

主要産業のエネルギー原単位指数の推移をとってみますと、鉄鋼は粗鋼生産ベースでとりますと、実線が補正前で、それから点線のほうはコークレシオを少し変えまして、補正をしている数字でございますが、実線のほうをとりますと、かえって48年から49年に上がって、それからまた50年にちょっと下がっているというようなことで、48年以後をとりますと、点線の補正をしましても、あまり差がないわけです。

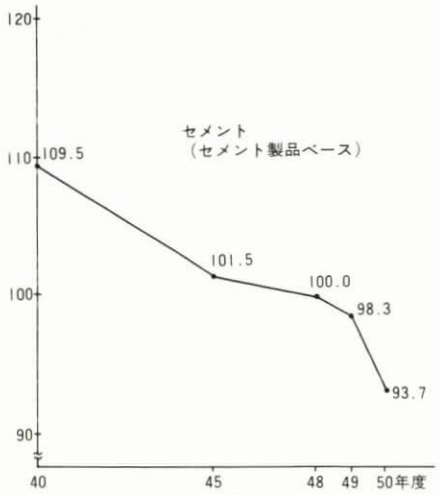
ですから、この補正の仕方というのは、むしろ操業度を上げて補正しているわけなんですが、そうとう省エネルギーをやったように見えてもあまり違いがない。

それからアルミの精錬もあまり違いがない。まあ、セメントあたりはかなり下がっておりますけれども、下がったといっても、だいたい6%ぐらいしか下がっていない。それから、紙パルプも上がったり下がったりしているというようなことで、どっちにしましても、これからの省エネルギー投資というのはかなり進みますし、技術の発展もあると思うのですけれども、そんなに目茶苦茶に、何10%とか10何%とかいうようなオーダーでの省エネルギーが、そう一挙に出来るというように楽観することは出来ないわけです。産業部門のエネルギー消費が全体の約6割ですから、産業部門で1割出来ても全体で6%しか効かないわけですね。むしろ産業構造の変化のほうが大きく効くんで、原単位の切下げというのは案外難しい。とくに日本は鉄鋼なんか例にあげられますけれども、国際競争力をつけるために、そうとう技術集約的な投資をいままでやってきていますんで、もうかなり贅肉は絞られちゃっていると思います。

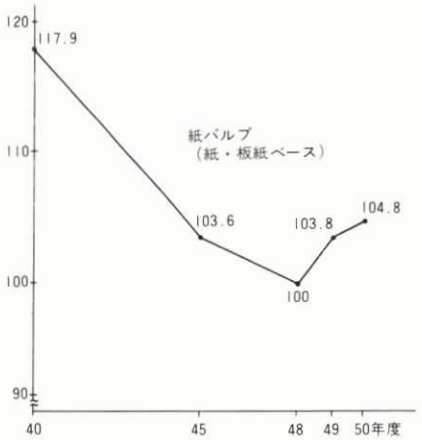
茅　日本ぐらいそれをやっているところはないんじゃないですか。

笠井　産業構造の転換という話も、たとえば粗鋼で売っちゃうからいろいろ問題を起こすんで付加価値の高い産業構造にしろと言うんだけれども、国際競争力のある価格と質を持っているとすれば、粗鋼じゃなくて加工して、あるいは組み立てして輸出するような構造にしていくほうが転換よりも重要になってきやしませんか。

ヨーロッパ、アメリカの経済学者がいま資源とエネルギーが上がっている最中だけれども、もし高原状態に両方が入ったら、やっぱり日本がいちばん強いだろうと言っています。設備の質のよさだと思うのです。それを粗鋼の段階で売っちゃうから、いろいろ問題が起きてきて、



（セメント協会調べ）



（注）新型生産設備の導入等により低下した原単位は49年度以降稼働率の低下等により再び上昇したものと思われる。
（資料：エネルギーマトリックス）

加工した段階で輸出するような格好に産業構造の転換じゃなくて、産業構造のいまあるやつをもっと有効利用をしていくような産業構造のあり方というのがあっていいと思うのです。

茅　ある製鉄所なんか、豪州から鉄鋼と石炭を持ってきて、オートマティックに溶鉱炉へ入れて、出してきて、そいつを熱圧延して、それをまたそのまま輸出しちゃうんですね、なんにもしないでね。ですから、日本に来て、ただ鉄鉱石がそう変わるだけ。

笠井　もうひとつ省エネルギーというと、第2次産業が中心に話が来ているわけだけれども、第3次産業はすでに50%越していますし、これからもまたふえていくとすれば、第3次産業をもう少しこまかい分類にしてやらないと、省エネルギーの問題は3次産業という1つの枠組みじゃやりにくい。

だから産業構造転換論と省エネルギーの問題というのは、どうも既成の概念、既成のコンセプトでやりすぎているところがあるんじゃないんでしょうか。いま先生がおっしゃるように、間接からトータルを省エネルギーの対象にするならば、そのへんまでおろしていった議論というのが必要になってくるんじゃないでしょうか。

輸送部門における省エネルギー

生田　次に輸送部門があるわけですね。これが全体のエネルギー消費の13%ぐらい、それに外航船を入れますと18%から19%、まあ20%近くなってくるわけですが、これのエネルギー消費率を減らすというのはもっと難しくて、これは交通専門の学者、たとえば東大経済学部の大石先生などに言わせると、もう可能性はゼロだろうということをおっしゃるし、運輸経済センターの人とかに聞いてみても、非常にネガティブな回答が強いわけですね。

私どものほうで研究員が調べても、だいたい同じような結論が出てくるんですが、これなぜかといいますと、理論的には交通部門の省エネルギーというのは、一つは個別輸送機関から大量輸送機関への移行、それから自動車から鉄道への移行という、それをやれば出来るということで、理論計算はそうなってきますけれども、どうやってやるかという具体的な手段がないわけですね。

もう現実に鉄道というのは、貨物についても旅客についても、まず自動車と鉄道の間の一種の構造的なシェアと申しますか、どういう輸送距離のもので、どういう種類の商品なり人間が鉄道に依存し、あるいは自動車に依存するかということが、ほとんど構造的に決まっちゃっているわけで、貨物についてとくにそれが著しいわけです。非常にバルキーなもので、そうとう長距離、500キロ以上とかいう輸送のもので、しかも積み込み、積みおろしに引込み線があるようなものに、だんだん鉄道は限定されちゃっているわけですね。

そこへもってきて、日本の場合は国鉄の経営の悪化、ストライキの頻発とか、営業面での能率の悪さとかいう信頼性の喪失が加わりまして、鉄道への移行というのはきわめて難しくなっている。

なぜ自動車輸送のシェアがだんだんふえてきて、これからも減らないかというと、ただそのほうが便利だとか快適だというだけじゃなくて、もう経済性が自動車輸送のほうがはるかに高くなっていますから。国鉄じゃなければ、もう鉄道に対する投資というのは、これは日本だけじゃなくて、世界的に言えるようですけれども、あまり採算がとれなくなってきてしまった。

茅　どこでもそうです。

生田　競争力がないわけですね。それから自動車のなかでも、バスとか長距離輸送トラックというのはだんだん投資効率が悪くなってきていまして、現状を維持するか、あるいは少し発展させるぐらいがせいぜいであって、かなりの部分をそっちのほうにシフトさせるということは難しい。経済性の面から難しいですし、さらに交通規制などの問題もある。

交通部門での省エネルギーというのは、世界的にも困難であるし、日本の場合はとくに困難であるということになってくるんですが、産業部門で1割かりに出来るとしても、全体で6%しか効きませんから、10%までもっていこうとすると、交通部門で15～16%とか18%とかいう、非常に大幅な省エネルギーをやらないとつじつまは合わないわけですね。これはまずほとんど不可能に近いということになります。

民生部門における省エネルギー

生田　それで最後に民生用なんですが、これは実際問題として、日本の民生用エネルギーの消費というのはふえる過程にありまして、省エネルギーどころじゃないわけですね。これはむしろ個人の生活におけるストックの充実に比例して、エネルギー消費というのはどんどんふえてくるという傾向にあります。

ですから、たとえば住宅事情が改善されますと、それだけでエネルギー消費というのは格段に、飛躍的に増加してくるわけですね。たとえば電力のピークの問題にいたしましても、もちろんクーラーの電力消費がピークの原因になっているんですが、これが2年くらい前までは業務用のクーラーの増加がピークのなかの最先端を作る原因になっていたんですが、近年は家庭用のクーラーの増加がピークのいちばんてっぺんになっていて、これもまだふえる傾向にあります。それから暖房その他の全般的なエネルギー消費にしても、これもちょっと試算してみますと、6畳、4畳半ぐらいの民間アパートに住んでいる場合と、30坪ぐらいの独立家屋に住んで、セントラル・ヒーティングをやる場合と比

べますと、トータルのエネルギー消費は10倍ぐらいにふえるわけなんですね。

ですから、その間で住宅事情が改善されると、エネルギー消費はどんどんふえていくし、現にそういう傾向をたどっていますから、民生用、とくに家庭用のエネルギー消費の比率が日本で低いというのは、日本に特別の事情があるんじゃなくて、まだ完全な先進国型の構造になっていないということだけであると思います。

ちょっと余談ですけれども、この間、カナダのエネルギー関係の国際会議に行きまして、日本の事情を説明したんですが、そのとき、正式のパネルのときじゃなくて、あと終って食事しながらの雑談のときなんですけれども、日本で電気ふとん乾燥機というのが今年の冬の家電製品の目玉になって、数100万ユニット売れるようになっていると言ったら、これは外人にはさっぱりわからないわけですね。それはいったいなんだということで、下手な英語で苦心して説明したんですが、彼等の言うのは、これはもうたいへんなことであって、ベランダや縁側でふとんを干すというのは太陽熱利用なわけですね。それがいまや75%石油に依存している電力に戻るというのは、省エネルギーどころじゃなくて、増エネルギーではないかということなんです。

茅　僕も使っていますが、あれは実際いいですよ。

笠井　自動車の話が前に出たんだけれども、家電製品も僕は同じだろうと思います。日本くらいの国民所得がある国で、だいたい衣食が整って、その先のニーズということになっても、日本の場合は土地政策が失敗したおかげで、家屋、土地というものは非常に手に入りにくい。そうすると、手に入りやすいレベルで生活の合理化なり近代化をはかろうとすれば、家電製品なり自動車ぐらいのところだろう。そうすると、自動車や家電製品に対するニーズは所得のレベルよりもっと強いニーズになってしまう。

生田　いまでも、あるいは10年前でもいいんですけれども、300万円とか、500万ぐらいで庭付きのちゃんとした家が建てられるとしたら、まず自動車やカラーテレビを買う前に貯金をして家を建てると、当然考えるわけですね。逆立ちしても家を建てられないから、100万円の自動車だったらどうにか買える、ということになってくるわけです。

茅誠司

省エネルギーを進める工夫

村田　僕なんか、新しいエネルギーを作るほうのことばかりやっているわけだから、あまり省エネルギーについてとくに意見を申し上げられるわけじゃないけれども、しかし、日本のエネルギーの需給構造から見て、民生部門で省エネルギーの効果を上げるというのは、いまのお話のように、ほとんど不可能だと思うんですね。むしろふえる方向ですね。

ですから、省エネルギーという観点で、実質なんとかエネルギーの消費を減らそうとすれば、やっぱりいちばん効果があるのは産業部門。その産業部門も先ほどの鉄その他の話のように、非常に効率を上げてやっているのが多いわけですから、ただ単に原単位をどうするとかこうするという改善で措置し得る範囲というのは、そう大きくない。

そうすると、結局は産業構造の問題に来るわけですけれども、そこで一つ考えてみたいのは、この間、稲葉先生ともお話したんですけれども、作るほうのエフィシェンシーを上げるということについて、いろいろな形でわれわれやっていますけれども、作り出したエネルギーというのをどういうふうに使えばいちばんロスが少ないかという点では、まだまだ工夫の余地があるんじゃないかという気がするわけです。

住宅、われわれの居住に関連してのエネルギーについては、いろいろなこまかい話が、太陽エネルギーを使ってどうのとかあるんですけれども、結局産業の縦構造が非常にはっきりしているために、それぞれの工場でのエネルギー原単位を一生懸命低めることは考えているんだけれども、産業全体、あるいはさらに民生がうまく加わればなおいいでしょうけれども、国全体としての消費構造の効率化というのを、突っ込んで考える必要があると思います。

住宅関係でも、最近地域暖冷房というような形での考え方が出来ているわけですけれども、さっき発電なんかの場合のエフィシェンシーが出ましたが、30%のエフィシェンシーで電力を作っているとすれば、残りの70%は捨てているわけですけれども、火力の場合にはその捨てる70%のうちの相当部分が煙突に逃げているわけです。要するに、大気を一生懸命あたためているわけですし、原子力なんかでいうと、逃げる大半は海の水をあっためている。そういったエネルギーを回収して、それによって、他で実際は使わんでもいいエネルギーを一生懸命使っているというところを減らせる可能性はあるわけです。

ただそのために仕組みが非常に複雑になって、トータル・システムとしてはたしてエコノミーはどうかということが問題になるんですけれども、最近のようにエネルギー問題が非常に厳しくなってきたときには、そういった面からの考察、つまり生産されたエネルギーをいかに効率よく使うかという考察が必要です。これは私どもはいつも多目的利用という言い方をしているんですけれども、温度の高いところから低いところへ何段階かに使っていくというやり方が、もう少しうまく出来ないかなという気がするんです。そういったような点がうまくいけば、ある程度の省エネルギーというものに効果をもたらせるんじゃないかと思うんですけど、もちろんこれはここ3年や5年で効果がどんどん上がっていくといったようなわけにはいかない。かなり長い期間を考えた対策をステップ・バイ・ステップに講じなければいけないだろうと思いますがね。

茅　たいへん個人的な私の経験なんですけどね、私のところは温水暖房なんですよ。朝寒いんで、起きるときにすぐ温水暖房にスイッチを入れて、水をあっためるんです。そうして、辻堂なんですけれど、東京へ出てくるときにその電気を切りますと、あとずっとあったかいのをだれも使わないわけなんですよ。このごろになって女房気がついて、1時間前に切っちゃうんです。じゅうぶんあったかいんですよ。あら、よかったわ、これで分かったわと言うんですよ。そういうちょっとしたことの工夫でもって、ずいぶん大きなエネルギーが助かるんですね。

それから、私のところの女房がお湯をあっためるときでも、お湯はガスをフルにやって、底よりも外へ出るぐらいにしたほうがお湯としてはいいんだと言うんですよ。そんな馬鹿なことはないと言うんですけれども、そういうふうに使うんですね。ああいう実際のエネルギーの使い方というものの改良はずいぶんあるんじゃないですか。そういうものの宣伝をするという必要が…。

村田　ありますね。

製鉄所なんか、ずいぶん熱管理はうまくやっておられますね。ところがそのまわりにたくさんの団地もあるし、いろいろエネルギー消費があるんで、それをもっと大きく取り込んでやればね。

笠井　パブリック・セクターとプライベート・セクターとうまく……

村田　そういうことです。

生田　それと、私どものほうでちょっと補助金をもらってやっていますのは、それと逆の、今度は民生部門から産業部門へ戻すやつ。これは実はゴミ発電なんですけどね、都市のゴミの焼却炉で発電しまして、これを産業に供給する。それをやりますと、ちょうど両方往復になるものですからね。相互乗り入れになるわけです。

茅　仙台でテレビで放送していたんですがね。仙台のなかの地域地域で、主婦がお互いに言い合わせて、廃棄物の分類をして、燃料に使える物は燃料、それから空缶の回収になるのはというので、ちょっとしたそれだけでずいぶん違うと言うんですね。それが30%か40%、仙台全体で、広がっていると言うんですよ。日本全国にこれを広げてみたら、たいへんなものだと思うんですね。これなんかちょっと、丸儲けですからね。

生田　アルミなんか、スクラップ、廃物ですね、あれの回収だけでおそらく、再生だけでアルミの需要というものはカバー出来るような時代が遠からず来るだろうという、計算上はそうらしいんですけれどもね。

村田　一方からいうと、ああいう形でこういう平和時にストックしておるんだという言い方の人もいるんですけれどね。しかし、そんな非常時ばかりを考えているわけにはいかないんだと思いますがね。

省エネルギー教育の必要性

笠井　生田さんとごいっしょさせていただいている総合エネルギー調査会の委員会で伺ったんだけれど、日本の小学校、中学校の教科書で、省エネルギーというのは1字も1行もないというお話がありましたね。それからうちの研究所で調べたやつだと、中学、高校の教科書で発電というのは、水力発電の絵が描いてある。なんかやはりエネルギー問題全体を国全体の中長期の問題とするならば、そういう教育の過程からビルトインしていかないと、ある年代になって省エネルギーなんて言っても、なかなか身につかない。先ほどそういう節約的な話は、ムード作りには有効だけれどもという話がありましたけれども、多面的な戦略を持たないと、ほんとうの省エネルギーにはならないですね。

茅　これ、やっぱり小学校、中学校あたりの教育のなかに、省エネルギーという一編を入れる必要がありますね。

村田　それからさっきはじめのほうで話が出たけれども、日本の場合は二宮尊徳じゃないが、物を大切にしろという話は古い人を中心にまだ残っていると思うんですね。このごろの若い人はそこらへんがずいぶんなくなっちゃっていると思うんだが。物自身の節約というのが、いまでは物資をということだけれども、実は大半がエネルギーなわけですから、むしろそういう観念をさらに深めていくということは必要でしょうね。

笠井　いまおっしゃった、物を作るときにエネルギーが要るという話はあまり知らないですね。

村田　そうでしょう。そのへんをもう少し、なんかわかりやすく理解出来るようにならないですかね。

茅　いちばん簡単なのが太陽エネルギーで生物を作ることであるとか言ってるわけですけど、実際農産物というのは、かなりのパーセントま

村田浩

生田豊朗

笠井章弘

でエネルギーを使っているんですね。肥料を作ったり、それから耕作機械とかで、もうそんなにいいものじゃないらしいですね。

生田　科学技術庁の資源調査所で調べた資料がありますが、日本の米作を例にとりますと、米1カロリーの生産に投入される直接間接のエネルギー消費というのは、0.6カロリーなんですね。

茅　60%……。

生田　アメリカのトウモロコシが1カロリーに対して0.3カロリーくらいですから、向うのほうがまだ省エネルギー的なんですね。日本はひどいです。ですから、これはいま茅先生のおっしゃった農薬・化学肥料ですね。それから農業機械にしても、素材の生産から全部入れて、耐用年数で割っていくわけですね。それをやっていきますと、そういうことになっちゃう。それらに輸送だとか梱包だとか、農村の家庭電化だとか入れますと、もっと大きくなるわけなんですね。ですから、過疎地に発電所を建てようとすると、われわれとは関係ないと言うんですけれど、それは嘘で、実は関係は大ありなわけですね。

そういうところの認識というのは非常に少ないものですから、よく笑い話みたいなほんとうの話で、東京電力がアンケート調査やった時に、停電になったらどうしますかと聞いてみたら、停電になったらなにもすることがないから、寝転んでテレビを見ているというのが3割ぐらいあったというんですね。

笠井　NHKの人が言っていましたけど、大田区かどっかに落雷して停電になった。テレビが映らなくなったら、NHKの電話がいっぱい鳴った。NHKが電波を送らないんだと。それでNHKはびっくりしたそうですよ。それほどエネルギーに関する常識というのはないということですね。

茅　まあ省エネルギーというのは実に難しいということのようですね。

生田　ですからエネルギー問題全体が難しくて、非常に単純に、もう石油が一滴もなくなっちゃうとかいう話というのはわかりやすいんですけれども、事実はそうじゃないですからね。正確に説明すればするほど聞くほうはわからなくなってくるという、矛盾した性格を持っているんです。

生田　エネルギーに代替出来るものというのは、結局労働と技術しかないわけですね。ですから

茅誠司

村田浩

生田豊朗

非常に簡単なんで、家庭の奥さんが電気洗濯機を使わないで、昔みたいに洗濯板かなにかで洗濯すれば、人力によって電力が代替するという代替効果は出てくるわけですけれども、そんなことする人はいませんしね。

エネルギー文明の見なおし

村田　茅先生にお話を伺いたいんですけれども、だいたい人類の文明というか文化というのが、進んでくるというのは、われわれが昔そういう時代にいろいろ教えられたせいなのかなんなのか、要するに1人当りのエネルギーがふえていくのは、文明が上がるのに比例してふえていくからだ。たとえば、アメリカは1人当り日本の約3倍のエネルギーを使っている。それだけ文化は高いんだと。そういうふうな観念というのはもう非常にいきわたっているんじゃないでしょうかね。そうすると、エネルギー消費を抑えるということは、じゃあ、文明や文化というのを下げるのかと、こういう話になってはまずいわけでしょう。ですからエネルギーの消費、要するに文明とか文化の進展というのは、エネルギーの無駄使いのうえに成り立つものなのかどうなのか、その点ひとつあるんじゃないですか。しかし、現象的に見ると、そういうふうに見えるんですね。

茅　無駄使いという……。

村田　無駄というのはなにをもって無駄というかはありますよ。ですから無駄ということの哲学になるんですけど、省エネルギーというのは無駄ではないものを節約しようとするのか、あるいは無駄があるから、それを節約しようとするのかという、そこがひとつ問題なんじゃないでしょうか。

生田　なんか、国語の話のようになりますが、節約というのは必要だけれども我慢して節約するんで、省エネルギーというのは無駄を省くわけですね。コンサーベーションというのはぜんぜん別の概念で、もっと長期的に長保ちさせるということですからね。

村田　使うのは使うんだけれども、長く使おうと、こういうことですね。その違いはあるでしょう。

茅　ですからアメリカのような性格が近ごろ非難を受けているというのは、コンサーベーションに対して非常に危機感をもたらしたということでしょう。アメリカのような国がふえたら、

世界中もうすぐに燃料はなくなってしまう。それに対して反発しているのはＯＰＥＣですからね。これは当然だろうと僕は思うんですよ。

笠井　発展途上国のほうは自分が工業化しようと思ったときには、エネルギー、石油がなくなっちゃうと。

茅　そうなんですよ。

村田　そこまで行って、もういい目に会った人は、これじゃ世の中は破壊されちゃうから、我慢しようじゃないかとか、もっと節約しようじゃないかと言ったときに、まだいまから発展しようかというのまで抑えられるのは、納得出来ないという感じは起こるでしょうね。

茅　それはアラブ諸国はみんなそうでしょう。

生田　日本でも多少そうですよ。アメリカの水準まで行く途中でエネルギーの壁が出来たのでは困るという。

村田　パーヘッドでいえば、ずいぶん少ないわけですからね。アメリカに比べれば。

生田　3分の1くらいです。

茅　でも日本は私達が子供のころ、いまの天皇が学習院初等科にお入りになったとき、ランドセルというものをはじめてお使いになって、やんごとない方は立派なものをお使いになるんだと思ったけど、いまは全部ランドセルを背負っているでしょう。皇室と一般人民との生活の距離が非常に近くなっているんですよ。たいへん幸福なことですからね。われわれにしてみれば、ずいぶん日本はみんな幸福になったんですよ。アメリカに比べるとそれは言えないけどね。コタツでこうやっていた時代から比べればね。

村田　たしかに幸福になっているわけですね。それがもちろん一方では勤勉とかいろいろなものがあるんだけれども、やっぱりエネルギーを使っていることも事実ですね。

茅　ただアメリカの生活を知らなかったら、われわれはこれが幸福の最上と思っているんじゃないかということなんです。知っているから、いろいろ考えるわけですね。映画やテレビでアメリカなんかの生活をみると、ろくでもないやつが立派な家に住んでますからねえ、恐れ入っちゃうわけです。

生田　日本のエネルギーの自給度というのは、だいたい1割ですね。ですから、エネルギー消費がいまの1割だったのはいつかというのを遡って調べますと、2年あるんですよ。最初は昭和8年なんです。それからもう1つは昭和23年なんです。昭和23年というのは戦争でこうなった底ですからね。むしろノーマルな状態だと、昭和8年を考えてみるべきなんですが、これはまさに昭和の不況のまっ最中でもありましたしね。ですから昭和8年というと、まさに寒くても我慢していたような状態で……。

村田　どうもやはり一般的な庶民の感覚からいえば、テレビは見ようと思えばいつでも見れて、冷蔵庫は開ければいつでもなんか食べたい物が入っておってね。寒ければ暖房を入れ、暑ければ冷房を入れられて、のびのびとしておられるというのは、これはやっぱり生活が豊かだという感じでしょうから、それを逆に、低めなければいかんという強制力はなかなかむずかしいでしょうね。

生田　人間の生活というのは下方硬直性があると思うのですね。上がるほうは上がりますけれども、下げるというのはきわめてむずかしいですね。

村田　ですからこの間のように戦争で負けたとか、そういう非常事態が来れば別だけれど、普通ではなかなか……。

生田　下がらないですね。

村田　この間ある方々と雑談したときに、やはり明治時代の方々のせいもあって、どうも最近は世の中が立て込んできたり、エネルギーも十分ないとか、難しくなってきたけれど、夏でも冷房もいいけど、冷房が過ぎると神経痛が起きたり、夏風邪を引いたり、よくないと。それから考えると、昔、狭いながらも4間5尺じゃないけれども、あばら家にちょっとした庭があって、縁側に出て風鈴など下げて、庭に水を打ちながら、うちわでこう、浴衣掛けでやっているときはほんとうに涼しかった気がするとおっしゃるわけですよ。なるほどそういう気持はよくわかるけれども、じゃ、いまそこに戻れるかというと、さっき笠井さんもおっしゃったように、もう土地問題のことで、東京のなかで、たとえ4間5尺でも自分の家を庭付きでもってゆうゆうと縁側で蚊やりをしながら、うちわをあおいでいるなんていうことは出来ないですね。

生田　まわりが広くないと風は入らないですね。

村田　むしろそういうことをやろうと思ったら、昔はみんながそうだったんですけれども、いまでは、よほどお金をかけなければ出来ないですね。

笠井　非常な贅沢ですね、逆に。

茅　贅沢ですよ。

村田　ですから日本の場合で言うと、土地問題から難しいですね。民生の部面で言うと。土地問題では他の大きな国に比べてはもちろん、イギリスやフランスに比べても、不利だと思うんですけれども、そういうところを実を言うと、車であるとか、おっしゃるようないろんなエネルギーを食うものでカバーしているというのが、日本の文化生活の現状なんじゃないでしょうか。

茅　そうなんですよ。庭もなにもないから、せめて車で一家が楽しくというね、たしかにそうですよ。

生田　日曜になると、家族を乗せてドライブしてきて、100キロくらい走って、自然に接して帰ってくる。

村田　それで豊かになった感じになる。

茅　会社にいれば重役に怒鳴られるのに、そこだけは……。

生田　言うこと聞きますからね、車は。

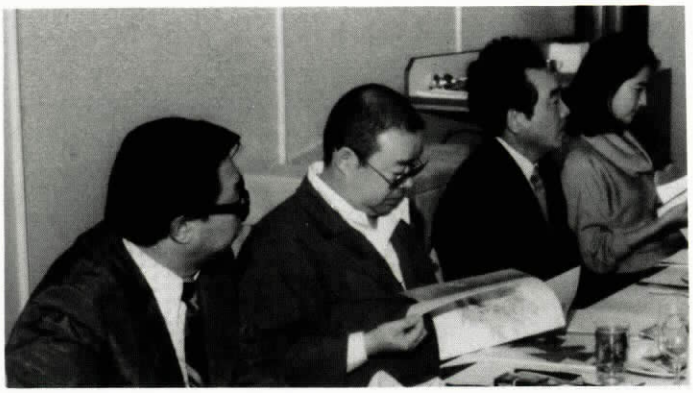
茅　オートノミーというものがそこにありますからね。

生田　ですから、省エネルギーというのは、ある意味では近代文明に対する一種の挑戦になるわけなんですね。なかなか勝ち目のない挑戦だろうと思います。

日本の危機ここが知りたい（サーバイバル）

加藤芳郎グループ部会記録

昭和52年10月20日



出席者

加藤　芳郎（漫画家）
青空うれし（漫才）
青空はるお（TVタレント）
大山のぶ代（俳優）
天地　総子（歌手・タレント）
大和田　獏（俳優）
加治　　章（NHKアナウンサー）
小島　　功（漫画家）
田崎　　潤（俳優）
檀　　ふみ（俳優）
水沢　アキ（俳優）
三橋　達也（俳優）
笠井　章弘（政策科学研究所常務理事）

部会の主旨説明

加藤　「21世紀」という問題は誰でも考えてよい問題なので私も参加したわけです。今までの僕の生き方でいくと、「お前はマンガだけかいていればいいじゃないか、世の中のことはどうなっても、何とかうまくいくよ。余計なところへ行って何か組織に入ったりしてウジャウジャとやるよりも、飲みたい時飲み書きたいとき書き、たまにテレビに出て…そういうことをやっていればいい…」という「哲学」みたいなものがあって、今回の21世紀フォーラムのお誘いを受けて考えが変わったわけなんですが…こういうことなら僕たちも考えなくちゃいけないと思って積極的に参加しているわけなんです。

例えば田崎さんなんかは俳優一筋に何十年ということで、役者は役者さえうまくやっていればいいんだという気持ちだったと思うんですが、やっぱりこういう意味で話してみれば賛成していただけると思うんです。そういうことで皆さんにお話ししてみたら快く参加して下さいまして、本当にありがとうございました。そういうわけで形がまだ整っていませんが、これからどういうふうにするかということを皆さんや事務局の方とも相談してやっていきたいということです。

笠井　ふつうの会ですと、まず総会をやって会長を選んで、事業計画をたてていくんですが、この会の場合は、そういう形式ばったことをせずに、発起人が何人かいらして、それぞれ御自分で何をなさりたいかを決め、また御自分で好きな仲間を集めて、御自由に討論していただくことにしています。会が動き出しまして、しばらくしましたら皆さん御一緒に集まっていただき、共通の問題があれば皆さんに頭をつっこんでいただくということです。何か、どっちかの方向へこの会を持って行こうということはございませんで、各部会が何回か会合を重ねていくうちに次第に会の方向が決まっていく。事務局は会の運営のお手伝いはするが、方向が決まるまでは各会にすべてお任せするということになっています。各会それぞれのテーマが絞られてくると、21世紀の問題は非常に身近になると思います。そういう意味で皆さんに御賛同いただきまして、真にありがとうございました。従いまして、この会をどういうふうに運営していくかは、加藤さんに御一任してありますので、どうぞよろしく。

加藤　そういうわけで21世紀の問題に結論みたいなことが出るわけではないですし、亀の子がアチコチ見回すようなかっこうでやって行きたいと思います。

事務局　現在、松本重治(国際文化会館理事長)グループでは「21世紀における日本人の生き方」、中山伊知郎グループでは「世界の中の日本」、茅誠司グループでは「明日のエネルギー」というテーマで会合を進めていただいています。小松左京グループ、加藤秀俊グループは構想を検討中ということです。

部会テーマの検討

三橋　僕が提案したいのは、このグループには専門家が一人もいないわけで、我々はこれから一生懸命勉強して、啓蒙していただいてそれを広く一般に知らせていくという役割が重要だと思うんです。だから、例えば、原子力発電所なんかは見たことがないわけで僕、勉強会なんか必要だと思うなあ…。

加藤　例えば原発見学会に行けない人には、青空はるお、うれしさんがレポートするとか…。(笑)

青空うれし　はは、そうですね。

三橋　エネルギー問題、食糧問題、教育問題なんかいろいろあって、非常に広範囲で漠然としていて、とめどもないほど巨大なものになってしまうようだが…まず21世紀フォーラムで取り上げてほしいのは「ガンの征服」だなあ。オヤジがガンで死んだ時、「あと10年遅かったら特効薬ができてるだろうに…」と言われた。あれから15年たった今でも特効薬はできていないが…。我々の小さな集いから「ガン征服への道」を考えられたら、こんな幸福なことはないと思う。

田崎　ガンのことだけでなく、「安楽死」の問題でも何でも。僕が一番やりたいのは、戦後宗教が全くなくなったわけなんだけれど、いろんな坊さんに会って話を聞いたりすると、宗教心というのが一番大切だと思うんです。これは、インチキ宗教、ということじゃなくて、いわゆる宗教心のことだけれど…。

三橋　それは今の若い人に一番薄れているね…。

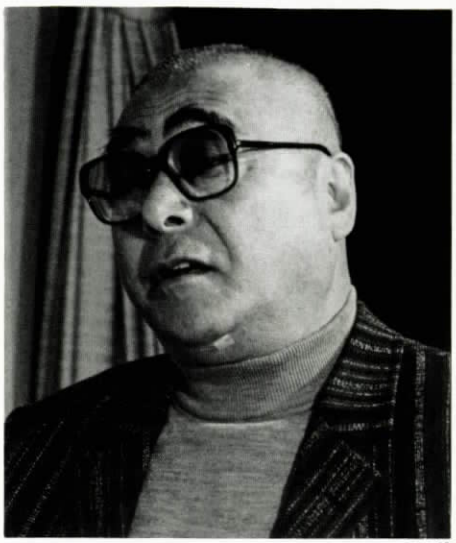
田崎　要するに宗教そのものを軽蔑することはやめるべきなんですよ…。

笠井　サウジアラビア外務省で聞いた話ですがイスラム教は酒も女もいけないということになっていますが、神と人間とが教会とは無関係にコーランを通して直接にやりあうということになっているんです。しかし、仕事のこととなるとすぐウソをつくというんです。自分が神と一体になっているので、人間同志のかかわりというのは別なんです。宗教戒律というと、日本人には一番解りにくい国だということになるんです。

例えば、この前サウジアラビアの四つのプロジェクトのうちのひとつを日本にやってほしいということになったんです…。日本のある企業グループが試算したらまるで儲からないし、会社がつぶれちゃうというので手を引いたらしいんですが、そうすると石油を売ってくれないと

加藤芳郎

三橋達也


田崎潤

いうことになってしまうんだそうで、日本政府がいろんな金融面での面倒を見ることにして、どうやら着手することに決まったらしい。ここで一番問題なのは、日本がアラブ諸国に一方的にいろんなものを売り込んでいる、例えばタクシーなんかは皆日本製ですし、こういう宗教と生活が密接に結びついているところと、これから30年間も日本がつきあって行かなくちゃならないというのは大変だということです。

昭和60年度の日本のエネルギー動向予測の中間報告があったんですが…（9月初め）その中で8年後にもエネルギーの60%以上は輸入した石油に頼らなくちゃいけないって言っているんですね。

田崎　じゃその後に何かが石油に代わるんですか…。

笠井　石油の次にはやっぱり原子力だと思いますが、ただ原子力に移行するまで、昭和60年頃（1985年）に一番石油に困る時がやってくるというんです。これはソ連、アメリカ、ヨーロッパにも共通した予測なんです。1985年以降に急激に石油産出量が減ってしまうので、この時石油を買う競争を出来るのは日本とアメリカだけだという説もあります。今「省エネルギー」とか何とか言っているのは、この後、7～8年先を見越していっているわけなんです。ここ2～3年は低成長時代が続いて工場の稼動率がせいぜい60～70%に押えられているだけで、これでエネルギー消費が抑えられているわけなんです。ですから、4～5年先あたりが危ないです。

田崎　もうすぐなんですネェー。

笠井　世界各国を廻ってみて解るのは、エネルギー節約に一番熱心でないのは日本なんです。

加藤　今日あたりの新聞を見ても、アメリカあたりじゃエネルギー節約がすごいんですってねえ…。

笠井　まあ、ニューヨークの停電もありましたし…。ただし今まで日本よりずっと無駄使いはしていたんです。大型車とか住宅の冷暖房を完備したりして…。

田崎　健康ということから出発すべきなんで、冷やし過ぎたり、暖め過ぎたりしていたんですよ。そのおかげで身体ばかりか精神まで弱くなって…。

加藤　先進国のエネルギー節約対策なんかについても知りたいですね…。

天地　いざ戦争という時になったら、エネルギーや何かはどうなっちゃうんでしょう。…

笠井　それが、いわゆるカーター大統領の考え方で、フォードとは違うところなんです。戦争の時にも困らないように自立して行こうという考え方で…アメリカの資源は温存しておいて、なるべく買おうという政策なんです。今のところはＯＰＥＣ諸国から買っておいて、いざという時自国のものでまかなおうというんです。

加藤　それがアメリカのサーバイバルなんですねえ…。

三橋　いざという時節約して使っても60日しか日本のエネルギーは持たないというんだ…。

加藤　この前、科学技術庁のポスターで、二人が抱き合っている所に「無関心、無関係」というのがあったけれど、結局それなんです。日本人は危ないっていうのに無関心、無関係だから…二人が抱き合っている背景にネオンサインが輝いている光景がいつまでも続かないことに皆が気がつかなくちゃいけない。

田崎　政治家がもっとはっきり言えばいいんですよ。福田さんでも、経済のことでも、誰でも「大丈夫、大丈夫…」と言ってないで、「本当は厳しい。日本人は皆貧乏するんだぞ…」と言えばいいんですよ。

加藤　ある新聞に、20歳ぐらいの若い人からの投書が載っていて「国に省エネルギーのことをもっと言ってほしい」と言っているんです。日本人は案外やれと言われればやるんですから…。

田崎　まず我々がいろいろなところにいって、政治屋を政治家にしないといけない。

三橋　僕はそれには異論がある。今、やたらと政治家を攻撃するのが風潮になってるんですが…政治家が言いたいことを言えない複雑な現代のメカニズムがあるんですし。

田崎　それはそうなんですが、今の政治家には多分に政治屋的なところが確かにある。それを国民は声を大にして言わなくっちゃいけない。

加藤　政治家に立派になってもらうように、我我が目覚めないといけない。

田崎　科学者も皆、長屋の八さんや熊さんにも解るように話せばいいんですよ。

加藤　僕なんかは苦労して今やっとこういう風になったわけだけれど、今の若い人は〝ひもじい〟なんてことは知らないから、彼らが親になるこれからが心配ですよ。

近頃気になること

檀　例えば、薬とか食べ物に化学物質が使われていて、生まれて来る子供に影響が出るというけど、恐いですね。

天地　まず私たち女性が神経質になるのは食事

檀ふみ

天地総子

青空はるお

ですね。買い物をする時もいちいち何が入っているか確かめたりして、昔はこんなことはなかったですねえ…。

加藤　食糧がなくなったら、石油食品でも何でも食べないとダメだと言う人がいるけれど…。

田崎　世田ヶ谷の方に住むあるお百姓さんは、農薬を使わない野菜をつくっているんです。それは自分が農薬のため片目を失ったり、家族にも同じように農薬で障害を受けた人が何人かいて、こんな恐しいものはイヤだといって、無農薬野菜作りをやっているんだそうです。これは大きな問題で、少々お腹がすいても化学薬品を使ったものだけは食べたくない。

青空はるお　でもこれだけ小さな国に、これだけ多くの人がいて、化学薬品を使わないで食糧を生産するとしたら、皆の口に行き渡るかどうか？　自然は破壊したくないけれど、自分の子供のことを考えると…ということで、今度のハイジャックじゃないですが、人命尊重かどうか非常に難しい判断を迫られるんです。広い土地があればいいんですが、狭い日本の中で生活して行くとなると、結局化学薬品も使わなくてはならないという結論に落ちつくと思うのですが。

田崎　化学肥料を使うのはいいですが、ただ、儲けるためにやたらと使うのはよくない。これだけは使わなくてはダメという、基準のような何か…そのあたりうまく行きませんねえ。りんごの味にしても、今のりんごは、昔の味じゃなくなって、何であんなところまでやらなくてはいけないのかと思います。

青空はるお　でも、それにしても作る側に言わせたら、人工の色をつけて売った方が売れるということでしょ。それをまた買う人もいるし…ただ人工の色に慣れてしまって何も考えずに買うというのと、よく考えて買うというのは違うと思います。その中で考えて、できるだけ自然に近づけるようにするということでしょうか…。

加藤　今の日本では、だいたい代替案がない。言うだけ言って、野党でも何でも批判するだけで、「ではどうしたらよいのか」という案がない。その辺を皆が考えても良いと思う。

三橋　その意味では、国民も「野次馬」になりすぎている。今度のハイジャックのことでも、西ドイツの国民世論はあれだけの決断を支持しているわけでしょ。日本でも次は何をすべきかを示す、世論の盛り上がりがないといけない。

加藤　分割された国だから、あれだけのことをやれたので、日本が分割されたらあれ位のことができるかしら…。

笠井　今、加藤さんがおっしゃったことを、日本の新聞は書かない。西ドイツの繊維メーカーなんかはアメリカ企業に国内市場を荒らされても、それは結局自国の国境を守ることに結びつくから〝がまんすべき〟なんだと考えていますよ…。その他、労組と企業が共産主義の脅威と戦うために手をつなぐとか…日本では強硬手段をとったことが良いか悪いか議論するけれど、あちらにしてみれば「仕方のないこと」と考えているんですよ。

加藤　分割国家の考えることは日本とは違うということですネェ…。金大中事件だって、日本じゃよく解らないのですから…。

青空うれし　本当に難しい問題が日本には山ずみしているんですね。

教育とジャーナリズム

三橋　日教組公害論ではないですが、若い世代は全く無責任ですよ…。結局は教育の問題に行きつくと思いますが、今の日本のことは。

大和田　確かに、若い人たちは無責任だと言われるけれど、彼らをそうさせたのは夢と希望を与えなかった教師なんです。今、僕たちが21世紀を考えてみると、不安材料ばかりなんです…食糧難とか、エネルギー不足とか…でも僕たちがその苦しい中でも生きていくとしたら、何をがまんして、何を乗り越えていけばいいのかを示してくれるのが夢だと思いますし…それが教育だと思います。

笠井　今までのことは取り戻せないし、これから何をして行くべきかを考えて行くべきでしょう…。

三橋　この前、テレビのドキュメンタリー番組を見ていたら、今の若い人は「もったいない」ということを全く知らないようだった。これにはびっくりした。

加藤　今はたくさん食べていてもいいけれど、これがいつかは失なわれるんだという意識は皆が持つべきですよ…。

大和田　教育の荒廃の一番の原因は、親が家庭での教育を放棄してしまったところにあるんで、これを抜きにして、学校教育の荒廃をうんぬんすることはできない。

檀　うちの親なんか「先生がこう言った」というと、「先生が一番偉いのか？」って言いましたよ…。

田崎　結局は敗戦で、パパが自信を失って、すべてママ任せになったところから来ているんで

す。

加藤　この前、つい二宮金次郎の歌を口づさんで解ったのは、昔の教育にもけっこう良いところがあったんだなあということで…昔の教育者は何でも押しつけたけれど、結局「良いことは良い」と教えてくれたんだなあと思いました。

加治　もうひとつは「マスコミ」っていう問題があるんです…。今、マスコミとジャーナリズムというのが平気で混同されてますから…これはいちいち細かく区別するということでなくて、しかるべきところはハッキリと見極めていくということだと思うんですが、しかし日本人の国民性からいくと、物事をすぐ信用して影響されやすいところがあるんです。その意味からすると、マスコミに非常に責任があるんだけれども、それをマスコミの方がどれほど感じているかというと、真剣に感じているかどうかというと…感じてないってことになるでしょう。

笠井　うちの娘の場合なんか見ていると、友人の価値観とテレビ、マスコミの価値観が何よりも優先しちゃっているんですねえ…。おっしゃったことに対して、我が家のつまらない例で申し訳ないのですが、確かに事実ですネェ…。

三橋　あのハイジャック事件のことでも、人命を守るために報道管制をしくぐらいのことを政府がやらないといけないなあ…。週刊誌なんかはうまいキャッチフレーズがないと売れないから、芸能人の話題なんか一番先に載せますね。要するにジャーナリズムとマスコミは違うってことなんだけれど…。

小島　今、ジャーナリズムっていうのは本を売るための企業なんですよ。あくまでも企業であって、決して「文化」を売っているんじゃないんです。また「精神」を売っているものでもなくて。つまりそのあたりをはっきりとこちらも見定めておかないといけない。

三橋　「テレビで言っているから本当だろう」という無知な人が、そういうことでどんどん増えちゃうんですよ。そういうのが社会的傾向にまでなっているみたいですねえ…。

天地　一般の奥さんなんかも、「週刊誌に書いてあったから本当なんじゃないかしら…」というので信用しやすいんですよね。とにかく書いてあった」ということで…。

加治　例のトイレット・ペーパーや砂糖の買い占めのことだって、結局マスコミがパニックをあおったというのがありますが、基本的には日本のジャーナリズムは放送にしろ何にしろみなアメリカから入ってきているわけで、そのアメリカのマスコミはもともと、商業ベースで運営されているわけで、アメリカの国民っていうのは、マスコミのことはあまり信用していないわけなんです。いわゆる情報を提供してくれるだけで、選択するのは国民の方だって考えているわけです。だから、あんまり信用性が高くない。ところが、日本の場合はマスコミの言ったことを90%ぐらい信じちゃう…。

天地　120%ぐらいじゃないかしら…。「火のないところに煙は立たず」とか思って…。

加治　国民性が違うわけだから、アメリカやフランスと同じように情報を出しちゃいけないわけですよ。

田崎　日本人は、島国であるだけに純粋だからねえ…。

厳しい国際環境

檀　食糧不足のこともあったんですが、トイレット・ペーパーにしても、紙パルプ資源の方はどうなんでしょうか？

笠井　今、現在でも紙材料のかなりは輸入です。日本では十分は取れないんです。例えば、ソ連のモスクワでホテルに泊まると、変な紙が出てくるんです。ソ連は木はたくさんあるんですが、日本とは考え方が違うんで、ふつうは変な紙でも平気で使っているんです。日本の場合は、石油は99.7%、木材も60%以上輸入しています。我々の紙はとても貴重なわけです。

加藤　日本には何もないということなんですねえ…せいぜい米…。

青空はるお　衛生問題もあると思うんですが、水洗にするからトイレット・ペーパーが必要になるんで、水洗にしなけりゃいいんですよ。昔通りにやればいいんですよ。そうすれば紙も水もいらないし…田舎でもどこでも水洗にするからいけない。山の中まですることはないです。なけりゃないでいいんですよ。例えば、今年松茸の出来が悪いっていうけれど、要するに皆がプロパンにして芝刈りをしないものでそうなったんだそうで、驚きましたよ。

加藤　でもね、水洗にすると元には戻せないし。

天地　トイレの問題だけに深刻ですよ。本当に。

加藤　プロパンをやめてもう一度炭を焼く生活に戻れるかというと、もうイヤだしねえ…難しい。

田崎　魚のことでも、イワシが安いとか言うけ

加藤芳郎

加治章

水沢アキ

大和田獏

大山のぶ代

青空うれし

れど、なかなか私たちの口には入りませんねえ。

青空はるお　安いというけれど安いだけでは問題なんでイワシなんか何日も食べられるものじゃありません。シャケだったら続けて食べられるかも知れないけれど、イワシなんかすぐイヤになっちゃいます。魚はイワシ以外無いということだったら、仕方ないですが、「安いから食べろ」というのはどうも…。政府は金をかけてイワシを宣伝していますが…。

笠井　でもねえ、200海里問題はまだ我々の生活には直接影響が来ていませんから。

田崎　いつ頃来るんでしょうか？

笠井　5、6年でしょう。漁業の技術のない国が200海里を宣言しても、自分たちじゃ魚を獲る技術がないから、どうしようもないです。日本の漁業技術は世界一ですから、日本に獲らせて、税金みたいにして金を日本から取るという国がいくつか立候補しているようです。

青空はるお　それに日本の近海の魚、小魚はまだ獲れるから、我々にはそれ程危機感がないんですよね。

笠井　食糧庁や農林省が考えているのは、200海里時代じゃ仕方がないから、魚を工業的に増やす人工岩礁を作ることなんです。まあ、これからやるということですが…。

青空はるお　今頃騒ぐのはおかしいんですよ。10年も20年も前に考えておくべきなんで…。

加藤　日本もいいのは、あと3年ぐらいかなあ…。

加治　200海里といっても、日本の大手商社は韓国籍とかいろいろな外国籍の船を多く持っていて、実際の日本の漁獲量というか、入獲量というか、そのあたりはあまり変えなくてもすむんじゃないですか…。漁業関係者は困るけれど、我々にはあまり影響がないということじゃないですか…。

笠井　でも影響はあるんです。漁が少なくなるという口実で値段が上がるから。それが資本主義国の難しいところでして…。

成長の限界

田崎　これで日本の輸出が圧迫されたら、日本の景気はもっと悪くなるでしょうね…。

笠井　米国は今、ベトナム戦争時以上に国際収支が赤字なんです。アメリカの歴史始まって以来のことだと言われています。

田崎　石油ドルを持っている国もあと何年持つかというと…。

笠井　1985年でと言われてますので、あと7年程度で増産の限界が来るそうです。ヨーロッパやソ連ではそう言われています。

田崎　じゃ、ウチの息子が子供を作ったら、あとは古道具屋でもやらないと…。

笠井　カーター大統領のエネルギー政策のもとになった、CIAのエネルギーに関する報告というのがあるんですが、その中でも1985年に増産の限界が来るというのは同じなんですが、その時にソ連も日米と同様にオイルを買わなくちゃならないと書かれているんで。

田崎　中国はそうすると石油はあるんですか。

笠井　あるんですが、中国は自分の経済発展にマッチした分しか堀らないんです。

三橋　つまり、子孫のために取ってあるんですね…。

加藤　ドイツなんか、のどかに牛かなんかが、〝モー〟なんていっている牧草地の下に石油が備蓄してあるんだって。ところが日本はねえ…。日本にもし、油田があっても、きっと自然破壊だとかいって反対する人が出て来るんでしょうね…。

加治　でも中国は日本へ輸出したいと言っているけれど、日本が断っているっていうネェ…。

笠井　それには理由があって、中国の石油にはイオウ分とろう分が多いので、断っているんです。

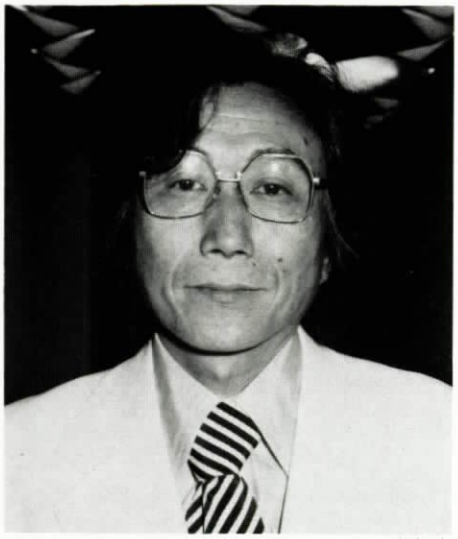
加治　本当は今のうちに中国とコネをつけておいた方がいいと思うけれど…。

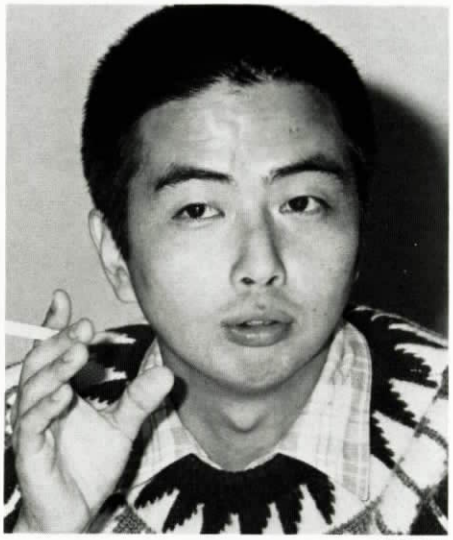
21世紀を考える

檀　でもあまり他の国に興味を持っていても恐いですね。

天地　私なんか、もう5、6年も前から「日本には未来がない」というので、長生きするためには、日本にいても仕方がない、と考えていて、友達と会っても「どこへ行く？」って話してますよ…。

小島　この狭い国で、あの広い国のアメリカみたいに、食べ物から何から何までアメリカナイズされちゃって、生活のいき方、見方までアメリカナイズされてますね。だから、ここでものの価値がすっかり変わっちゃって、「もったいないことを知らない若者」なんていうのも、皆ここから来ているんです。世界の中の日本ということで、もう少し教育を徹底すれば、もう少し


小島功


大和田獏

加治章

若者の自覚もできると思うんですが…。

笠井　確かに今までそうなっていたんですが、エネルギーはあと7年か8年ぐらいしか寿命がない。我々のことや子供たちのことを考えたら、やっぱり、21世紀を生きていかなくてはならない…。

小島　世界の中の日本ということで考えたら、日本人はここから離れられませんし、日本人を輸出するわけには行かないんですから…。

三橋　だからそういう意味で考えて当面の緊急問題は学校教育ですよ…。やっぱり、日本だけでいろんな問題の解決を考えることは出来ないんで世界の中の日本というということで行かなくては。オーストラリアでは日本に買ってもらうはずの牛を、いろいろ問題があって、殺しているというし。今、地球は小氷河期に入っているんですって。昔は今のアラブやエジプトあたりが緑野だったんですが、それに戻りつつあるんだそうで、日本あたりはどんどん寒くなってツンドラみたいになるというんで、人間の歴史はそういう繰り返しをたどるというんですよ。日本には資源がないんで、氷河期に戻るなんていうとますます真剣に考えていかないと…。

小島　まあ、21世紀のことは地球とか世界のこと抜きでは考えられないですね。

田崎　21世紀なんていうのはまたたく間のことですよ…。

笠井章弘

三橋達也

加藤芳郎グループ部会記録

昭和52年12月22日

出席者

加藤　芳郎　（漫画家）
青空はるお　（TVタレント）
大和田　獏　（俳優）
加治　　章　（NHKアナウンサー）
田崎　　潤　（俳優）
坪内ミキ子　（俳優）
笠井　章弘　（政策科学研究所常務理事）

日本人の未来

加藤　今日は2回目ですが、21世紀の問題につきましてみんなで話し合っていこうというような会ではじめたんですけども、具体的にどういうふうにどんなことをやるか、これからいろいろ討論していきたいと思っています。

笠井　この間ヨーロッパ、アメリカへ「老齢化社会」という問題で大蔵省に頼まれて行ったんですが、いま65歳以上の人口がヨーロッパは全人口の14%くらい、現在、日本は7%くらい。ところが今後10年間では14%にいっちゃうんです。ヨーロッパの世界はそれへいくのに40年かかったのが、日本はそれを10年でいっちゃうんです。

そうするとたいへんな変化がありまして、今後10年たったら老人の数が非常に多い社会になる。その老人の規定が現在の規定じゃなくて、そのころはまた平均寿命が延びますから、いまの55歳の定年だとか、あるいはいま年功序列制とか終身雇用制というのがありますね。会社でも官庁でも。あれは人口がピラミッドになっていたときに出来た原則なんです。ところがそのころになると提燈型に日本の人口はなっちゃう。真中が非常に人口が多くて、生まれるのが少なくて、年寄りも少なくなる。提燈型にはじめて日本の人口がなる。その問題はやはり非常に大きな問題ですね、21世紀まで生き残るためには。

田崎　そうするとおのずからまた考え方もぜんぜん変わってくるわけですね。

坪内　でもどなたかが言ってらっしゃいましたけど、いまの老人層は明治生まれですよね。明治の時代に育ったからこそ強いんだ。いまのわれわれ20代、30代が70年まで生き延びられるかというと、必ずしも生活がよくない。

笠井　寿命は医学が進歩したり生活がよくなれば…。

坪内　でも公害だとかＰＣＢとか……

笠井　公害問題では騒がれているほど死んでいないですね。それから日本は非常に公害がひどくて、四大公害裁判というのがあったわけですけど、公害対策もワーッとやったわけですね。だから公害を防止する産業が1兆円産業になっちゃったというのは日本だけです。そういう意味では非常に日本というのはワーッと悪いことをするけれども、ワーッといいこともするということがあるわけでして…。

加藤　車なんかみなそうですか。

笠井　車も低公害車、窒素酸化物を抑える対策としては日本がいちばんいい車を作っています。だから外国の車があの基準じゃ輸入出来ないんです。

田崎　やっぱり日本人って優秀なんですね。

加藤　なんかというと、わりあいこのごろ21世紀のことを考えるというでしょう。これどうしても悲観的な要素が多いからだよね。

笠井　現在悲観的な要素が多いから。

加藤　だけど悲観的なほうへいく前に、いまの公害の話をポッと聞いても、案外やるじゃないかと思うね。

加治　ただ公害だけについては、やっぱり現状というのをよく知っておく必要もある。これを知らないと、結果的にはとんでもないことになりますから。

大和田　いちばん最初に考えなければいけないことは、夢ですね。世代の違う人がいるとすれば、たとえば僕がどういう21世紀を夢見ているのか、あるいはもっと上の人がどういう21世紀を望んでいるのかということがないと、いやこれは直していかなければいけないとか、こうだといっても、それがひとつの線に進んでいかないと思うんですよ。だからたとえば教育問題にしても、エネルギー問題にしても、ある人は極端な話、なにもかも原始時代に戻ればいいんだと思っている人がいるかもしれない。そしたら公害問題もなにもなくなるんでしょう。現にいますよね、そういうのが。

笠井　いますよ。

大和田　だからそういうところから、まず話していって、たとえば教育問題で言えば、こういうふうになってほしいとか、こういうふうな状態がいちばんいいんじゃないかとか、あるいはエネルギー問題だったらこういう状態がいちばんいいんじゃないかという、なんかひとつの21世紀に対する目標というか夢がないと話はぜんぜん進んでいかないんじゃないか。

加治　大和田さんが、自分が生きてきた20何年間の間で教育問題を考えるにしても、自分は将来21世紀こうなったらいいと思うといっても、それはきっかけになるかというと、非常に漠然としたきっかけでしょう。ただ理想論的なことを言っちゃうと危ない。

いまの社会は情報化社会と言われていて、非常に、情報量が、多いように思われているわけです。これはマスコミの責任でもあるでしょう。ところがその情報量というのは必ずしも、量は多いけれども質としては非常に問題がいっぱいあるわけです。いまの世のなかというのはわりあいと建前と本音というのは、とくに日本の社会というのは、はっきり分けている。そうするといわゆる表面に流れてくるのは建前みたいなところがずっと流れてきて、しかもそのいちばん上の上澄みじゃなくて、浮いたゴミみたいな情報がワーッと流れているわけですよ。そこのもとにほんとうの情報があるはずなのに、われわれのところにはその情報というものは、実際僕がマスコミの世界にいても入ってこないという部分があるわけですよね。

田崎　それに、教育だってみんな興味をもっているけど、なぜ最近教育の問題がこんなに問題

になったのかね。やっぱりこれは日本の産業か発達したため、どこにでも就職ができるし、そんなに勉強せんでも免許証さえもってればできるというから教育が粗末になってきたのかね。どうなんだろう。

加治　全員が高等教育を受けるようになったからじゃないですか。

笠井　これからは大学出は就職出来ないですよ。

田崎　これからほんとうの教育がはじまるんじゃないですかね。

笠井　1985年のある研究所が予測した数字を見ますと、大学卒業者の50%しか就職出来ないという。

田崎　そうなると今度はおのずからほんとうに勉強をするやつでなければだめになる。

笠井　文部省が1990年になって半分就職出来ない、大学卒業者がふえてくるという予測をして、それから国土庁は2000年になって50%しか就職出来ないと出しているわけです。いま三つあるんです、予測が。イギリスは来年3月半分就職出来ないという。

演劇の未来

田崎　がらっと話変えるけどね、演劇界は21世紀にどうなってほしいかなあ。僕はどうしても21世紀までにほしいのは国立の俳優学校。

大学を出ると女の子は24、5。すると娘役は出来ないんです、大学出たら、女優さんが。これじゃ困る。だから国家で少なくとも小学校、中学校からやらなければだめ、役者は。実際テレビなんかだと、24、5じゃパッとアップになったら処女の役は出来ませんよ。

大和田　僕は舞台の人間じゃないけれども舞台役者が食えるようになってほしいなと思うな。

田崎　そうね。舞台役者はやっている場所が少ないでしょう。昔あんなにあった芝居小屋なんてなにもないですものね。常設館が。テレビが影響している。

坪内　毎月あれば別だけどね。

田崎　国立劇場もいいかげんだといいますか、たとえば、歌舞伎はやるんですけど、大衆演劇やっているわれわれは申し込んだって絶対貸してくれないです。ここに国立劇場の不思議なところがある。

青空はるお　そしてまた採算とれなきゃだめでしょうしね。

笠井　国立劇場に採算があるんですか。

青空はるお　やっぱり入らなければだめだろうと思います。

笠井　それじゃ国立劇場じゃないじゃないですか。ヨーロッパの国立オペラはみな出しているんですよ。

青空はるお　やっぱり動員出来なきゃ…。

加藤　芸という字のつくものはあまり国にお世話になんないほうがいいんじゃないですかね。

青空はるお　ソ連みたいになりますか。

田崎　国家でやればいい役者が育っかもしれない。

加藤　どうかな。

田崎　それはいいということもいろいろあるわね。

笠井　競争がどういう形であるかということでしょうね。

田崎　まあ国でやらなくてもだれか個人でもいいんだけど、やっぱり俳優学校のちゃんとしたものを作ってほしいね。

大和田　マスコミにたとえば出ていて、それでお金がある程度入るなら別ですけれども、真面目にほんとうに新劇の劇団なんかで勉強している人達でもまず食べていけないでしょう。するとまずアルバイトが先に立つんですよ。

田崎　男の場合まだいいの。女の人がアルバイトを半年やったらもうだめだ。たとえばバーとかスナックに勤めているでしょ。もう、それが身についちゃって、ほんとうの純情な娘なんか出来ない。どうしてもそういう女の形になっちゃって身についちゃう。だからアルバイトをやらずに食っていく方法がなければだめなんですよ、やっぱり。

テレビがあるお陰で大衆は非常に目が肥えてきているわけです。だからいいかげん下手な役者はもう見てられないわけですよ。ところがうまい役者になる土台がないんですよ。昔は芝居があって、人の書生やりながらだんだん先輩のを見て覚えた。いまないもの。

いままだ新劇は研究所があったりするから、まだいいけれども、ほかのところはないものね、僕は21世紀の芝居はほんとうに心配するな。

笠井　芸というのはどういう意味があるかというのは時代によって変わるんだと思うんですよ。

田崎　おおいに変わってくるね。たとえばいまテレビでやっているリアルな芝居を昔は素人芝居といって軽蔑したんです。

いまは素人芝居のほうがいいんです。だから時代によって変ってくるわけよね。

加藤芳郎

大和田獏

加治章

加藤　落語で言えば寄席みたいのはだめになっちゃったでしょう。ところがいま勉強会なんてやるとすごく来る。

加治　本物をやっていたんでは今度は金にならん。

田崎　でもね、テレビでドラマをこんなに見られてあれだけど、芝居もどんなのはやるか知らないけど、また芝居が一番よくなる時代がくるんじゃないかと思うね。ナマのもののよさというのね。でもそれには勉強する場がないんです。

笠井　僕はすごくダイナミックな時代だと思いますよ、21世紀は。ダイナミックな時代ほど静のものを欲する時代は、ないかもしれない。いま以上に静のものを欲するかもしれない。そのときにそれの出来るような映画作者や芝居の作者があったり、それをプレーする役者がいるかどうかということが問題なんで……

田崎　それを作るのが途切れそうなんですよ、下が育ってこないからな。

笠井　興味関心だけでどんどん物を作るほうと、それがちゃんと出来るやつを養成するというのは別問題。片方は不遇な時代があるかもしれない、どんな時代でも。

加藤　甘ったれちゃだめ、すべて芸は。

笠井　NHKの大河ドラマ、朝のドラマで面白いと思うのは、芸能界で有名でないのを使ったじゃないですか。NHKが冒険してくれたお陰で、それで有名になったのを商業演劇が使っているでしょう。

田崎　でもあれは不幸にして今まで出なかったんで、テストしたりなんかして、やっぱり優秀だから出てきているんですよね。あれはいいことですよね。あれで救われているんですよ。あれはNHKでないと出来ないね、冒険は。NHKのあるお陰で日本の演劇がどんなに発達したかわからないんだな。

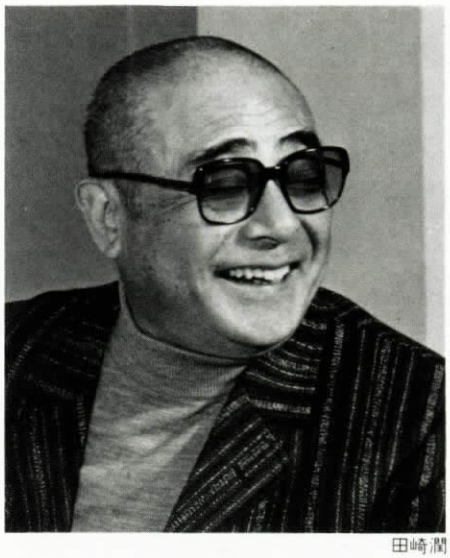
笠井　NHKが伸びるやつを育ててきたでしょう。それはどういう意味があるかということを、いまの評論家どうもなにをしているのか……。おかしいじゃないですか。

田崎　いまの評論家というのはけしからんのが多いですよ。見ていて、浪曲みたいな話に涙を流したり笑ったりしているくせに、書くときはぜんぜん違うんだ。あれはくだらんなんて書いてる。自分は感激して見ているくせにね。

笠井　そういうのはどういう原因でそうなっているかというのをこういう会で究明したら……。

田崎　ほんとうですね。

青空はるお


田崎潤

坪内ミキ子

加藤芳郎

村の将来を考える 岩手県沢内村の場合

加藤秀俊

1．世界の分業形態
—兼業農家における作物面の自立化—

かつて沢内村では、米、馬、製炭を三本柱とする農業形態が主流であった。

ところが北上線の開通、冬期バス交通の敷設を契機として、戦後の高度経済成長の波がこの村にも押し寄せ、大きな変化をもたらした。交通が便利になったことによって村の外へ働きに出る者が増え、さらに村内にも、製材所、日貿産業、ローンシューズ等の工場が建った。これは、村の人々にたやすく農業以外から現金収入を得る道を開かせた。

兼業農家が全国の7～8割を占める今、この沢内村も他にもれず、ほとんどの農家は第二種兼業の形態をとるようになった。しかし農家の将来性を考える時、今一度この形態を見直すことが必要であろう。つまりここで問題となるのは農業自体の在り方である。現在の不況の中で、農家も減反をせまられている。

このような苦しい立場にある農家は、従来の自然災害への対応策のみではなく、行政上の人工災害に対する措置を講じなければならない。すなわち戦後行われてきた農業方法ではなく、今後は大自然との融合を討るべきである。それは現在まわりにある自然を充分に生かすこと、つまり田、畑、家畜、山から得られるものを組み合わせて、自立化の方向に進むことなのである。

その際、自然の生態系を無視し、破壊するのではなく、自然循環の方法—自然回復耕地農法—を再度見直し、有畜複合農業などに活路を見いだすべきである。

これに関連していえば、今までの農業は平地進行型—米作中心の進行—に傾きすぎていたのではないかと思われる。日本の耕地面積が５００ヘクタール、そのうち機械化の可能な平地面積が１００ヘクタール足らずで、残りの４００ヘクタールは傾斜地である。それにもかかわらず、傾斜地を利用した農法が、考え出されていない。ゆえに傾斜地の活用が今後の重要な問題となるであろう。たとえば、山間の川を利用した養魚、斜面を利用することが可能なブドウ栽培などが挙げられる。

2．新集落編成の問題

次に、沢内村長瀬野・和佐内・七内川地区に代表される新集落編成の問題である。この新集落編成の地盤は、昭和30年代に始まる新生活運動にあるが、これは青年・婦人・成年男子各層の人々による運動の総称である。まず青年会は、“新暦を使おう”という運動を波及させ、新しい農時暦を作成した。さらに、“時間を守る”ことを徹底させるため、人々に、時計を朝のラジオ体操の放送に合わせることを求めた。そしてかつて冠婚葬祭の時にしか使用しなかった家の中の無駄なスペースをはぶくために、その簡素化を推進した。婦人会では、学童のお弁当調査を約二年間続け、それをもとにして完全給食の実施を実現し、三色栄養素表を作り各家庭に配布した。またその調査によって婦人会は、農家の食事に不足がちなタンパク質、カルシュウム源の食品を一括購入して、村の人々の食卓の改善を計る努力を重ねた。一方成年男子においては、沢内村の土地改良に力をいれた。戦後の化学肥料、機械化導入により換金方法が変化し、さらに従来農家の働き手であった馬は昭和33年頃から、牛へと移行し、湿田による稲作は乾田に転換した。土地改良の完成は、昭和39年である。ちょうどこの時期に、これらの地域活動が集落再編成の問題へ繋がった。かつて自然発生的に住んだところは、いろいろな面で公共的な設備が整えられないために過疎になりやすい。それを避けるためには常にイニシアチブを地域社会側がもち、行政を動かしていかねばならない。

この場合長瀬野、和佐内、七内川地区は県道から離れ、家が散在しているために、除雪や水道整備等が充分になされず、生活が不自由であった。そこでまず自ら県道沿いに集落を作り直すことによって、行政に働きかけ環境整備をうながした。地域社会においてそれを改善していこうとする時、政府の組織に任せるのではなく、当の村の人々が、自分たちの幸せのため、一諸になって一つの方向を定め積極的に活動することが重要である。そうすることによってはじめて健全な地域社会が成立するのではないだろうか。このような意味でこの地区は実にめざましい成果をあげたといえる。地域住民が自らの利益と目的を常に明確にし、行政を利用しつつ地域の変革を

進めていかなくてはならないであろう。

集落再編成後6年目に行われたアンケート調査によれば、「再編成をしてよかった」と答えたのが、48戸、残る2戸は、「どちらともいえない」という回答であった。そして、「今後何に力を入れて欲しいか」という問いに関しては、「生産面を考えて欲しい」18戸、「環境整備をして欲しい」16戸、「人間関係、近隣関係について考えて欲しい」2戸という結果であった。

特に問題となった環境整備に就いていうと前述したように冠婚葬祭簡素化推進のためにできた新集落は、個人の家でその行事をする場を失ったかわりに、公共の皆の集まりの場である公民館を必要とした。それは人々の輪を作るためにも重要な役目を果たすものである。しかし現在の長瀬野・和佐内・七内川地区の公民館は、移転当初の35世帯を、はるかに上回る50世帯に達したため、人々を全員収容する能力がなく、その拡大が叫ばれている。また年間の利用回数が240～250回と、年々増加の傾向にあるため代替設備の設置の案も出されている。

3．集落再編成と伝統的行事との関係

農業における機械化導入によって、生産方法の変更が余儀なくされ、従来の伝統的農業の方法が変化している。その生産面の変化は当然人々の間の関係にも変化をもたらした。以前の農家は、農業の一年間の段取りによってそれに伴う伝統的行事があった。しかし第二種兼業農家が増大している現在、もはやその基盤を失い、古い農法に基づく農業とそれにまつわる行事が変貌せざるを得なくなった。そこで新しい人間関係と新しい社会環境が作られることが必須となってきたのである。それが今まで述べてきた新生活運動及び集落再編成によって生じてきた第三の問題点である。

現在新しい農業方法が導入されてきたことで、安定した一定の生産水準が確保されたのは事実である。それに伴って余暇時間が増えて、その効率的な利用が人々の中心的課題になってきている。

戦後、生きることに精一杯であった人々は“遊び”を忘れて勤労のみに傾斜しすぎていたため、“遊び”を悪として退ける傾向があった。

日本の高度経済成長の中で、村の人々は追いつけ追い越せと必死で働いた。この成長の中でかつての伝統的な行事は軽視され、“バカくささ”としてしか皆にうつらなくなり、人々は無気力になって、連帯感は削りとられていった。現在、余暇時間ができたところでかつてのしきたりからその時間を労働にあててしまうのではなく、純粋に余暇としてこの“バカくささ”を人々の中に育てていくことが問われるのである。このためには勤労のためのリクリエーションではなく、リクリエーションのための勤労とまで大胆に価値の転換を計らねばならないであろう。

村の人々は働くことのみに進化して、“楽しむ”ということを失い、それをバカバカしいものとしてしまったところに誤りがある。バカくささという意味のないものの中に連帯の意識を見つけ得るはずである。それには村の人々全てが、一つのシンボルに向って、何の理屈もなく、ただ“楽しい”とか“やりたい”という気持ちをもつことにある。

集落再編成後、さらに人々は協力していかねばならない。その連帯感を養う新しい環境作りとは、余暇を生かすことにあり、そのためには、失いかけている伝統的行事＝祭りの中に、そのきっかけを得ることであろう。つまり楽しみのために働くというようなハレの舞台を作ることが、かなり重要となる。それにはそのバカくささをまとめていく演出者が必要である。そして村独自の伝統的な祭りをかさねていくことで、それは村民全員の誇る伝統として生きつづけるだろう。人々が祭りに参加し、工夫を凝らすことによって人々の意識は向上し、輪は強まる。

このような“バカくささ”というものに人々がいっしょになってはいり込むことで、自分たちの村に根ざした自分たちの村の誇りを持つことができるのではないだろうか。地域社会において、その地域の人々が集まる場は重要でありその存在は不可欠である。

勤労は必要である。しかしそれとは別にまた余暇による人とのつながりは、共通の注目の的が存在することで得られるはずである。農村においては祭りという伝統的行事がその役目を果たし、“バカくささ”を演出する者の出現により人々の連帯感を呼びさまして新たな環境作りが地域社会の向上へと結びつくであろう。

日本の村の将来　宮崎県諸塚村の場合

加藤秀俊グループ部会記録

53年1月12日

出席者

加藤　秀俊　（学習院大学教授）
宮本　常一　（日本常民文化研究所理事）
米山　俊直　（京都大学助教授）
木内　義勝　（学習院大学東洋文化研究所）

〔討論〕

宮本　植林がはじまったのは明治30年だったと思うが、制御案という法律ができ、その時からはじめて森林区が制定される。何パン、何パンという。それから植林が一般化されるようになる。明治12年、土地によっては18年ぐらいになるが、山林の官民有区分がおこなわれた。そこで官と民の区別がされた。土地によって官民有区分がいろいろ違っていた。例えば高知県では焼き畑をやっていたような山はアキ所山といわれていたが、そのアキ所山は藩主がもっていたということで国有林にふつう編入されていた。それが延岡藩の場合は焼き畑をやっていたということで民有林になる。なぜ民有林が多いかというと焼き畑をやっていたからで他はそうではなかった。大きな木を切ったトメ木は藩がとるのが当たりまえだったので、最初トメ木の多い少ないが問題になっていた。だから、トメ木の多い所は国有林が多く、少ない所は民有林が多かった。

スライドを見ていて興味があったのは、みんな焼き畑をやった山だということ。どうしてわかるかというと、山がみんな切られていて木の大きさが違うからなんだが、同じ焼き畑でもこの地方でも2つに分れる。椎葉の奥は杉が多く、杉の立っているままその下で焼き畑をしていた。椎葉の奥を歩いていると黒こげになった木が立っていた。そういう所ではキオロシということをやった。ところが諸塚に入るとそれがなくなる。諸塚には熊本の文化が入っている。熊本は雑木を切っていた。スライドにあったように雑木が多い。だから椎茸がつくれるのだ。杉が多いと椎茸はならないし、だから、椎葉の西から米良にかけては椎茸は減ってくる。そういう条件があった。

この人たちがほとんど外にでていかなかったということをいわれたが、むしろ問題は七ッ山という所にあるのではないかと思う。ここはサンカの村ではないか。サンカはクラをかえていた。藤のミをみてわかるので、あのミはサンカでなければつくれないものなのだ。サンカたちは九州一円を移動して歩いていてある時期になると戻ってくる。ヤベの町で聞いたのだが、5月20日に10日前後ぐらいここにいる。その他は仕事をしているようなのだがどこで仕事をするのかわからない。いくつかの組があって、ほうぼうを歩いているらしいがどのくらい歩いているかはわからないのだそうだ。耳原の北のリョウキョウの中に墓があるが、そこにある墓はあきらかにサンカとわかる。それから竹カゴをつくったり、うなぎをとったりしているがそれなどもそうである。サンカの人々は実にいい人たちなのだが、外部の者に対して厚い壁をもっており、諸塚は一番大きな根拠とみられているのである。

このあたりの家は椎葉にみられる仮倉（カクラ）と同じようなものではないか。山の中腹でもとは狩りをしていたのが、山の木がなくなったことで狩りを中止して定着していったのではないかと思う。生活のたて方で出稼ぎがないというのに疑問をもつのだが、それは、山を西に越えると、じっくり話を聞くと、江戸時代からほうぼうに出ていたのがわかる。炭鉱やなんかに勤めていた。だから私はあったと思う。資料をみるとかなり早くから椎茸をつくっている。椎茸というのは一番便利な産物だ。なぜなら軽くて高いのだから。そういうふうにして非常に早くから貨幣経済が入っていってるのではないか。我々が考える以上に早くから入っているのではないかと思うわけである。

次に田んぼは誰が作ったのかという問題がある。椎葉も米良もほとんど広島の人がつくっている。田んぼを開いたのを調べてみると明治時代土地改良というのがでて各一里、畑を田んぼに直した。広島の山中では田んぼのあぜを石垣に変えていく方法が取られたのだが、石垣のあぜと屋根のふき方をみてみるとここらへんにも広島の影響が与えられていることがわかる。広島で才能をもった人たちが九州へ来た。北九州の屋根は広島の屋根と同じだ。そしてその人たちが炭鉱に入った。炭鉱の抗夫には広島の人が多いという事実もある。そして尾根づたいに南に移動していくのである。またこのあたりでは丸石ではなく割石を使っているが、あれも広島のやり方である。だからこの辺は閉ざされた世界ではなくて、我々の想像のつかないような外部との接触があったのではなかろうかと思えるのだが。

木内　村内では一軒が福岡の炭鉱へ出ただけであとはない。農家の移動としては小原井の中の二軒が外へ出ている。

宮本　それは出稼ぎという型よりも放浪だ。そういう型があの山中にはあるような気がするのです。

米山　武者修業といったようなところだろうか。

関口（学生）　ここに一番古いといわれている田んぼの写真がある。（スライド）

宮本　その場合水の引き方が問題になるだろう。

木内　昭和16年にモモハルという所で水路の大工事をしたのだが、その時は県の指導課の人が指導したそうだ。水源はここらでは湧き水である。

加藤　話はもどるが宮崎は民有林にするか国有林にするかでずいぶんもめた所のようだ。

宮本　鹿児島県は国有林が多い。それはなぜかというと大政奉還の時、土地も奉還するのだという考え方が強かったからだ。ここらの村は国有林の少ないのが特色で、何10町歩ももった山林地主がいる。椎葉でもそうだ。ハンコを庄屋に預けると庄屋はそのまま自分の名前にしてしまったわけだ。あとでわければいいと思ってい

て。それがそのまま自分のものになってしまったわけだ。そうではなくて連名した場合はゴタゴタになると困るからわけようではないか、ということで明治40年前後に個人用になった。焼き畑をやっていない所は自分では持たなかった。税金をとられるだけだから。

なぜ焼き畑をやったかというと、肥料をとるだけでなく野獣を追い払うという意味があった。このへんはいのししが多いから。焼き畑で小豆をつくるのは葉っぱをうさぎが食べないからで、山でつくる豆としては小豆が一番よかった。また、さといももつくられた。つまり動物に食べられないものをねらうということが大事だった。焼き畑をやると臭いがきくとみえて2年はこないものだ。

焼き畑というのは100町歩あったとしてもそれが全部焼き畑にできるわけではない。いろいろ予備的な土地があるから広さが同じようにわけられるのではない。また家の人数によっても開く面積が違うから、例えば4人いる場合と5人いる場合では、それが焼き畑をみる場合のひとつの基準になる。

連盟持ち、つまり共有林は面倒である。5人でもつと5人の名前を連ねるわけだがひとりでも脱落してどこかへ行ってしまうとハンコがもらえなくなるから売買がむずかしくなる。それで明治40年頃など、連盟持ちでは困るといって山わけした例が多い。それから資本家が入ってくるわけだ。

木内　ちょうどその時期、ここでも親方が買い占めをしている。

加藤　先ほど木内さんがミヤマシタという所に新入りが入ってきて焼酎つくったりしていて親方になった、という話をしたがこういうのは明治の文化パターンとして日本の山村に多くみられるのだろうか。

宮本　ほとんどそうだ。例えば車の通る道の端にそういう部落ができてあっという間に力を持つということはよくあった。

木内　そういえば塚原から宮の元まで尾根道でバスが通っている。

米山　村を考えるのに狩猟はどのくらい大事に考えなければならないのだろうか。

宮本　このあたりも狩りの地帯だったと思う。ハエという地名のつくところでは狩りが行われていたと考えられる。狩り中心が、焼き畑中心になってくるのはだいたい鎌倉後期からだが薩摩隼人のハヤ、これはハエの人だろうといわれている。つまり狩猟を中心に生活をたててきたのが焼き畑中心になってくる。彼らが一番えものを追う技術をもっていたと思う。強いのがあたりまえなんだ。米良にしろ椎葉にしろ、騒動があってその時に多くの人が殺されている。家を全部焼いて大人をみんな殺してしまったりしている。それで変ってくるんだから、その段階までは狩りが非常に大きな比重を占めていたと考えてもいいのではないだろうか。事実、今でも東米良で1年間でとれるいのししの頭数は500頭をこえている。明治の終わりなんか何千頭だった。

加藤　七ッ山で定住している人たちはもともと狩猟民だったとか聞いたが。

宮本　部落のあり方には2つあって、ひとつは早くから狩猟民が定住した場合と、それからもうひとつは合戦があってそこにつくった部落、例えば米良の場合だと、菊地氏が滅んだあとあそこにやってきた。全部が菊地というわけではなくもとから住んでいた人たちがいる。カミの祭りをしている方の側からいうと、シロミ神社の祭りに参加するような人たちは菊地氏の家臣がやっていったのではないかと思われるし、ところがカプロヤという集落の人々はやはり狩猟民だったのではないか。だからいくつかの流れがあってそれが定着していったのではないかと思う。諸塚から倉岡へはアソの定住がところどころみられるのではないだろうか。

木内　享保5年、小原井村では31軒あってそのうち27軒が高持ち百姓。3軒が山小屋百姓。元禄11年では家代で高持ち百姓118、山小屋百姓17。七ッ山で高持ち百姓213、山小屋百姓20だった。

宮本　山小屋といわれるものがクセモノだと思う。

今、スライドを見て思うことだが、椎茸、あんな素朴なことでいいのだろうか。原木も需要関係がきちんとされているのだろうかと気になる。椎茸の栽培は九州では大分県の南の方が一番だった。だが原木を切りつくしてしまった。それで日向に入っていって日向の平野に近い山麓を切りあらしていった。現在大隅半島へ入ってそこでもほとんどなくなりかけている。つまり椎茸栽培の出稼ぎというのが大正から昭和にかけてあった。自分のところでやっている間は採算がとれるからいいが、それが南へ移動していくにつれ面積を広げなければならなくなるし、そこで出荷が問題になってくる。結局行きづまってしまう。高知県でも同じことがいえる。各地で椎茸栽培を指導しているのだが、原木を加工するための計画が先にたたなければいけない。これは大きな問題になってくる。そういうことが21世紀問題にもかかわってくるだろう。日本のそういうものはみな計画性がない。日本の農業がここまで行きづまってきたのもそれ以外にない。とくに林家は、政府の指導が悪くて山に杉さえ植えればいいという考え方だから杉を植えたから屋根のふきかえがなくなった。瓦にした方がいいといえばそれまでだが。それをやめると村落共同体がくずれる。くずれてもかまわないではないかとなるとこんどは山村で多くの人手を必要とする時の共同労働というのが消えて賃労働にかわる。賃労働に変わるところからゆきづまりが出て、山を捨てざるをえなくなるわけだ。そういうことには金をかけず、生産したものは高く売るということが大事なことだったわけで、それが村落共同体の成り立っていた意味だったのにそれがみんなくずれてきてしまっているのだ。

大正時代の経済に就いて

9月22日

出席者

小松左京（作家）

中村隆英（東京大学教授）

河合秀和（学習院大学教授）

小松　明治の終りから製鉄・満鉄など産業資本化が始まった。これが大正を考えるうえでの大きな要素になっているように思いますが、また、言ってみれば私学、会社線、沿線そして宝塚などなど、森羅万象みな大正に始まっている。

中村　日露戦争に勝ちわが国も列強と肩を並べられたものの根拠のない一等国ですから第一次大戦が始まると、いままで外国からの輸入に頼っていた機械工業も鉄工業も、いくら会社がやる気でも輸入が止ったため設備投資ができない。たとえば日立も東芝も明治末から外国と技術提携しているけれど、日本の技術では絶縁できない。日立がモーターを作ったがスイッチ入れたら焼けちゃったり、歩き出す扇風機ができたり、技術的にはその程度だった。国産が出廻るのは大正も終りごろです。

小松　わが国は大戦のおかげで景気はよくなる。また、戦後はあぶく銭が入ってくる。

中村　船成金が出ますね。もちろん造船も進展しますが元来、日本の鉄の大部分は輸入ですから当然鉄が足りなくなってくる。大正7年に日米船鉄交換契約、船を造りますから鉄を下さいというわけです。

小松　技術はマスターしていました？

中村　造船技術はありますし大戦で拡大されます。外国への発注はビッカースへの金剛が最後で、霧島・比叡から国産になりますが、アンバランスな部分もあったりで、'20年ごろには三菱でいい軍艦作りますが、世界水準抜くのは、'50年代です。

河合　繊維はどうでしょう。

中村　なんといっても日本最高の産業であったわけで綿糸を米・印度から輸入し綿布を輸出し大正5年からは英に次いで2位となっています。とにかく当時の日本は借金がないというのが誇りだった。

小松　化学工業はどうでした？

中村　日本窒素の野口遵が欧州から技術を買って来ますがアンモニアを作る技術工程には大量の電力が要ることから、電力をいかに安く手に入れるかを考える。北朝鮮の山をみてこれならダムが出来るとヒントを得、ダムを造り、安い電力をつくる。

電解技術が国際的水準になるのは昭和の初めですが、発想は大正の始めからあるわけです。

河合　鉄・電気・化学工業も、全て発想は大正にある様ですが。また、建築、鉄道も始まりますね。

中村　大正3年に三越が出来たときは、山県、伊藤已代治も招かれて見物に行っています。鉄道の発達、とくに私鉄はめざましい発展ですが、鉄道が敷けても鉄橋はまだできない。鉄橋は大正の終りです。

小松　行楽からですよね。お伊勢・出雲詣り成田・日光詣りなどで京成や東武が発達する。

中村　料金がそれにつれて安くなる。明治のころは、庶民は電車に乗れませんでしたから。

小松　郊外の住宅地を結ぶ私鉄の敷設も4年ごろから盛んになる。

中村　鉄道が生活権と結びついてくる。

小松　国鉄の電化は遅れますが。

中村　私鉄は水力発電ですから。面白いのは水力発電機を関西はＧＥ（60サイクル）東京はシーメンス（50サイクル）から入れた。

小松　いまだにサイクルが違って迷惑しているわけだ。

中村　明治42・43年から始まり49年に完成した山梨、大正4年には猪苗代湖に水力発電ができますが、その影響は大きい。電力料金が下ったことで家庭の電化も進みますが、これまで大企業はスチーム、零細企業は人力だった動力が、電力にかわります。紡績などはとくに。中小企業がこれでかわるわけでして。南博氏の「動力革命と技術革新」によくその経緯が述べられています。

小松　国際経済についてはどうでしょう。

中村　大正6年に金輸出禁止を米に習って行ないます。大戦中ヨーロッパの荒廃で日本の輸出が伸び、外貨が溜る。円為替が上る。公式相場で高いときには百円が12・13ドルにもなった。闇はもっと高いわけで、金を出しても入ってくるのは紙っ切れではということで金輸出を禁止する。大戦後、復帰すればいいのに、見送ってしまう。大戦が終った8年以降は、技術を買ったりで、輸入が大巾に超過する。一方輸出は伸びない。

小松左京

中村隆英

河合秀和

世界的な不況ですが、日本の場合、緩慢な下りかたをしながら長期的な不況が大正の終りまで続きます。それに震災、12年にまた輸入の超過がある。

小松　各国が金本位制に復帰したのに、昭和5年まで、もたもたしていたのはなぜ？

中村　浜口雄幸、高橋是清なども、金は溜めておかなくてはという意識がある。

河合　大戦後、濡れ手に粟という金の摑み方をしたから、使い方知らなくって西原借款など無担保で貸しちゃう、英などはきちんと担保とってあるのに。中国の民衆からは怨みを買い、そのうえ相手がいなくなっちゃって返してはもらえない。結果的には国民に公債というかたちでツケが回ってくる。

中村　国際収支が赤字であるとき、なんとか欧米との関係を巧くやりたい。借款・外債募集なども、然りで、是清や井上準之助ら当時の財政家といわれた人の常識でしょう。

金本位制については、機会を失したということでしょうね。電力会社にしろ、三井銀行にしろ（金貸しとしての）モルガンとの関係は深いわけで、たとえば震災で東京電力が滅茶々々になったとき、名古屋電力の松永安左衛門がお金を貸し、東京への供給権を得るが双方とも競って値下げ合戦をするから赤字になってしまう。困った三井銀行は東電に外貨債を募集させ、モルガンに東京電燈債を売って、三井は引き揚げる。だから経済屋さんは英米から手が切れない。借金しているから。政治では大東亜共栄圏などと言うが実際は欧米から離れられない。

河合　大正を考えるとき農業にも問題が？

中村　大正6・7年から9年ぐらいまでに千五百万人の農業人口が二百万減っています。大量な人口流失が起るわけで、農業人口は明治から増えていますが耕すべき農地はないし設備投資もうまくいかない。そこで余った人は都市へ出てくる。

小松　大都会集中はそのころにもあった。

中村　大正9年の恐慌のとき、出て来た人は帰れるか、やはり帰れない。そのうえ不況下の農村から男も女も職を求めて都会へ出てくる。労働に見合う収入がなくても、また収入減っても零よりいいから働く。この人口を第3次産業が吸収する。夜中の12時でも出前があったということは、いかに人手が余っていたかということです。

河合　日本に資本主義はあったんでしょうか。

中村　大真面目に資本主義だと思っていたが国際経済はかなり鎖国的でしたね。実際、三井、三菱はそうでありたいわけで、たとえば昭和6年に三菱はロンドン支店に金を大量に送ったりする。国内に投資して産業利潤を上げていくということをしないといった形態もありますから。資本主義というものでもないようですね。

小松　ロシア革命・マルクスなどの影響は？

河合　アダム・スミスのオーストラリア学派が日本では大部分を占めていましたが。

中村　マルクス経済学が入ってきて、大内兵衛などが影響をうける。とにかく明治は一方的に学んだが外国の真似をする段階が終って大正に入ると、日本人とは何かを考える。そこで漱石もも和辻も西田も、日本人を発見するには、国学だけでは駄目、ヨーロッパを通して西欧の言葉を使わなくては国学ではやれない、語れないことが判る。そこへマルクス経済学が入ってくるので。

河合　マルクスが日本人は特異なもの、「特殊日本的」と言ったが、もろもろの懐疑を明らかにしてくれた。マルクスが優れていたとかいうのではなく、日本の最も普遍的な概念となったのはマルクス。医学も科学も哲学も別々に日本に入ってきたが、そのすべてを関連づけてくれた。近代文学も彫刻もマルクスの影響は非常に大きいし、気がついたら束ねる思想がマルクスだったのではないでしょうか。

小松　ヨーロッパの思想が大衆の概念のなかに入ってきたということ。

中村　世界的な経済変動のなかで比較的うまくやってこられたのは、中国と違って日本の場合は藩があって、藩同志の折渉に慣れているから国際感覚があった。外国との交渉がなくとも、そこから培かわれたものなんでしょうね。

なぜ大正か

5月11日

出席者

小松左京（作家）

加藤秀俊（学習院大学教授）

他

大正時代というのは、日本の近代史において、1つの転換点ではないか。しかし、大正デモクラシーや文学史など個別研究はあるが生活の記録を、時代をタテにつないだ視点から研究したものは、今まであまりなかったようだ。

日露戦争後、外交面でも日本は、新たな one step を踏み出している。また、産業面でも、明治政府による国家統制産業と、江戸時代から引き継いできた産業との並存状態が、近代型産業資本の台頭によって1本にまとまる。世界経済との連結を深めるのも、大正時代である。一方で農村経済の崩壊は既にはじまっており、都市への人口流出が新たな社会現象を生み出している。しかし、まだ農村的なものにこそ正当性を認め、「都市」「インテリ」「工員」という工業的なものは不良性の象徴だった。大正時代に何度か民謡ブームがあるが、それも、都市の農村志向のあらわれではないか。だが、都市はまた、藩閥につながらない人間の活躍の場でもあったのだ。

大正時代に続々と出版産業が台頭するが、その多くは、中部山岳地帯出身者によって始められている。また、『大菩薩峠』をはじめとして、山岳小説が流行している。中部山岳地帯の文化ゲリラ的役割は無視できない。また、週刊誌、グラフ雑誌、ラジオなど、マス・ジャーナリズムの成立も大正である。新聞が全国紙になるのは、震災後。講談社のダイレクトメール宣伝による大量販売システムも、震災後にはじまる。

このような出版産業の台頭を支えるものとして、大衆の教育程度の上昇がある。江戸時代の寺小屋の伝統から、日本人の識字率は非常に高かったが、それでも、中等教育、女子高等教育の爆発期として大正はある。

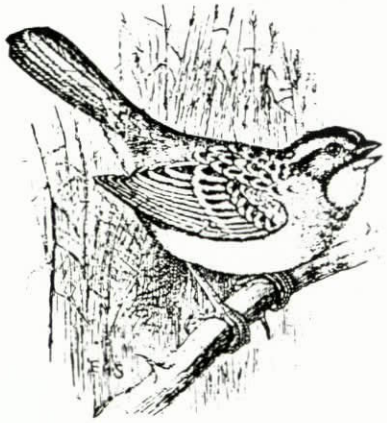
一方では、土俗的な新興宗教が民衆の心をとらえ、大きな勢力となり、他方では、衣食住、スポーツなど、生活に洋式が浸透して、モボ、

モガが氾濫する。それまで長調で唄われていた寮歌が、大正時代には、短調で、しかも三拍子で哀調こめて唄われるようになるのも、大正世相の反映であろう。

政治的には大正デモクラシーについて、輝かしい民主主義の時代であったという見方があるが、それを今までは、太平洋戦争の責任を昭和へ負わせる免罪符のように使っているきらいがある。しかし、実は、太平洋戦争における国民的発狂の根も、さらには、戦後の土臭にあふれた住民運動の根も、大正にあるのではないか。ハドソンは、大正時代を、暗黒の昭和の発生源としてみているが、それは正しいのではないか。このような、大正のdark sideに光をあててみたいと思う。

これからの研究方向としては、世相・生活感覚を共通広場として大正commonsを仮定し、政治や経済の問題も、それぞれ世相に照しあわせながら進めて行く。現在との関係も、現在の生活感覚とのつながりで捉えてみたい。

なお、我々の対象とする大正時代とは、明治40年から昭和5年までの期間である。



大正遺制について

5月27日

出席者
小松左京
河合秀和
加藤秀俊
他

大正時代にはじまり、現在にまで引継いでいる事柄をいくつかあげてみよう。

〈家計簿〉　自由学園で家計簿をつけることが提唱された。これは、それまで家業を営んでいる人達がつけていた大福帳と、家計を区別するものである。そこには、中産階級としてのサラリーマンの存在が前提としてあるだろう。

〈教育の自由化と規格化〉　大正の初期は高校増設、鉄道増設、増師団が、政治の現ナマ化の象徴としてさかんに行なわれた。一方では、自由学園、成城学園、成蹊学園、玉川学園、文化学院など、官学にない独特の建学精神に基づいた学校が創立した。慶応、早稲田が私立大学として認可されたのは、大正9年である。おそらく、この頃には、大学出身者のstatusが定着してきたのだろう。したがって、私学も大学にせざるを得なかった。教育の自由化とともに、規格化がはじまったとみなければならぬ。

大学への就学願望というのは、明治遺制として現在にまでつながる立身願望だったのだろうが、現在と違うのは、地方のあり方だ。大正時代には、まだ殿様奨学金制度のようなものがあり、都市にある殿様の屋敷が、県人会の寮になっていた。金と名誉が一体となったestablishmentは、この頃まだ存在していたのだ。しかし、一方では、新興ブルジョワジーの船成金などが台頭し、白樺派の動きがあった。日本のestablishmentは、文化的にまとまったものを形成していなかったのではないか。例えば、米・英の上流階級の「我家」観と比べてみると、日本には、"Sweet Home" "Castle"にあたるものは見当たらない。侍にとっての「家」ぐらいである。

白樺派の人間が抱く不安感、後めたさ、恐怖など、文学史では、「近代的自我」といわれているが、果して「近代的自我」とは何をさすのか、不明確だ。白樺派における女中の存在、女中の地位の変遷は重要かもしれない。

大正期のestablishmentの問題は、家計簿や田園調布もestablishment予備軍の問題としてあるし、成城や成蹊などの創立も三代目教育を目的としたものと考えられる。欧米文明の吸収・普及というのは、内側に向っての新しい生活規範を、啓蒙教育という形で押しつけるものだ。大正時代には、しきたりからはずれた人間の為の、新しい家庭指導書が多く出版された。例えば、自由学園や村井玄斎などによって、夫婦単位の家庭が提唱され、客のもてなしも夫婦でおこなうよう勧めているが、実際には、実現しなかった。

〈田園調布〉　後藤慶太が、イギリスの美しい街並みに啓発されて、計画したものである。私鉄と併わせての開発は、小林一三からの影響である。

〈大衆文学〉　夏目漱石の「猫」は江戸戯作小説の系統だが、一方、佐々木邦のような新しい傾向もあった。そこであつかわれているのは、ほとんどが都市文化である。昭和のファシズムは、佐々木邦の小説の登場人物たちにとっては、大変な打撃だったろう。彼らの運命はどうなったのだろうか。戦後の高度成長で復活し、現在につながっているのか。また、貴族社会のゆとりの中にも、佐々木邦の小説の中にもある、recency, thinであることというのは、今もあるだろうか。あるとすれば、日常的レベルでのノイローゼにつながってしまうのかもしれない。

また、一方では、浄土真宗型の求道文学が登場してくる。西欧的なものに触れて、日本的なものを求めた行方が、土俗的なものへの回帰だったのではないか。

〈暴動の形態〉　現在の運動形態の原型が大正時代にあるのではないか。例えば、60年安保騒動の原型は、米騒動である。動員の仕方など、戦後とどのように違うか、同質性と異質性を形態的に研究すると、消費物価をめぐる争議が、賃金をめぐるストライキに、どのように転換してきたか、わかるだろう。

〈文化〉　文明（civilization）と区別して、cultureを文化と訳した。文明は物質的なもので、文化は精神的なものという、ドイツ学派の考えが、大正期、京都学派によってとり入れられた。文明と区別される「文化」という言葉によって、明治の文明と比べて、何が喪失し、何が生まれたのか、問題だ。

大正通史のとらえ方

11月12日

出席者
小松左京
河合秀和
加藤秀俊
他

大正をとらえる一方法として、明治40年（1907）から昭和5年（1930）を前期・後期、または、前・中・後期とブロック化し、各ブロックの中で、各ジャンル別に特徴的な事柄を取り出し、ジャンル相互間の関係をみていくというのはどうだろうか。

日本には、江戸時代以来、文化行政の通史というのがない。仮説だが、徳川幕府は、武家文化という支配階級の文化を設定し、それを保守する以外、何もしなかったのではないか。明治になっても、武家文化and othersという二重構造がずっと続いており大正頃から、くずれはじめたのではないか。くずれはじめた頃に、白樺派や有島武郎などが出てくるのだろう。初期の民衆運動は、内村鑑三にしても、士族出身である。大正になって、士族文化の転換というのがある。そういう意味で、大衆文化の原点というのは、大正時代にあるのではないか。この士族文化はほとんどくずれてしまっても、なお、密教的存在として存続しようとしていたが、戦後になって、完全に、この二重構造は崩壊したといえよう。しかし、二重構造崩壊の影響は、今日にまで及んでいる。establishment classの自己防衛、崩壊への恐怖、不安、はじき出された者のつきあげ、というbehaviorの後遺症がまだ残っているのではないか。

近代国家の創草期（明治）がすんだ後、国づくりの具体的プランが不明のまま、上下が混沌としていた。経済発展をある程度果した後、余った金の使途に困っている「イライラ」、「不機嫌」の状況は、現在とのアナロジーと言えよう。通勤圏の形成、勤め人の考え方、行動様式が出てくるのも、大正である。

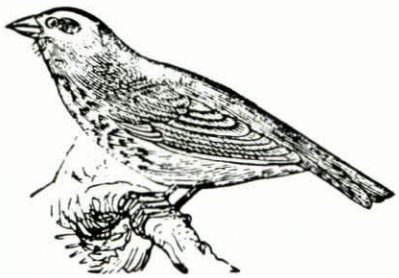
通史的なトピックと同時に、地域性も考慮したい。都市化の裏がえしとして、土に対するコンプレックスがそろそろ出てくる。高度成長で、全国的に文明開化が浸透した結果だろうが、そ

の他に、墓制の変化も影響しているだろう。明治に入って共同墓地になり、石碑が建てられるようになると、わずかながらも、土地を占有しなければならなくなった。日清・日露戦役後は、戦死者も多く、特に墓碑が乱立し、墓地獲得が困難になったのだ。さらに、白樺派などのように、トルストイの影響も無視できない。

土と山岳の問題は、大正時代はおもしろい。大衆文芸の舞台が平地だと集団暴力的になり、山岳だと旅鳥ものになる傾向があるが、大正時代は、もっぱら山岳小説が流行した。柳田民俗学の時代でもあり、『郷土芸術』が創刊された。出版社の創立者の多くが中部山岳出身者であったり、反官軍側の地域出身者に文化の担い手が多かったりしたので、大衆にとって、どのような仕方で国土が発見されていったのか、興味深い。明治以降のローカリティの分担がどのようにおこなわれていたか、各界名士の出身地を調べてみると、地図ができるだろう。

ジャンル

①世界状勢
②外交
③内政
④経済
⑤学問・教育
⑥新聞
⑦出版
⑧芸術・芸能
⑨生活・交通
⑩宗教・民衆運動



インタヴューの方法について

1月28日

出席者

小松左京
加藤秀俊
河合秀和
中村隆英
大正出版
他

大正人のインタヴューをしたい。ここでいう大正人とは、現在70～80歳前後の方で、大正時代に青少年時代を過した人達である。

インタヴューの方法として、次の2つが考えられる。

① 社会業績のある人を呼んで座談会形式でインタヴューする。
② 農業主、商店主等、一般庶民から聴取
　A）都市
　B）地方

①の候補者としては、回想録を話し慣れている人は避けた方がよいだろう。実業界に関しては、商工会議所が、実業 100年をまとめる予定らしい。

②に関しては、昭和40年頃に、東京都民100人を対象に、personal historyの聴きとりをしたものがある。また、加藤研究室には、約30人の庶民のlife historyがある。さらに、「山村の過去と未来」について調査中なので、70歳以上の農民のlife historyも集められるはずだ。

一般庶民といっても、National Goalの意識をもった人に聴くとおもしろい。例えば、第一次大戦後、大学卒の内務省役人が「1事務官1法律時代」と言われるように、専門家になってくる。軍官と文官が分離するのも大正時代なのだ。この内務省役人を対象にした調査、升味準之輔氏によっておこなわれ、すでにまとめられている。軍人の回想録もある。

小・中学校の教師で、すでに引退した人に話をきくと、子供を見ているので、おもしろいだろう。女性にもきいてみたい。

地方都市で、色々な人を集めてきくとおもしろい。広島・八幡・旭川などが考えられるが、卒業後の進路に選択肢のある地域の方がよいだろう。

質問事項

○ 歴史的事件との関わり
○ 世相のうつり変わりをどう感じとったか
○ 最終学校卒業の時期
○ 自分及び学友の就職状況
○ 小学校卒業時のこと、学友の進路
○ 小学校で教わったこと
○ 家庭教育について
○ 懲兵検査のこと
○ 天皇観
○ 少年読物
○ 両親の読んでいた本
○ 家族形態史　三代記
○ その他、子供の時から懲兵検査までの話

大正研究と21世紀

小松左京

明治人が大正をつくり、大正人が昭和をつくったとするならば、大正人は明治から何を受継いだのか、その辺を明らかにしたい。

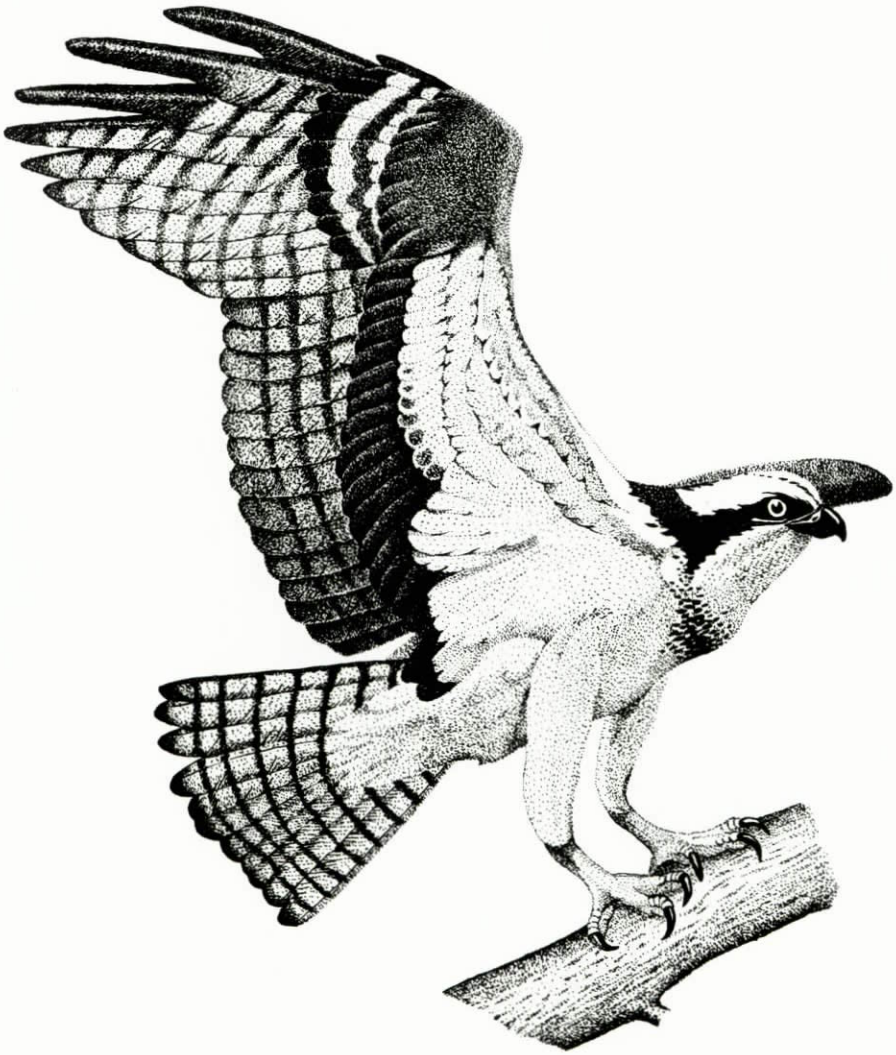
経済高度成長期を終えて、世界経済の中での選択をせまられている今日の日本の状態と大正中期、第1次大戦後の状態が似ている。そのような状態の時に、日本社会がとりやすい「癖」というのが、共通して出ているようだ。大正時代にやっておかなければならなかった事が抽出できれば、21世紀にむけてやらねばならない事につながる。

Ⅳ.事務局から……

生田豊朗

笠井章弘

山田嗣



21世紀フォーラム事始め

生田豊朗

日本エネルギー経済研究所所長

当会が実質的なスタートを切って以来、ちょうど一年たちました。発起人諸先生を中心に、いくつもの部会が設立され、さまざまな分野ですぐれた仕事をされている方々に部会のメンバーとしてお加わりいただき、部会活動が活発にすすめられています。この会を創立することについての“言い出し兵衛”の一人である私としては、誠に感無量の想いが致します。

会の活動がほぼ軌道に乗り、こうして会報が創刊されるにあたり、“言い出し兵衛”の一人としての責任として、この会がどのような経緯の中で生まれてきたかということにつきまして、簡単にお話をさせていただきたいと思います。

現在、私は日本エネルギー経済研究所の所長を務めておりますが、約2年前までは28年間にわたって通産省などの役人をしており、特に最後の3年間は原子力局長を務めました。エネルギーの問題と真正面から取り組むことになったわけです。

今日でこそ、国民のあらゆる人々がエネルギー問題に関してある程度の知識を持ち、また多かれ少なかれ関心を持つようになりましたが、当時はエネルギーの問題はそれほどポピュラーな問題ではありませんでした。私のように、役人を長くしておりますと、1・2年ごとに仕事が変わって、たとえば昨日まで石炭の仕事をしていたのが、今日からは繊維の仕事になるというようなことが日常ですので、新しい分野の仕事に入っていくについて実はあまり抵抗感がないのです。

しかし、それにしてもどうも原子力とかエネルギーの問題はとっつきにくく、とくに専門家の「壁」が厚くて私のような者でもなかなか入り込めませんでした。私ですらがこうした疎外感をもつのですから、一般の人々はもっと強く大きな疎外感をもっているに違いない。この国民一般に広汎に存在している疎外感をなくさない限り、一握りの専門家がいくら真剣に大きな声で議論をしても、エネルギーの問題に関する国民的合意の成立など望むべくもない。この辺に日本のエネルギー問題の最も基本的な問題が潜んでいる。そして、このような状況はひとりエネルギーの問題だけではなく、21世紀に向けて日本がかかえている多くの困難な諸問題に共通しているのではないか、私はこのように考え始めていました。

こうして私は、エネルギーの問題など、わが国が直面しているいくつかの困難な諸問題について、一部のいわゆる“専門家”だけでなく、さまざまな分野の有意の人々が自由に、そして建設的に問題を議論し、問題解決の糸口を探り出すためのいろいろな活動をするような“場”がつくれないものか……ということについて、頭の中であれこれと思案をくり返しておりました。

そうこうするうちにある日、サンケイ新聞の「正論」に、曾野綾子さんが大要つぎのような内容の記事をお書きになったのを読みました。曾野さんが、ある原子力発電所に取材に出向かれたところ、発電所では、専門外の作家には原子力発電所のような難しいものは分からないから、船で発電所のまわりの景色のよいところを案内しましょうといって、結局、曾野さんは取材がほとんど出来なかった。こういうことでは、原子力問題のパブリックアクセプタンス（合意形成）など、とてもおぼつかない……。

私は，曾野さんのこの発言に心から共感しました。そこで曾野さんに、もう一度、今度は私が御案内するから原子力発電所をじっくり見ていただきたいというお誘いの手紙を書きました。これは、役所を辞めたあとになってようやく実現しました。

このことが、私がこのような会づくりを発意するひとつのキッカケとなったわけです。つまり、エネルギーの問題などわが国が直面している困難な諸問題――その解決なしには日本が21世紀にたどり

つけないような———を、それらの問題の“専門家”でないような文化人で、しかもオピニオンリーダーである方々にフリーに考えていただくような“場”が是非必要だ。そのような“場”として適したところは、今わが国にはない。だから今から新たに創り出していかなければならない。このことに私も微力を尽そう……。このように心に決めたのです。

まず着手致しましたのは、このような課題に志のある人々と相談し議論をすることでした。主として若手のジャーナリストや研究者などと何回も集まり、フリー・トーキングを重ねてゆきました。私たちの話は、はじめエネルギーの問題が中心となりました。そしてこれから創設する会の名称も、ギリシャ神話の太陽や火にちなんだ神の名をとって「プロメテウス・クラブ」と仮称していました。

さて、会の設立という事業はとても私ひとりの微力では及びませんので、政策科学研究所の運営をされている笠井章弘さんの全面的協力を得ることになりました。笠井さんと私とで会の設立趣意書をつくり、内田忠夫、加藤秀俊、加藤芳郎、茅誠司、小松左京、曾野綾子、東畑精一、中山伊知郎、松本重治の諸先生に会設立の呼びかけ人になっていただくことをお願いしました。それぞれ大変お忙しい方方であるにもかかわらず、私どもの企画の主旨を良く御理解いただくことが出来、発起人をお引き受けいただきました。無理勝手な私どもの御願いを快くご承諾くださった諸先生に改めて心から御礼申しあげたいと思います。

また、会の運営事務は東畑先生が理事長をされている財団法人政策科学研究所にお引き受けいただき、常務理事をされている笠井さんの指導のもとに、主任研究員の山田嗣さんが事務担当をされ、ワーキング・スタッフも配置することとなりました。そしてさらに、会の運営費用については故木川田一隆先生のご支持ならびに、芦原義重・関西電力会長のご賛同もあって、電気事業連合会が賛助してくださることになり、ここに会設立の準備が万端整うに至りました。

こうして、昨1977年2月24日に第一回目の発起人会議が開催され、会の活動が本格的なスタートを切りました。これまでに数次の発起人会が開かれ、会の目的と性格、活動・事業の方針や計画が検討され、煮つめられてゆきました。

その結果、いくつかの基本的約束事や方針が確認されました。会の性格については、設立趣意書にもあるように———

「人類社会・人間生活の21世紀へ向っての諸問題について考えていく、文化人による開かれた集まり」

という主意が確認され、会の名称も、「21世紀クラブ」とすることになりました。

21世紀クラブの会づくりと活動方針に関しては、大変ユニークな方針が打ち出されました。一般に、このようなボランタリーなメンバー・シップを原則とする集まりの組織づくりは、発起人会の結成——→呼びかけ文（趣意書）起草——→メンバー候補への呼びかけ——→設立総会開催——→会の設立、といった手続きを踏むのが通常のようです。21世紀クラブの発起人会では、このようなとおりいっぺんのやり方ではほんとうの意味の自発性・主体性のあるメンバー・シップを確立することはできない、という認識が確認されたのです。そして、設立総会などを開催する以前に、発起人の諸先生ひとりひとりを中心とするグループ＝部会をつくり、それぞれテーマを設定してグループ・スタディを積み重ねていく、その中で21世紀クラブのアイデンティティを醸成していこうではないか、ということになったわけです。

その後、「21世紀クラブ」という名称は、「21世紀フォーラム」と変更することになりましたが、この会報にもその記録が採録されていますように、現在6つの部会がスタートしており、それぞれ各界のすばらしい方々がメンバーとなって、楽しくも真摯な議論の輪が広がっています。

21世紀までにあとわずか二十余年を残すだけになったいま、世界は、そして日本は、数々の解決困難な問題の挑戦を受けつつ“世紀末の苦悩”のただ中にあります。しかし、人類の無限の英知はこの苦悩を超克し、必ずや輝かしい21世紀を招来させることができるであろうことを、私は信じて疑いません。そして、わが21世紀フォーラムがそのような人類の英知の結集を図るひとつの輪として、広がり深まっていくであろうことを確信します。

（談）

「21世紀フォーラム」の構想

笠井章弘

政策科学研究所常務理事

2年前のある冬の寒い日のことだった。毎日新聞の経済部の寺村荘治君（現ワシントン特派員）が面会を申し込んできた。彼の話しの趣旨は、「エネルギー問題の今後の取りあつかい如何によっては、日本の産業も国民生活も大きなインパクトを受けるはずであるということを、話しとしては誰も否定しないが、しかしいざ発電立地一つをとっても容易に解決しない。これは一体どういうことか？　あなたのご意見を伺いたい。」というものであった。

わたくしは、政策科学研究所が行った社会的合意形成の研究成果を紹介して、社会的実験の政策などを話した。しかし彼は、そのお話はまことに結構だが、より幅広い日本の知識層が果たして日本のエネルギー問題の重要性や深刻さを本当に知っているのだろうか？　と疑問を提出した。そして更に、日本を代表する各界のオピニオン・リーダーと彼が、エネルギーの話をして、エネルギー問題に関する基本的理解に大きな幅があることを発見したという。ここまで話が進んではじめて、わたくしは自分の迂闊さに気付いた。

「君は、一体何のために今日来たの」と聞くハメに立ち到ったのである。

彼のねらいは、各界のオピニオン・リーダーと一緒に、最新の正確な情報をもとにエネルギー問題を考える会をつくりたいことだという。既に、その準備会として数回の会合を持ち、参加して頂く候補者のリストも検討した。しかし実際に会をつくるために、各界のリーダーを説得し、お願いするということで難航して準備会のメンバーや周囲の人たちの意見で、笠井君に頼めといとことになった。だからお願いしますという。その時、わたくしは多忙を理由にお断り申し上げた。

それから約一週間たって、また彼の訪問を受けた。東電会長・故木川田一隆氏からの伝言として、どうしても引受けて呉れという。そして世話人代表をわが研究所の理事長東畑精一先生にお願いして欲しい。さらに、中核となる発起人のメンバーは笠井君に一任するとのことであった。

故木川田一隆氏には、わたくしの前の勤務先・電力中央研究所以来ご指導を預かっていたし、政策科学研究所設立に関してひとかたならぬご協力を頂いている。そして申すまでもなく個人的にもご尊敬申し上げている方でもあり、お断りするわけにはいかない。このような事情から、わたくしは「21世紀フォーラム」の創立に参加させて頂くことになった。

わたくしが参加する以前の準備会には、生田豊朗氏（エネルギー経済研究所長）、今井隆吉氏（日本原子力発電株式会社・技術部長）、依田直氏（東京電力・企画室副室長）、寺村荘治君（毎日新聞・経済部）その他の諸氏が参加されていたと聞く。そして発起人メンバーとして、曾野綾子先生（本誌生田氏の稿のご紹介の通り）、加藤芳郎先生（電事連・正親見一副会長ご紹介）、小松左京先生（電事連・岸田幸一事務局長ご紹介）が決まっておられた。

さて、わたくしの仕事のスタートは、わが研究所理事長・東畑精一先生にご参加をお願いすることからはじまった。しかし、スタートからつまづいてしまった。難関は身近に存在していたのである。東畑先生のサイドに立てばお断りになるのが当然のことかもしれない。日頃大変ご多忙のことは勿論、その上これまた多忙なわが研究所の理事長兼所長もお願いしている。さらにその上にまた一つ新しい会の代表をお願いしようというわけであるから。わたくしの説得が中々奏功せず、余り日がたつので電事連の正親副会長も東畑先生の説得に見えられるという一幕もあった。

しかし、今になって考えてみると、このとき東畑先生を説得するために、アノ手コノ手と考えたこと、それでもなおイエスといって貰えず、まことに巧妙な逃

げ口上（失礼！）を伺いながら、さらに考えたことがこの会の基本的性格を構想する上で大変役立ったという点である。

つまり、それはこういうことである。かつてわたくしが勤務していた電力中央研究所に産業計画会議という組織があった。この組織は電力中央研究所に事務局は所属しているが、会議のメンバーは学界、財界、官界の権威によって構成され日本経済の発展に重要な政策課題を自由にとり上げ、調査研究をおこない、総理大臣はじめ政治・行政の担当者に政策提言を行っていた。電力中研との関係は上記のようなものであったが、扱うテーマは「国づくり、人づくり」の重要課題であって、電力に直接関連するものではない。このような卓抜な発想は、故松永安左エ門氏（電力中研・初代理事長、産業計画会議・理事長）の創造によるものである。よりよい「国づくり」に電力界が貢献することは、電力界の社会的責任を果たすことであり、国の発展はおのずから電力需要の発展につながる。このような、故松永安左エ門氏のフィロソフィーは、故木川田一隆氏にも引きつがれていた。

12年間、わたくしはこの組織にご厄介になった。この経験を生かして東畑先生を説得しようとした。つまり、故松永安左エ門氏のアイディアからの類推で、よりよき「国づくり」のためにエネルギー問題にどのような解決の仕方が要請されるか、という問題のとらえ方である。「21世紀フォーラム」の基本構想は、このようにして形成されていった。

初めエネルギー問題をダイレクトに扱うことを主眼として、この会の仮称も「プロメテウス・クラブ」と名乗った。それが上記のような東畑先生説得の過程で、難関にぶつかりながら、かつて教えを受けた故松永安左エ門氏の産業計画会議の構想を想い出し、その類推から「21世紀クラブ」の構想、つまり21世紀への「国づくり、人づくり」構想をつくり上げていった。そしてこのことが結果として、東畑先生の参加への「イエス」を頂くことにつながったのである。上記のような事情からこの会の運営資金は電気事業連合会が負担し、政策科学研究所が事務局を担当することになった。

「プロメテウス・クラブ」から「21世紀クラブ」への変名の理由は、およそ上記のようなものであった。また、「21世紀クラブ」から「21世紀フォーラム」への転換は、名称のみのものである。これは最近「21世紀クラブ」という別の集団が誕生したためだ。

そして、メンバーの人選については、加藤秀俊先生や生田豊朗氏、依田直氏などと協議して、東畑先生のご了解を頂いた。すなわち、中山伊知郎先生、松本重治先生、茅誠司先生、向坊隆先生、内田忠夫先生、加藤秀俊先生にお願いすることに決めさせて頂いた。なお、既に決まっていた、小松左京先生、加藤芳郎先生をを加えて発起人のメンバーになって頂くことになった。（曾野綾子先生は、事情により発起人を辞退されたが、メンバーとして参加していただくことになった。）

諸先生方は、申すまでもなく各界のトップの方々で、きわめてご多忙なのにもかかわらず、心よく御承諾頂けたことに、衷心より感謝の意を捧げさせて頂きたい。

さて、「21世紀フォーラム」の運営方針は、普通一般のこの種の会とは異なる運営をとらせて頂いている。

発起人がメンバーを集め、創立総会を開き、代表を選び、事業計画を承認する。そしてこの承認された事業計画にもとづ

政策科学研究所
I.P.Sとは…

私たちがいま生きている現代社会は、これまでかつて経験したことのない厳しく重大な多くの挑戦を受けつつあります。

すなわち、環境問題・スタグフレーション・エネルギー問題・資源問題等の諸問題であり、これらは全世界的な広がりを持つと同時に多くの領域にまたがる総合的な問題です。

このような諸問題の解決にあたっては従来のような特定の専門領域からのアプローチはもはや有効性をもちません。

政策科学研究所は1971年10月1日大蔵省、通商産業省認可の財団法人として設立され、創立以来このような挑戦に答えるために、分散した個別専門科学を具体的な問題意識のもとに総合化し、新しい方法論を研究しながら問題解決の有効な方策をさぐり出すという学際的なアプローチを続けております。

主な調査研究活動は、地域開発・土地利用・環境問題・エネルギー資源問題・国際関係・技術開発・経済問題・社会問題・マンパワー・地方行財政方法論の分野に関して総合的に行っており、中立的な非営利研究機関として国や自治体の政策形成に必要な知識および計画を研究・開発し、政策実施機関ならびに社会に対して提言・提供しております。

なお、私どもと同名の政党の政策集団がございますがそれとは関係ございません。

財団法人　政策科学研究所
Institute for Policy Sciences, Japan
〒100 東京都千代田区永田町2－4－11
フレンドビル　3F
電話：03(581) 2141 (代)
理事長　東　畑　精　一

いて会の運営が行われる。これが普通のやり方である。

しかし、わが「21世紀フォーラム」の運営は、発起人の先生方が、各々独自にテーマを選び、部会を主宰し、部会メンバーを選び、部会を運営するという方式をとった。まず、一年間はこの方式でいきたいと考えている。というのは、カネを掛けた立派な創立総会をやり、すぐれた事業計画をつくっても、この種のフォーラムが立派に運営され、成果が期待されるとは考えにくいからである。知的探究へのインセンティブは、おのずから別のところに存在すると想われる。

発起人の先生方が、21世紀への日本の国づくりに、どれだけ関心や寒心をもち、21世紀の日本にどのような愛情や危機をお感じになっているか。そこが問題であると考える。ご多忙な各界の権威ある先生方に、自からイニシアティブをとっていただき、専門や職場を異にした人たちとの自由な意見の交流をはかり、より広い視点に立って問題の分析や、対応の発想を追求して頂く。このような考え方で、「21世紀フォーラム」は、発起人の先生方の自ら主宰する部会活動を中心として運営することにしている。

この方式で1年間やってみて問題が起きれば、部会長の先生方とお計りして改善していくつもりである。

発起人である部会長の先生方が集められた部会メンバーを拝見して、実は大変驚いている。これほど豪華で多彩なメンバーにご参加頂くことができ、感謝すると共に、この種の会のメンバーとしては、まことに珍しい構成と想わざるをえない。

さらに驚いたことは、部会の活動の内容の充実ぶりである。これは本誌にその議事録の要約が掲載されているので、その一端はご了解頂けることと思う。以上のことは、本当はわたくしが驚いていてはいけないことで、よりよい部会活動の発展のための環境づくりに、今後共努力するつもりでいる。

さて、ひるがえって考えてみよう。

上記のような豪華で多彩なメンバーが、「21世紀フォーラム」にご参加頂けたもう一つの理由は、現在がまことに「不確実性の時代」であり、今後の選択の如何によっては、21世紀の日本は大きく変る可能性が高いことの証明でもある。

戦後30年たち、戦後の経済成長を支えてきた制度的フレーム、行動原理、価値観のみによっては、現在挑戦を受けている諸問題の解決に困難を感じさせる。国際社会においても、ニクソン・ショック、オイル・ショック、国際通貨・通商摩擦、新国際経済秩序等々の問題や事件が起こり、今や歴史的転換期の様相を帯びてきた。そして既存の経済・社会システムは、世界的構造変動の荒波をかぶってきたようである。

このようなとき、「21世紀フォーラム」はスタートすることになった。われわれは部会活動を通して、21世紀へかけて挑戦を受ける諸問題の解決のために、どのような羅針盤と海図を発見できるであろうか？

21世紀フォーラム運営の一年

山田　嗣
政策科学研究所主任研究員

当会の第一回目の発起人会が開かれて、会の正式なスタートが確認されたのは、昨'77年2月24日のことでした。それから一年余、今やそれぞれの発起人の先生を〝核〟とする六つの部会が編成され、発起人会—部会—事務局という様態も整い、当「21世紀フォーラム」はいよいよ本格的な自己運動を開始しました。第一回発起人会が開かれるまでに、一年余の準備期間があったわけですから、この会の創設が企図されてから、こうして会が自己運動を始めるまでに、約三年の歳月が流れたわけです。この間、日本エネルギー経済研究所の生田豊朗、政策科学研究所の笠井章弘の両氏を中心的な推進力として、発起人の諸先生と、当会の設立に心から賛同された多くの有志の情熱と創意が惜しみなく傾注されてきました。その経緯については、本誌所収の生田、笠井両氏の記事に詳しいので、当会運営の裏方を担当させていただいた者の立場から、第一回発起人会開催以降、この一年余の「21世紀フォーラム」の歩みについて記録に留めさせていただきます。

さて、昨年2月の第一回発起人会議の後、フォーラムの将来ビジョンを中心に活発な議論が展開されました。つまり、発起人による全体会議の後、そこでの議論を更に深めるため発起人の各先生方と個別に面談をさせていただきました。その結果をとりまとめ、それを議題としてまた発起人による全体会議を開いて検討するというふうに、反復しつつ慎重に議論が進められていきました。その過程の中で、当会の目的と基本的性格のイメージや、活動、事業のあり方、更にメンバー候補者についてなど、実に幅広く豊富な意見が出されました。これらの中から会の目的とメンバーについての主だった意見をアトランダムに列記してみますと、

- エネルギーの重要性・有限性を認識し、エネルギーを大切にするような新しい価値観を生み出す文化運動を行う会。
- 新しい生活の質として知恵のある Simple Life を考えていく会。
- 21世紀の日本を見据え、メンバーの専門性を超えて率直かつ自由に議論し、考えていく新しい形式の研究団体。
- 未来を展望しつつ世界的な視野に立って、エネルギーと人間生活、そして世界と日本について検討し、その成果を広く社会に向けて啓蒙していく会。
- 自由な雰囲気の中でメンバー同士が日本の将来を話し合い、勉強していく文化人の集まり。
- メンバーの旺盛な好奇心と探究心をもとに、率直な疑問、本当に知りたいことを大胆に追求していく〝素人〟の勉強集団。

発起人の諸先生より提出されたこれらのまさに多様なご意見を前にして、私ども事務局ではなかば茫然としてしまったというのが正直なところです。ひとつの組織や団体が意識的な人間の集団としてのまとまりをもつためには、そのまとまりの〝核〟となる集団的アイデンティティの存在が必要なことは常識です。しかし、

そのような常識をもとに前記の如き発起人諸先生の多様なご意見をまとめ上げてしまえば折角の諸先生のご意見とそれぞれの素晴しいご提案が骨抜きになってしまう危険性があります。多様性を損わずに、ひとつのまとまりをもった自由人の集まりを組織するためにはどうしたらいいのか？どのような組織方法があり得るのか？事務局では大いに悩みました。そして、このような問題について本格的に取り組んだ経験を持つ専門家の意見を聞こうではないか、ということになり、笠井氏の知己でもある樋口一夫（博報堂コミュニケーションセンター第一制作室長）、田代裕（同コミュニケーションセンターＰＲ室長）両氏を中心に、竹澤俊男（同計画室ディレクター）、西山達海（同参事）、川辺紘一（コミュニケーション科学研究所）、各氏などにコミュニケーションの専門家の立場からの示唆と協力を得ることになったわけです。事務局メンバーとこれら外部協力者が当会のアイデンティティについてケンケンガクガクの議論を展開したことは申すまでもありません。

こうした発起人会と事務局での議論の展開の中から、次のような組織コンセプトが浮かび上ってきました。すなわち—

- 〝エネルギー問題を含め、人類社会、人間生活のあり方を真剣に考えていく〟という主旨に賛同し、当会の活動に積極的に参画する意志のある人をもって、当会のメンバーシップとする。
- 当会への参画にはまったく個人の資格とその自由意志によって行うものとし、当会はいかなる外部の組織からも自由であることとする。
- 当会の性格づけについては狭く限定せず、発起人諸先生のご意見にある如き豊かな多様性を可能な限り、多様性のままに生かしてゆく方向で組織づくりの努力をする。
- 上記諸点のような考えに立脚して、形式的な組織構成は重視しない。つまり形式的な斉合性よりも実質的な内容性を重視する。

というものです。

こうして、発起人の先生方ひとりひとりを中心とするグループ（部会）による活動—部会活動—を当会の具体的運営の基礎とすること、総会の開催や代表者・役員の選出などは当面行なわれないことなどが確認されました。昨秋より、加藤秀俊部会、加藤芳郎部会、茅誠司部会、小松左京部会、中山伊知郎部会、松本重治部会が相次いで編成され、それぞれのテーマのもとに具体的な部会活動がスタートしていったわけです。

各部会のメンバーとテーマおよびそこで展開されている議論の方向と内容については、本誌掲載の各部会速記録に明らかですが、いずれもきわめて個性的で豊かな内容に満ちたグループです。

加藤芳郎部会は、加藤先生がリーダーや司会者をされているＴＶ番組「ＮＨＫ：連想ゲーム」、「ＮＴＶ：ウィークエンダー」のレギュラーメンバーの皆さんと、加藤先生のご本業の漫画家仲間の皆さんがメンバーを構成しています。日頃、分秒刻みのスケジュールに追いまくられておられる皆さんが、ヒザを交えて「日本の危機」についてケンケンガクガクの様子はまさに壮観と申せます。鋭い問題提起、卓抜な提案など、いわゆる〝専門家〟の集まりでは決して出てこないユニークさです。

「明日のエネルギー」をテーマとする茅誠司部会は、〝エネルギーに関する最新のデータをもとに、各分野のオピニオンリーダーの人々によって、多角的に検討し勉強する〟という当会の初志を最もストレートに受けついだ部会であります。「エネルギーの問題を、産業経済や科学技術の面からのみ考えるのではなく、人間の生活の側面から、根本的に考え直す必要がある」という茅先生のご発想に従い、部会のメンバーは、産業界、経済界、ジャーナリズムの分野の方々、そして家庭、消費生活のあり方を考えておられる御婦人の方を加えて、きわめて、巾広い分野の方々によって構成されています。

中山伊知郎部会のメンバー構成も多士斉々です。それぞれの御専門は、経済学、政治学、文化人類学、社会工学、文学、国際問題、労働問題などに亘り、まさにマルチディシプナリーな構成の中に中山先生のご人選のご苦心が表われています。すべてのメンバーに共通しているのはいずれも我国有数の〝国際人〟であることです。「世界の中の日本」という部会テーマにまさにぴったりの集まりと申せましょう。

いずれ劣らぬ論客ぞろいですから、部会ミーティングでは初めから白熱したきわめてボルテージの高い議論が展開され

ています。議論が深まる中で、21世紀へ向けての日本の進路についての卓越した知見が提出されつつあります。

松本重治部会の特徴は、その〝哲学的雰囲気〟といえるでしょうか。時代を超えた、民族を超えた、そして宗教を超えた、人類の普遍的な〝価値〟というものがあるはずだ、そのような全人類的価値を発見すべく議論を進めてゆくことが、〝21世紀における人間の生き方〟を考えることになるのだ、という松本先生のお考えをもとにテーマが設定され、部会メンバーが選ばれました。第一回目の部会ミーティングでは、自己紹介を兼ねて名メンバーが人間や社会について日頃考えている事、そして現在最も真剣に取り組んでいる仕事などについて自由に語る、というかたちで進められましたが、これはメンバーの一人の前田陽一先生をして「いきなりエンマ様の前で自分の人生について語れ、と言われたようだった」と述懐させるほどに真摯なお話が展開されたのでした。

小松左京部会と加藤秀俊部会は、言わば〝研究プロジェクト型〟の部会とでも申せましょうか。小松部会のテーマは、「大正文化研究」。小松先生が以前から追求されているテーマで、現代日本の諸問題の芽はほとんど大正期に出現しており、それを深く研究することが21世紀へ向けての日本の問題を根元的に考えてゆくことにつながる、というのが小松先生の発想です。

加藤秀俊部会では「農村の未来」というテーマのもとにフィールド・スタディが展開されています。日本の未来を考えてゆく際、中央志向・都市中心志向だけではならない。地方から、そして農村から日本の過去と未来を考えてゆくことによって、21世紀へ向けての日本についての新しい重要な視点が得られるに違いない、というのが加藤秀俊先生の主張です。そして、部会ミーティングも、可能な限り農山村に出かけて行っての〝現地部会〟方式をとることが確認され、実施されています。

こうして、「21世紀フォーラム」の活動も第二年度目に入りました。ようやく会運営の基本的な軌道も定まり、名実ともに〝文化人の自由なフォーラム〟としての会のイメージがはっきりと浮び上ってきました。

顧りみれば、私ども会運営の裏方を担わせていただいてきた者にとっては、この一年間はまさに試行錯誤の連続でした。

しかし、〝各分野の一流のオピニオンリーダーの方々の全き自由な自発性と意志にもとづいて、メンバーシップを組み、21世紀へ向けての日本の諸問題を真剣に考えてゆく集まりをつくる〟という会づくりの理念がほとんど損われずに、「21世紀フォーラム」のアイデンティティ形式が実現し、ひとつのまとまりをもった会として力強く歩み出すことが出来ました。いまのところ、会長や理事などの役員もなく、会の規約もありません。にもかかわらず、60人以上の各界の一流人士をメンバーとして擁し、それぞれ特色のある6つの部会（近々、向坊隆部会が発足の予定で7部会となります）がダイナミックな活動を展開しています。形式を重んじる日本社会の中にあっては、当会はまことに稀有でユニークな集まりと申せましょう。

このような会が成立し得たのは、ひとえに発起人諸先生をはじめ、各部会メンバーの方々の熱意と人類社会の日本の未来についての憂情が然らしめたものと思います。

「21世紀フォーラム」はようやく独り歩きを始めたとは申せ、まだ呱呱の声をあげたばかりです。各メンバーの方々のご協力のもとに、当会を大きく育ててゆくべく、今後、私どもは微力を尽してゆく覚悟です。

21世紀フォーラム
設立趣意書

内田忠夫

加藤秀俊

加藤芳郎

茅誠司

小松左京

東畑清一

中山伊知郎

松本重治

向坊隆

いま、われわれが生きているこの現代社会は、人類史上かつて経験したことがないほどの物質的豊かさを実現しながら、同時に未曾有の困難な諸問題の挑戦を受けています。

資源・エネルギー問題、食糧問題、環境問題、福祉問題、教育問題……、南北問題、国際経済問題、そして世界の戦争と平和の問題などです。

これらの問題群は、多かれ少かれ世界のあらゆる国々が直面しつつあるものですが、狭い国土と、とぼしい資源しか持たないわが国にとっては、問題の困難さと深刻さにおいてまことに格別のものがあります。

人類社会は、そして日本は20余年後に迫る21世紀に無事たどりつくことができるのでしょうか。

人類の未来を確保するためには、ひとびとはいま、何を、いかなる視点からどのように考えるべきでしょうか。そして、どのようにみずからの生活を律し、かつわれわれの社会を、国を歩ませてゆくべきでしょうか。

私たちは今こそ、みずからの未来——21世紀について、それぞれの分野を超えて、真剣に、深く考え、大胆に発言してゆかねばならないと考えます。

このような考えをもとに、私たちは人類社会・人間生活の21世紀へ向っての諸問題について考えてゆく、文化人による開かれた集まりをつくる決意をしました。

この集まりでは、エネルギーと人間生活の問題などに関し、21世紀を展望しつつ、ともに考え、勉強し、意見を交わし、問題を提起してゆきます。

そして、この集まりの問題意識と、人間のつながりと行動の輪　次第に拡げ、わが国の各分野のひとびとや、さらには外国のひとびととも語り合い、勉強し合ってゆきたいと思います。

来るべき21世紀を展望しつつ、わが国と人類社会のあり方を考えるひとびとの集まりという意味をこめて、この集まりを——『21世紀フォーラム』と称することとします。

1978年4月

21世紀フォーラム発起人会

内田　忠夫
加藤　秀俊
加藤　芳郎
茅　誠司
小松　左京
東畑　精一
中山　伊知郎
松本　重治
向坊　隆

（五十音順）

「21世紀フォーラム」部会メンバー 一覧

発起人

内田　忠夫（うちだ　ただお）

東京大学教養学部教授。
計量経済学。経済学博士。

加藤　秀俊（かとう　ひでとし）

学習院東洋文化研究所所長兼同大学法学部教授。
'69年～'70年京大教育学部助教授。社会学。

加藤　芳郎（かとう　よしろう）

漫画家。漫画家協会理事。
作品「まっぴら君」「オンボロ人生」他。
テレビ「連想ゲーム」「ウィークエンダー」等出演。

茅　誠司（かや　せいじ）

東京大学名誉教授。日本学士院会員。
'54年～'57年日本学術会議会長。'57年～'63年東大総長。金属物理学。理学博士。

小松　左京（こまつ　さきょう）

作家。学習院東洋文化研究所客員研究員。
著書『日本アパッチ族』『日本沈没』等。

東畑　精一（とうはた　せいいち）

東京大学名誉教授。(財)アジア経済研究所顧問。(財)政策科学研究所理事長。
'60年～'68年アジア経済研究所所長。'65年～'74年税制調査会会長。

中山　伊知郎（なかやま　いちろう）

一橋大学名誉教授。日本労働協会会長。
'49年～'56年一橋大学学長。'50年～'60年中央労働委員会会長。ILO総会日本代表。理論経済学。

松本　重治（まつもと　しげはる）

(財) 国際文化会館理事長。
'33年～'39年新聞聯合上海支局長。'52年に財団法人国際文化会館を設立。'52年～'70年専務理事。著書『上海時代』等。

向坊　隆（むかいぼう　たかし）

東京大学総長。国連；開発への科学技術適用諮問委員会（ACAST）委員。
'54年～'58年駐米日本大使館科学アタッシェ。'76年～'77年原子力委員会委員。応用化学。工学博士。

加藤秀俊グループ

加藤　秀俊（かとう　ひでとし）

（発起人の欄に同じ）

宮本　常一（みやもと　つねいち）

(財)日本常民文化研究所理事。武蔵野美術大学教授。
著書『宮本常一著作集』『日本民衆史』等。
民俗・民族学。文学博士。

米山　俊直（よねやま　としなお）

京都大学教養学部助教授。
著書『日本人の仲間意識』『文化人類学の考え方』等。文化人類学。

加藤芳郎グループ

加藤芳郎（かとう　よしろう）

（発起人の欄に同じ）

青空　はるお（あおぞら　はるお）

テレビタレント。
'60年コロンビア・トップ入門。現在フリー。
テレビ「ウィークエンダー」等出演。

青空　うれし（あおぞら　うれし）

漫才。
歌謡曲の司会を経て、その後漫才。テレビ「ウィークエンダー」等出演。

天地　総子（あまち　ふさこ）

歌手・タレント。
テレビ「連想ゲーム」「おていちゃん」等出演。

大山　のぶ代（おおやま　のぶよ）

俳優。
テレビ「ほおづきの歌」「ウイークエンダー」等出演。

大和田　獏（おおわだ　ばく）

俳優。
映画「あにいもうと」等、テレビ「たんぽぽ」「連想ゲーム」等出演。

加治　章（かじ　あきら）

NHKアナウンサー。
'63年NHK入局。以来、NHKアナウンサー。

小島　功（こじま　こう）

漫画家。
作品「仙人部落」「あひるが丘77」「うちの嫁さん」他。

砂川　啓介（さがわ　けいすけ）

俳優。
江口隆也モダンダンス門下。テレビ「歌のえほん」「おはようセブン」他、出演。

鈴木　義司（すずき　よしじ）

漫画家。漫画集団所属。
第15回文芸春秋漫画賞。作品「サンワリ君」「キザッペ」「今週の義司」他。

田崎　潤（たざき　じゅん）

俳優。
新生喜劇座、劇団たんぽぽ、東宝を経る。
テレビ「さらば浪人」「連想ゲーム」、映画「下郎の首」「肉体の門」等出演。

檀　ふみ（だん　ふみ）

俳優。慶応義塾大学経済学部在学。
映画「あいつと私」、テレビ「俺たちの祭り」「連想ゲーム」等出演。

坪内　ミキ子（つぼうち　みきこ）

俳優。
山中プロモーション所属。映画「悪名」「影を斬る」、テレビ「太閤記」「連想ゲーム」「3時のあなた」等出演。

水沢　アキ（みずさわ　あき）

俳優。
テレビ「若い先生」「ちんどんどん」「連想ゲーム」等出演。

三橋　達也（みはし　たつや）

俳優。
映画「軍閥」「トラトラトラ」、テレビ「おしゃれ」「連想ゲーム」等出演。

ロミ　山田（ろみ　やまだ）

歌手・俳優。
レコード「マリコ」「知りすぎたのね」、テレビ「春のもつれ」「契りきぬ」「連想ゲーム」等出演。

「21世紀フォーラム」部会メンバー 一覧

茅誠司グループ

茅　誠司（かや　せいじ）

（発起人の欄に同じ）

有澤　廣巳（ありさわ　ひろみ）

（社）日本原子力産業会議会長。日本学士院会員。東京大学名誉教授。総合エネルギー調査会会長。

'59年～'62年法大総長。経済学。経済学博士。

生田　豊朗（いくた　とよあき）

（財）日本エネルギー経済研究所所長。

経済企画庁官房企画課長、中小企業庁指導部長、科学技術庁原子力局長歴任。

内田　忠夫（うちだ　ただお）

（発起人の欄に同じ）

大熊　由起子（おおくま　ゆきこ）

朝日新聞科学部記者。

'63年朝日新聞入社。社会部を経て'65年科学部記者。著書『核燃料―探査から廃棄物処理まで』等。

岡村　和夫（おかむら　かずお）

NHK解説委員。

'63年NHK政経部副部長。'66年～NHK解説委員。

尾関　通允（おぜき　みちのぶ）

日本経済新聞記事審査委員。

'48年日本経済新聞社入社。証券部、経済部を経て'56年～'59年ドイツ特派員。'59年～'77年論説委員会勤務。論説副委員長、副主幹歴任。著書『日米通商の将来』等。

金森　久雄（かなもり　ひさお）

（社）日本経済研究センター理事長。

'64年経済企画庁内国調査課長。'64年～'66年度『経済白書』の執筆責任者。'70年経済企画庁経済研究所次長。

木元　教子（きもと　のりこ）

フリーの司会者。

TBSアナウンサーを経て、「小川宏ショー」「3時のあなた」「暮らしとあなた」等出演。

斉藤　志郎（さいとう　しろう）

日本経済新聞論説委員。

'52年日本経済新聞社入社。'61年～'64年ロンドン支局長（特派員）。'67年～論説委員。

三枝　佐枝子（さえぐさ　さえこ）

評論家。商品科学研究所所長

'46年中央公論社に入社。'58年婦人公論編集長を経て'68年まで中央公論社編集局長。

高原　須美子（たかはら　すみこ）

評論家。

毎日新聞「エコノミスト」編集部。'62年退社。フリーで経営評論。共著『生活設計のすすめ』他。

富舘　孝夫（とみだて　たかお）

（財）日本エネルギー経済研究所研究部第一研究室長。

'60年～'68年ジャパンタイムズ記者。

中村　貢（なかむら　みつぐ）

朝日イブニングニュース社代表取締役社長、主筆。

'45年朝日新聞入社。ワシントン支局長、ヨーロッパ総局長を経て、編集局次長、研修所所長。

橋口　収（はしぐち　おさむ）

公正取引委員会委員長。

'67年内閣官房内閣審議室長兼内閣総理大臣官房審議室長。'73年主計局長。

'74年国土事務次官等歴任。

深海　博明（ふかみ　ひろあき）

慶応義塾大学経済学部教授。

'68年～'69年イギリスLSE留学。国際経済学。経済学博士。

松根　宗一（まつね　そういち）

大同特殊鋼相談役。経済団体連合会常任理事。総合エネルギー調査会委員。

'32年～'40年電力連盟書記長、電気事業連合会副会長歴任。

村田　浩（むらた　ひろし）

日本原子力研究所理事長。原子力委員会専門委員。

'64年科学技術庁原子力局長。'67年動力炉・核燃料開発事業団理事。

小松左京グループ

小松　左京（こまつ　さきょう）

（発起人の欄に同じ）

河合　秀和（かわい　ひでかず）

学習院大学法学部教授。

東大法学部卒。オックスフォード大学留学。比較政治論。

中村　隆英（なかむら　たかふさ）

東京大学教養学部教授。経済企画庁経済研究所所長。

日本経済論。統計学。

中山伊知郎グループ

中山　伊知郎（なかやま　いちろう）

（発起人の欄に同じ。）

江藤　淳（えとう　じゅん）

評論家。東京工業大学工学部教授。

'62年『小林秀雄』で新潮社文学賞受賞。著書『瀬石とアーサー王伝説』等。日本芸術院賞受賞。文芸評論、文学博士。

大来　佐武郎（おおきた　さぶろう）

（社）日本経済研究センター会長。

'48年～'51年『経済白書』執筆責任者。72年海外経済協力基金総裁。国連；ピアソン委員会、OECD、各顧問。国際経済論。経済学博士。

篠原　三代平（しのはら　みよへい）

成蹊大学教育学部教授。アジアクラブ理事長

'62年一橋大学経済研究所教授。'70年経済企画庁経済研究所所長。日本経済論。経済学博士。

滝田　実（たきた　みのる）

アジア社会問題研究所理事長。国際交流基金監事。

'48年全繊同盟会長。'54年全労会議の初代議長。'65年国際自由労連副会長。'68年

～'71年同盟会長。

堤　清二（つつみ　せいじ）

（株）西武百貨店会長。（株）西友ストアー社長。

東大経済学部卒。詩人。（ペンネーム　辻井喬）。著書『異邦人』『宛名のない手紙』等。

中根　千枝（なかね　ちえ）

東京大学教授（東洋文化研究所、社会学系大学院文化人類学主任）。国際人類学民族学会副会長。

東大東洋史学科卒。著書『タテ社会の人間関係』『家族の構造』等。社会人類学。

林　雄二郎（はやし　ゆうじろう）

（財）未来工学研究所副理事長。（財）トヨタ財団専務理事。

経済企画庁調査局海外調査課長、総合計画局参事官、経済研究所所長歴任。'42年～'50年東工大教授。著書『情報化社会』等。

松山　幸雄（まつやま　ゆきお）

朝日新聞論説委員兼編集委員。

朝日新聞ワシントン特派員、ニューヨーク支局長、アメリカ総局長歴任。著書『日本診断』等。

ロベール・バロン

上智大学経済学部教授。

ベルギー生まれ。ルーバン大学法学部哲学専攻。'48年来日。

松本重治グループ

松本　重治（まつもと　しげはる）

（発起人の欄に同じ）

川喜多　二郎（かわきた　じろう）

川喜多研究所所長。

'61年～'70年東工大教授。著書『ネパール・ヒマラヤの民族地理研究』『山地マガール族の研究』『ネパール王国探検記』等。文化人類学。理学博士。

永井　道雄（ながい　みちお）

朝日新聞客員論説委員。

'54年京大教育学部助教授。'63年東工大教授。'70年朝日新聞論説委員。'74年三木内閣文相。教育社会学。

中村　元（なかむら　はじめ）

東方学院院長。東京大学名誉教授。

（財）東方研究会理事長。日印文化協会会長。インド官立梵語大学名誉会員。'77年文化勲章受賞。仏教哲学。文学博士。

本間　長世（ほんま　ながよ）

東京大学教養学部教授。

'53年東大教養学部卒。著書『リンカーン』等。アメリカ史、アメリカ論。

前田　陽一（まえだ　よういち）

（財）国際文化会館専務理事。東京大学名誉教授。

'51年東大教養学部教授。'72年中央教育審議会副会長。著書『パスカル―「考える葦」の意味するもの』等。

槇　文彦（まき　ふみひこ）

建築家。槇総合計画事務所代表取締役。

'52年東大建築学科卒。'56年ワシントン大学助教授。'58年グラハム国際美術賞受賞。'66年ハーバード大客員教授。'60年作品「名古屋大学豊田記念講堂」等。

武者小路　公秀（むしゃこうじ　きんひで）

国連大学副学長。

'67年学習院大学教授。'68年上智大学教授。'76年より国連大学副学長。著書『国際政治と日本』等。

村上　兵衛（むらかみ　ひょうえ）

（財）日本文化研究所専務理事。

'50年東大独文科卒。『新思想』同人。著書『日本を創る表情』『桜と剣』等。文芸評論。

柳瀬　睦男（やなせ　むつお）

（学）上智学院理事長。

'57年カトリック司祭。'63年上智大学教授、副学長、（学）上智学院理事長。著書『空間と時間』『観測の理論』等。科学基礎論。理学博士。

●事務局

笠井　章弘（かさい　あきひろ）
（財）政策科学研究所常務理事

生田　豊朗（いくた　とよあき）
（財）日本エネルギー経済研究所所長

依田　直（よだ　すすむ）
東京電力(株)企画室副室長

山田　嗣（やまだ　あきら）
（財）政策科学研究所主任研究員

浜田　崇（はまだ　たかし）
（財）政策科学研究所研究員

●ワーキング・スタッフ

竹澤　俊男（たけざわ　としお）
(株)博報堂コミュニケーションセンター計画室ディレクター

金子　保人（かねこ　やすひと）
(株)博報堂コミュニケーションセンターPR室ディレクター

西山　達海（にしやま　たつみ）
(株)博報堂コミュニケーションセンターＰＲ室参事

川辺　紘一（かわべ　こういち）
(株)コミュニケーション科学研究所

「21世紀フォーラム」会報（第０号）

●発行日……1978年 6月30日

●発行人……笠　井　章　弘

●編　集……「21世紀フォーラム」事務局会報編集部
〒100 東京都千代田区永田町 2-4-11 フレンドビル3F
財団法人　政策科学研究所内　☎(03)581-2141

2o1ne